

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	3~	自宅	曇天の日	「僕」	クラスメイトの山内桜良の葬儀が行われた。「僕」は自室にこもり、桜良に借りた本を読んでいる。決してさびしさや空しさからの行動ではない。 二日ぶりに携帯を触ると、最新の送信履歴を確認する。『君の臍臓を食べたい』その言葉が彼女が見たのかどうか、見たとしてどう受け取ったのかもわからない。	なし
2	6~	学校の図書室の書庫 ほこりっぽい空間	七月	【秘密を知ってるクラスメイト】くん・桜良	「君の臍臓を食べたい」桜良は突然おかしな告白をする。「昔の人はどこか悪いところがあると、他の動物のその部分を食べた」らしい。真面目に無表情で仕事をこなす「僕」に対して、桜良は様々な話をしながらうわははっと笑う。とても重い臍臓の病気を抱えていて、もうすぐ死ぬ人間とは思えない。	「なんだあ、【秘密を知ってるクラスメイト】くんも私にちゃんと興味持ってくれてるんだねえ」（桜良） 「臍臓は、消化と、エネルギー生産の調整役だ。例えば糖をエネルギーに変えるためにインスリンを作ってる。もし臍臓がないと、人はエネルギーを得られなくて死ぬ。だから君に臍臓をご馳走することはできないんだ。ごめんね」（「僕」）
3	9~	図書室	2の続き	【秘密を知ってるクラスメイト】くん・桜良・先生	仕事のお礼に先生がお茶とお菓子をくれた。先生は進路について二人に訊ねる。「将来」のない桜良は、「気を抜いてると、私と同年になってるかもしれないわよ」という先生に「うわははっ、それはないですよー」と明るく返す。桜良の命が長くないことは、この場では「僕」と桜良だけが知っていた。	（進路を）「私はまだ考えてないですねー、まだっていうかもうっていうか」（桜良） 「僕もまだ、です」（「僕」）
4	11~	下駄箱 校門	3の続き	【秘密を知ってるクラスメイト】くん・桜良	彼女は人気者で、「僕」とは正反対の人間だ。クラスメイトからの扱いもまるで違う。そんな「僕」に対して、桜良は「どうしてもっていうなら【秘密を知ってるクラスメイト】くんに残り少ない私の人生の手助けをさせてあげてもいいよ」と、日曜日に一緒に出掛ける約束をむりやり取り付けた。	「私も君も、もしかしたら明日死ぬかもしれないのにさ。そういう意味では私も君も変わらないよ、きっと。一日の価値は全部一緒なんだから、何をしたかの差なんかで今日の価値は変わらない。」（桜良）
5	16~	病院	（回想）四月	「僕」・桜良	「僕」が盲腸の抜糸のため病院を訪れたとき、ロビーの隅に一冊の本が置かれていた。『共病文庫』と書かれたその本は日記のようになっており、書いた本人が臍臓の病気であること、あと数年で死んでしまうことが綴られていた。「あの……」声をかけられて顔をあげると、そこには同級生の桜良の姿があった。驚いたが表情には出さなかった。どうやらこの『共病文庫』は彼女のものであるらしい。 「皆には内緒にしてるから、クラスで言わないでね」そう言った桜良は、次の日から学校で会う度に声をかけてくるようになった。	「書いてあるのは本当、私は臍臓が使えなくなって、あとちょっとで死にます、うん」（桜良） 「……いや、クラスメイトにもうすぐ死ぬって言われて、なんて言えばいいの？」（「僕」）
6	21~	駅 焼肉屋	日曜日の午前十一時	【秘密を知ってるクラスメイト】くん・桜良	「おっはよー、すっぱかされたらどうしようかと思ったよー」待ち合わせ場所に向かうと、上機嫌な桜良がいた。僕とは違い、砕氷艦のように自ら道を切り開く彼女に、立ち向かう草舟は利口じゃない。草舟よろしく、「焼肉が食べたい」と言う桜良に連れられて焼肉屋に向かう。いちいちテンションの高い桜良。その明るいテンションのまま自分の葬式のことについて明るく語る。一通り食べ切った後、桜良はお金を使いきらなきゃだめだからと、「僕」の分まで会計を済ませる。	「え、その程度の感動？めちゃくちゃ美味しくない？私がもうすぐ死ぬから感傷でそう思ってるのかな？」 「【秘密を知ってるクラスメイト】くんは私の前で悲しそうな顔しないし。もしかしたら家では泣いてくれる？」（桜良） （「臍臓は君が食べてもいいよ」という桜良に対して） 「君は臍臓のせいで死んでいくんじゃないか。きっと君の魂の欠片が一番残ってる。君の魂はとても騒がしそうだ」（「僕」）
7	33~	ショッピングセンター カフェ	6の続き	【秘密を知ってるクラスメイト】くん・桜良	悪戯好きな彼女は、「自殺用のロープ」だと言って、ロープを購入する。彼女はいつも何かしらポジティブな様子を体にたたえている。 その後、カフェに入る。自分のことを話すのが好きではない「僕」に対して、桜良は「私は、君のことに興味がある」といって少し怒ったように答える。友達がいた記憶がない「僕」のことを一通り語ったあと、社交辞令で桜良のこともについても質問をする。彼氏がいるなら今すぐその彼氏と過ごした方がいいと。しかし、ついこの前に別れたらしい。「神様が最初からタグ付けしといてくれればいいのにね。この人は友達専用、この人は恋人でもいいよって」桜良はそうこぼした。	「私は、君のことに興味があるって言ってるの。私は興味がない人を遊びに誘ったりしない。馬鹿にしないで」（桜良） 「誰も興味がないだろうことを、へらへら自意識過剰に喋りたくないんだ」 「君は僕とは反対の人だから、僕が思いそうにないことを、君が思っているのだろうなと。それを口にしたら、当たってた」（「僕」）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
8	44~	駅 帰り道	7の続き	【秘密を知って るクラスメイ ト】くん・桜良	一日、こうして彼女と過ごしていると、昨日までは心の表面に浮かびあがっていた死とか消失への逃れ得ぬ恐怖が、少しだけ沈んでしまっていた。この日、僕は彼女が死ぬことを少しだけ信じられなくなった。 『死ぬまで仲良くしてね!』というメールの一文を見て気付く。 そうか、僕らは仲良くしてるのか。 僕も今日、少しだけ楽しかった。 反対側の彼女は、何をしているんだろうか。	『おつかれー!　メールしてみたよ、届いてるかな? 今日付き合ってくれてありがとね〔ピース〕　凄く楽しかったよ!〔笑顔〕　また私がやりたいことに付き合ってくれたらとても嬉しいよ〔笑顔〕　死ぬまで仲良くしてね!　じゃあおやすみー〔笑顔〕　また明日ー』 (桜良　メール)
9	45~	学校	翌日	【仲のいいクラ スメイト】く ん・桜良	クラスメイトに桜良と出かけていたことが伝わっているらしく、視線が集まっているが気がつかないふりをする。夜中に隣の県で通り魔による殺人事件が起きたらしいが、そのことについては全く話題に上がっていなかった。クラスメイトに「僕」との関係を訊ねられた桜良は、「仲良しなの」と答えた。 放課後、お昼ごはんを食べに行こうと桜良に誘われる。昨日が「少し楽しかった」という本心もあり、仕方なく、人助けのために、了承する。どこに行くのかという質問に「パラダイスだよ」と答える桜良を見て、高校生の女の子から命を奪うこんな世界に「パラダイス」などあるのだろうか、と「僕」は不思議に思った。	「誤魔化さなくてもいいでしょー。大事なのは中身の本当のことって昨日言ってたくせに」(桜良) 「じゃあ、人助けのために付き合ってもいいよ」 (「僕」)
10	52~	スイーツバイキン グ	9の続き	【仲のいいクラ スメイト】く ん・桜良・キョ ウコ	「そういえば、殺人事件怖いね」席について、桜良がその話題を口にする。普通に生きている皆は、生きるとか死ぬとかにあまり興味がないから誰も話題にしないのかもしれないと桜良は言い、「僕」もそれに納得する。そのあと、桜良は「僕」の初恋の人がどんな人だったか質問をする。「僕」は、何にでも『さん』、をつける奥ゆかしい人だったと答えると、逆に桜良が恥ずかしそうにしていた。結局、その人は別の人と付き合ったと言うと、桜良は「へえ、人を見る目がないね」と答えた。 途中、桜良の親友のキョウコに出会う。「僕」に不審な目を向けるキョウコ。桜良に「僕」との関係を聞いただと、「仲良し、かな」と彼女は答えた。キョウコにも病気のことは伝えていないらしい。だんだん彼女が死ぬという事実が信じられなくなった「僕」は桜良に訊ねる。「ねえ、君はさ」「本当に死ぬの?」 彼女の表情が、一瞬消えた。 「死ぬよ」彼女の言葉は、きちんと「僕」の鼓膜に届いてしまった。	「死に直面してよかったことといえば、それだね。毎日、生きてるって思って生きるようになった」 (親友に病気のことを言わなくていいのかと聞かれ) 「いいのいいの!あの子、感傷的だからさ、言ったらきっと私と会う度に泣いちゃうもん。そんな時間、楽しくないでしょ?私は私のために、ギリギリまで周りには隠す、もう決めたの。」 「【仲良し】くんにしか話さないよ。君は、きっとただ一人、私に真実と日常を与えてくれる人なんじゃないかな。お医者さんは、真実だけしか与えてくれない。家族は、私の発言一つ一つに過剰反応して、日常を取り繕うのに必死になってる。友達もきっと、知ったらそうなると思う。君だけは真実を知りながら、私と日常をやってくれるから、私は君と遊ぶのが楽しいよ」(桜良)
11	67~	帰り道	10の続き 夕方	【仲良し】く ん・桜良	今年の夏、彼女にとっては最後の夏、何をしようかと桜良は思案する。「生きてるんだから恋をしないとね」という桜良に、「簡単に言うと、君はまだ恋人を作る気があるってことだね」と返すと、彼女は突然立ち止まった。 「……恋人を作る気があるって言ったら、どうにかしてくれるの?」その真意が分からなかった「僕」は、「どうにかしてくれるって、何を?」と訊ねかえすと、「……ううん、いいの」と、また歩き出した。彼女の顔色は、さっきの複雑さも消えてすっきりした笑顔に戻っていた。	「私はやっぱり海とか花火とかお祭りかなあ、あと、ひと夏のアバンチュール!」 「いいじゃん、小説じゃないんだから、私の発言に全て意味があると思ったら大間違いだよ。別に意味ないの。 【仲良し】くんはもうちょっと人間と接しなさい」(桜良)

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
12	71~	学校	二日後	【仲良し】くん・桜良・クラスメイト	『共病文庫』とは、つまるところ彼女の遺書だ。自分が死んだ後に軌跡として残す価値のあることだけを彼女は『共病文庫』にまとめている。 「僕」の名前について、『共病文庫』に登場させないでほしいと頼んだ時の返事は「私が書いているんだから勝手にさせろ」だった。 学校では小さな変化が起きていた。「山内と付き合っ てんの？」と無粋に訊ねてきたクラスメイトに「違 よ、断じて」と「僕」は答える。いつも掃除をさぼっ ている彼だが、ちりとりを頼むと「まかせろ」と言っ て素直に手伝ってくれた。案外頼めばきっちりとやっ てくれるのかもしれない。 もう一つの変化は、文庫本に挟んでおいたはずのし おりをなくしたことだ。このことは少し「僕」を憂鬱 にさせた。	「よう【地味なクラスメイト】あ、お前、山内と付 合ってんの？」（クラスメイト）
13	75~	家	水曜日の夜	【仲良し】くん・桜良	平常の崩壊、その序章となったのは、ある一通のメ ールだった。『電車で遠出したいと思います！』とい う桜良。行きたいところはあるかと訊ねられ、『君が 死ぬ前に行きたいところに行けばいい』と返事をす ると、『絶対約束やぶっちゃ駄目だよ？』と桜良から 念押しのメールが届いた。	『絶対約束やぶっちゃ駄目だよ？』（桜良）
14	76~	駅	早朝	【仲良し】くん・桜良	早朝、待ち合わせ場所に向かうと、まるで旅に出る ような恰好の桜良がいた。「僕」の格好を見て、軽装 過ぎだよ！と言う桜良。「僕」の心に不穏がぎざした。 桜良は新幹線や駅弁がどうだという話を続ける。「新 幹線？駅弁？ちゃんと説明して、今日何をする気なの ？」と訊ねる「僕」。桜良の見せたチケットを見て目 を見開く。日帰りでいける場所ではない。「日帰りじゃ 、ないよ」桜良はそう言って、最後には「僕」は桜良 に押し切られる形で新幹線に乗ることになった。	「そうじゃないよ、日帰りじゃ、ないよ」（桜良）
15	78~	新幹線	14の続き	【仲良し】くん・桜良	「そういえば、【仲良し】くんって、下の名前なん だっけ？」と桜良に訊ねられる。「僕」の名からは、 苗字と名前ですれぞれ二人の作家を連想させる。本を よく読む「僕」に対して、桜良はあまり本は読まない らしい。 一時間ほどすると、桜良は眠ってしまっていた。その 寝顔からは、とても大病が巣食っているとは思えない。 ほっぺをつねっても鼻をつまんでもなかなか彼女は起 きず、持っていた輪ゴムで手の甲に攻撃を加えたところ で彼女はオーバーリアクションで飛び起きた。そして、 「もっと呼びかけるとかあるでしょう！」と「僕」の 肩をグーで殴った。	「キョウコと旅行してくるって言ったの。私の両親、 私が最後にしたいことがあるって言ったら、大抵涙ぐ んで許してくれるんだけど、流石に男の子と旅行はね ー、分かんないからさ」（桜良） 「僕は両親に心配をかけないように、友達がいるって 嘘ついてるからさ。友達の家に泊まるって言うよ」 （「僕」）
16	82~	終点神社	15の続き	【仲良し】くん・桜良	到着するなり、ラーメンの匂いがするとはしゃぐ桜 良。冗談を言い合いながら、改札を出る。まずはお屋 ごはんにラーメンを食べてから、電車で「学問の神様」 に会いに行くことにした。 この件では発砲事件も多いらしい。そういえば隣の 県の通り魔事件もニュースで見なくなった。 神社には30分ほどで到着した。神様の前で参拝する ような決意もなにも持っていなかった「僕」は、〈彼女 の臍臓が治りますように〉とお願いをした。気づけば、 「僕」は彼女よりも長く祈っていた。君は何を祈った のかと訊ねると、「死ぬまで元気でいられるように」と 祈ったという。彼女はいつも僕の思いを踏みにじる。彼 女には「僕」の願ったことについては言わなかった。	「腐ってるのは臍臓ですう」 「高貴な人達なめんな。運動しなよー、病人の私と同じ くらい汗かいてんじゃん」（桜良） （鼻腐ってんじゃないの？に対して）「君みたいに脳 じゃなくてよかったよ」 「その必殺技、卑怯だからこれから禁止にしよう。不 公平だ。」 （運動部にいたことは）「ないよ。ほら、高貴な生まれ だから体を動かさなくてもいいんだ」（「僕」）
17	88~	神社	16の続き	【仲良し】くん・桜良	おみくじを引いた。彼女のおみくじには「大吉」の文 字があった。神様は彼女を何だと思っているのだろう。 「僕」のおみくじは「吉」で、「良縁来たる」と書いて あった。彼女は「よかったね」と吐き捨てるように言っ た。口を開かなければ可愛げがあるのに、と思ってし まった自分に最大限の不覚を感じる。	「あははははははははははは！ 見て見て！ 『病、や がて治る』だってえ！ 治んねえっつうの！」（桜良）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
18	90~	食事処	17の続き	【仲良し】く ん・桜良	食事処で梅ヶ枝餅を食べる。素直じゃない「僕」に、桜良は「そんなんじゃあ、私がいなくなったらまた一人になっちゃうよ？」と言う。「僕」は別に構わないと思っていた。僕にとっては、今の状況が異常で、彼女がいなくなれば、また元の生活に戻るだけだ。誰とも関わらず、小説の世界に身を潜める。そんな毎日に、戻る。 店内で、客と店員のトラブルに出くわした。ヒステリックに怒鳴りつけるおばさんに、おばあさんの店員が平謝りしている。おばあさんが押されてテーブルごと床に倒れたところで、桜良が「ちょっと！」と大声をあげて立ち上がった。傍観者でいたいと考えていた「僕」とまるで反対である彼女が、おばあさんのために立ち上がるだろうことは確信的に分かっていた。「君より先に死んだ方がいい人間はたくさんいるもんだね」と言う 「僕」に「本当だよ！」と同意する彼女を見て苦笑しながら、やっぱり彼女がいなくなったら一人になろうと思った。	「素直じゃないなー。そんなんじゃあ、私がいなくなったらまた一人になっちゃうよ？」（桜良）
19	94~	電車	夕方	【仲良し】く ん・桜良	電車で元来た駅を目指す。夏の空はまだまだ明るい。ずっと明るいままならいい。この頃になると「僕」は、そんなことを気まぐれに思い始めていた。桜良は駅に着くまでずっと眠っていた。	なし
20	95~	鍋料理処	夜八時	【仲良し】く ん・桜良	「これで私達も一緒に鍋つつく仲だねえ」そう言いながら桜良は鍋をつつく。彼女は悪びれもせずワインを注文する。うきゃきゃきゃっと笑い方がちがうのは、彼女がアルコールを摂取しているからだ。彼女はいつもより上機嫌に前の彼氏の話やキョウコの話始める。「私が死んだらキョウコと仲良くしてあげてほしいのになぁ」それまでとは違う様子で、彼女の目が真っ直ぐにこちらを見据えた。どうやら本気の言葉らしかった。仕方なく「僕」は「考えておく」と答えた。彼女は「お願い」と一言だけ添えた。意味のある一言だった。どうせ仲良くなることはないと決めかかっていた僕の心が揺れた。少しだけ。	「それ以上だよ。私、彼氏ともモツ鍋つついたことないもん」 「私が死んだらキョウコと仲良くしてあげてほしいのになぁ」（桜良）
21	98~	ホテル	20の続き	【仲良し】く ん・桜良	ホテルに到着すると、彼女が受付で予約の確認を行っていた。その間「僕」はソファで待っていた。どうやら手違いがあったらしく、何やら慌ただしくしている。 戻ってきた彼女は「一緒に部屋なんだけど、いいよね？」と「僕」に告げた。強硬姿勢をとって彼女とは別行動をする、それが僕にはできたはずだ。彼女も無理には止めなかったろう。しかし、僕は僕の意味でそれをしなかった。理由は？　さあ、分からない。	「一緒に部屋なんだけど、いいよね？」（桜良） 「……………は？」（「僕」）
22	102~	ホテル／部屋	21の続き	【仲良し】く ん・桜良	部屋に到着し、しばらくテレビを見た後、彼女は部屋の風呂に向かった。風呂場にいる彼女に、リュックから洗顔クリームを取ってくれないかと頼まれて、「僕」はリュックを開けた。すると、その中には、数本の注射器と、見たこともない量の錠剤、使用法の分からない検査機器のようなものが入っていた。 思考が、止まろうとするのをなんとか踏みとどまらせる。彼女が医学の力で存在を保っているという事実。目の当たりにすると、心に言いようのない恐怖が降りてくるのを感じた。 どうして。 答えの出ない考えをぐるぐると回しているうちに、ベッドの上で眠ってしまっていた。	「一緒にベッドに寝るなんてドキドキするね」 「いいなぁ、私も大学とか行きたかったなぁ」（桜良） 「そういう僕の品位を落とすような発言はやめて。ほら、僕ってどこまでも紳士だから。そういうのは恋人とやってよ」（「僕」）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
23	108～	ホテル／部屋	22の続き	【仲良し】くん・桜良	目が覚めると、彼女が目の前にいた。「僕」はさっきの動揺を悟られないように無表情でテレビに目を向ける。彼女が梅酒のソーダ割りを作る。「僕」もそれに付き合って飲むことにする。彼女の提案で『真実か挑戦』ゲームをすることになる。桜良は「僕」に好きなタイプや、桜良が何番目に可愛いと思うかなど、様々な質問をする。「僕」は桜良に子どもの頃はどんなだったかなどを質問する。ゲームが進むにつれて彼女も酔いが回ってきて、テンションが高くなってきた。「僕」も酔いがまわってきたようだ。 そして最後のゲーム、権利は桜良が握った。一呼吸おいて、彼女が言った「私が」「私が、本当は死ぬのがめっちゃくちゃ怖いって言ったら、どうする？」彼女の声はあまりに静かで、心臓が凍ってしまうかと思うほどだった。臆した僕は、自分の意志とおおよそ関係なく口を開いていた。「挑戦……」 彼女はその選択をいいとも悪いとも言わず、「君もベッドで寝なさい、反論も反抗も認めません」といって、歌い始めた。自分一人のものではない寝床が、時々彼女の寝返りに合わせて揺れた。共有できない心みたいだった。	「よーし、真実か挑戦か。真実なら、私の可愛いと思うところを三つあげて。挑戦なら、私をベッドまで運んで」（桜良）
24	125～	ホテル／部屋	翌朝 朝八時	【仲良し】くん・桜良・キョウコ	キョウコから電話がかかってきた。桜良が内緒で出かけていることを誤魔化してくれたらしい。だれと一緒にいるのかを桜良から聞いたキョウコは絶句する。桜良にこのことはキョウコの胸の中にしまっておいてほしいと頼まれ、お土産を買ってくること、「僕」が桜良に何かしたらぶっ殺すと言っておくことを条件にそれを呑むことにする。	「不思議に思うだろうし、意味分かんないかもしれないけど、でもこのことに関してはいつかきっとキョウコに説明する、だから納得とまではいかなくても、許して。それで、今はキョウコの胸の中だけにしまっておいてほしいの」（桜良） 『大体一人で黙って遠くまで行くって、死ぬ前の猫じゃないんだからさ』（キョウコ） 「友達思いの親友を持ってよかったね」（「僕」）
25	129～	ショッピングモール	チェックアウト後	【仲良し】くん・桜良	新幹線の時間まで歩き回っていると、大道芸人がパフォーマンスをしていた。彼女はそれを見て、やってみようかなと目を輝かせる。短い期間のものとは言え、目標ができるというのは人間を輝かせる。僕と並べば彼女の輝きはより際立って見えるだろう。 帰りの新幹線で、また旅行しようよと言う桜良に素直に同意する「僕」。「さては楽しかったな？」と訊ねる彼女に「うん、楽しかったよ」と素直に答えた。本心だった。 家に帰り、また日常に戻る。この二日間、彼女からの連絡はなかったが、日曜日の夜に気付いた。彼女からの連絡を待っている自分に。 月曜日、学校に向かうと、彼女と遠出をしていた事実が広まっており、「僕」の上靴はゴミ箱の中で発見された。	「違うよ、ただ君が珍しく素直なもんだから舞い上がったちゃった。うん、私もめちゃくちゃ楽しかったよ。ありがとう、一緒に来てくれて。次はどこに行こうか。私は、次は北がいいなあ。寒さを存分に味わいたい」（桜良）
26	134～	学校	月曜日	【噂されてるクラスメイト】・キョウコ	常ならぬことの連続だった。彼女の親友さんが敵意むき出しの視線を向けて立っていた。「僕」とどう接するべきか決めかねているようだ。また、クラスメイトに彼女との関係を訊ねられたり、筆箱がなくなったりした。	「おはよ……」（キョウコ）
27	138～	図書室	雨の降る水曜日	【仲良し】くん・桜良	図書室で、彼女は男の子から告白を受けたことを嬉しそうに報告する。「僕」はそれに素直に驚く。しかし、その告白は断ったという。 「僕」は彼女に、家に遊びに来るように半ば強制的に誘われる。「僕」がそれを断らないのは「僕」が草舟だからだ。 彼女の愛読書「星の王子さま」を貸してくれることになり、「君の家に持って行ってあげてもいいよ」という彼女だったが、「君と不毛なやり合いをするのも疲れるし、うちに来られるくらいならこっちから行くよ」と、「僕」はそれを大義名分にして彼女の家に行くことにする。	「そういえばこんな雨の日は外で遊べないから、今日は君が私の家に来ることになってるんだけど大丈夫だよね？」 「なんだとう、まあいいよ、そんなことを言いながら君は結局、私と遊ぶのに付き合ってくれるもんね」（桜良）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
28	144～	桜良の家	27の続き 厚い雲	【仲良し】く ん・桜良	彼女の家に着き、「僕」は何気に緊張していた。 迎え入れられた初めての女の子の部屋は、何から何ま で大きかったが、これが彼女の両親の悲しみに比例して いるのだらうと思うと、憧れは一瞬で霧散した。むしろ 空しさが室内に満ちているようだった。	「今のは家に挨拶したの。私を育ててくれた大切な場所 だよ」（桜良） （女の子の部屋に入ったことは）「ないけど、同じ高校 生の部屋なんだから、別に大して面白いものでもない 僕は仮説をたててる」（「僕」）
29	149～	桜良の家	28の続き	【?????】 くん・桜良	彼女は「僕」に彼女を作る気があるのかと訊ねられ る。彼女は、「僕」が彼女と恋人関係になりたいと勘 繰っているのかと思い、「僕」は本当に珍しく、真に不 愉快な気分になった。 突然「僕」の後ろから抱きつく彼女。ただならぬ雰 囲気に声を発することもできない。張り付くような緊張の あと、彼女は「なーんちゃって」と笑いながらいたずら だったと打ち明ける。このとき、なぜか「僕」は彼女の 悪ふざけに真剣な怒りを感じた。「僕」は彼女の腕をつ かんでベッドに押し倒した。最初は戸惑っていた彼女 だったが、無言になり、その目に涙が浮かんた。その涙 を見た途端「僕」は激しい後悔に襲われ、逃げるように 部屋を出た。	「【?????】くんならいいんだ」「いけないこと」 「いやぁ勇気がいりましたよぉ。なんせ君に抱きつく んだもん。でも、やっぱりいたずらにはリアリティが いるからねー。頑張ったよ私、うん。それに君が黙っ ちゃうから本気っぽい雰囲気になっちゃったじゃーん。 ドキドキした？君が私を好きじゃないって聞いと いてよかったよ、じゃないとマジの感じになっ ちゃうもん、今の！でもいたずらは大成功だ ね！君相手だからできたんだよ、スリルあ ったぁ」（桜良）
30	157～	帰り道	29の続き	【目立たないク ラスメイト】く ん・桜良・学級 委員	雨の中、傘を差したクラスメイトに出くわす。温和 で清潔感のある、うちのクラスの学級委員だが、不 機嫌な様子だ。彼女の言う前に付き合っていた人とは 彼のことらしい。執拗に「僕」に妬みをぶつける彼に 悪態を吐いたところ、彼に殴られた。その現場に、「僕」 を追ってきた彼女がやってくる。 「僕」を心配する彼女。彼女は彼に捨て台詞を吐く と、「僕」をまた家へと連れ戻した。 二人は互いに謝り、その後「仲直り」をした。「僕」 は彼女が死ぬまで仲良くすることを誓った。	「桜良はどうしてお前なんかと」「お前みたいな 協調性のない暗いだけの奴と！」 「そうだよ、そいつが桜良に付きま とってるから、もうちょっか いを出さないように、俺がや っつけてやったんだ」（学級 委員） 「私、もうタカヒロを嫌い になったから。二度と、私と 私の周りの人たちに何も しないで。」（桜良） 「あの子は、しつこい人間 は嫌いだよ。前の彼氏が そうだったらしい」（「僕」）
31	171～	学校	次の日	「僕」	久しぶりに上靴で教室に行くと彼女はいなかった。一 時間目になっても彼女は学校に来なかった。次の時間 も、次の時間も。放課後の時間になっても、彼女の姿は 見当たらなかった。 なぜ彼女が来なかったのか、知ったのはその日の夜の ことだった。 彼女は、入院していた。	なし
32	171～	病室	その週の土曜日	【仲良し】く ん・桜良・キョ ウコ	死期が早まったのではないかと、そう心配していたが、 病室の彼女は変わらず元気そう だ。数値に変動があったから念 のために入院しているだけだ という。「僕」が勉強を教えた 後、彼女は最近習得したマジ ックを披露した。 途中病室に入ってきたキョウ コ。「【仲良し】くん、そう いえばこの前貸したお兄ちゃん のジャージとパンツは？」とい う桜良の言葉に驚愕の表情を 浮かべ、人を殺せそうな目で 「僕」を見ている。このまま では、彼女の死後に親友さんと 仲良くするという依頼を 実現できない。	「っていうか親友さんって何？」 「ありがとね、【仲良し】くん 教えるの上手いなあ、教師 になりなよ」（桜良）
33	178～	病室	火曜日	【?????】 くん・桜良	二回目のお見舞い、桜良は人との関わりを持とうとし ない「僕」を諭す。自分がどう思われているか自分で決 めつけている「僕」。彼女は「僕」のことを【仲良し】 とは今は思っていないらしく、「僕」は少し不思議が る。 「前にもこんな話したっけ？」と不思議そうにする彼 女の様子を見て笑う「僕」。以前と比べて「僕」も変 ってしまったようだ。新しい手品を見せてくれた彼女 に、一年後には凄いのが出来るようになってるかもしれ ない、それに対する彼女の返事に変な間があったのは、 きっとジョークを無視されたのが気に食わなかったから だ。	「皆がさ、今まで関わらなかった君と意味分かんない形 で関わってんのが面白いの。それで、君はどうして そういう状況に陥ってるのか分かってる？」 「教えたら人間関係、面白くないでしょ。人間は相手 が自分にとって何者か分からないから、友情も恋愛も面白 いんだよ」 ・「【?????】くんがすっごくいい人だって、皆に 教えてあげたい」（桜良） 「君やキョウコさん以外は、僕のことを【地味なク ラスメイト】か、それ以下にしか思っていないよ」 （「ちなみに、私は君のことをどう思ってると思 う？」）「さあ、『仲良し』とかじゃないの？」 （「僕」）
34	182～	本屋	33の続き	「僕」・キョウ コ	病院の帰りに立ち寄った本屋。本を見ている隣に立っ ていたのはキョウコだった。まるでライオンのような彼 女に、桜良のことをどう思っているか訊ねられる。真剣 に考えてみても、「分からない」という答えしか出な かった。	「あの子は、あんなんだけど、人一倍傷つきやすいの。 中途半端な気持ちであの子に近づくのはやめて。もしそ んなんで桜良を傷つけたら、私が、殺すから」（キョウ コ）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
35	184～	病院	次の日	【?????】 くん・桜良	突然の呼び出しのメールに病室へ向かう。「病院から逃げ出さない？」そういった彼女に冗談で返事をしたが、もしかして冗談じゃなかったのかもしれない。いつもと変わらない彼女の笑顔に違和感を感じる。自分の名前の由来について語る彼女。あと一年しか生きられないと言われて、本来なら彼女のようにひょうひょうとしての方がおかしい。そう考え、「僕」は、彼女から感じた違和感を、単なる「僕」の主観が生んだ、ごくごく小さなものとして処理することにした。それが、正しいことだと思った。	「教えてあげる。桜は散ってから、実はその三ヶ月くらい後には次の花の芽をつけるんだよ。だけど、その芽は一度眠るの。暖かくなってくるのを待って、そこから一気に咲く。つまり、桜は咲くべき時を待ってるんだよ。素敵じゃない？」 「【?????】くんの名前も君によくあってるよ」 「ほら、死が横にいる」（桜良） 「なるほどね、君の名前にぴったりだ」 「春を選んで咲く花の名前は、出会いや出来事を偶然じゃなく選択だと考えてる、君の名前にぴったりだって思ったんだ」（「僕」）
36	189～	病室	土曜日の午前中	【?????】 くん・桜良	病室の彼女の笑顔がぎこちなかった。彼女の頼みで一度だけ「真実か挑戦」をする。権利を勝ち得てしまった「僕」は、「君にとって、生きるってというのは、どういうこと？」と問う。その彼女の答えに、今まで臆病で気づかなかった自分の気持ちに気付く。彼女はなんの悪気も遠慮も他意も下心も反省も責任もない様子で、上半身を伸ばして僕に抱きついた。自分でも意外なほど冷静に、「僕」も彼女の肩にあごを載せる。 何かあったのかという「僕」の問いには、彼女は「…んーん、なーんにもないよー」と答えた。信じなかったが、言いたくないことを言わせる勇気もなかった。 そして、彼女の入院期間が、予定より二週間延びた。	「生きるってのはね」「きっと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ」 「誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいたら鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれ違う。それが、生きる。自分たった一人じゃ、自分がいるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かといて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きてる。まだ、ここに生きてる。だから、人が生きてることには意味があるんだよ。自分で選んで、君も私も、今ここで生きてるみたいに」（桜良） 「本当に君には、色んなことを教えてもらう」「本心だよ。ありがとう」（「僕」）
37	198～	病室	火曜日の午後	【?????】 くん・桜良	いつもと同じようにふざけた会話が出ることを、「僕」は喜んでいた。 「もう一度、旅行したかったなあ」彼女の言葉に、もう二度と行けないかのような意図を感じ、「僕」は呼吸が止まる。思わず声を荒げて彼女に聞いただす。「まだ、死なない、よね？」 「私に生きててほしいの？」という桜良の問いに「……………うん」と素直にうなずく「僕」。異常なほど嬉しそうに笑う桜良。恥ずかしくなった「僕」は、はじめて自分からハグをした。離れてみて、あくまで冗談っぽくお互いの顔が赤いのを笑いあった。 退院後に、彼女いわく「デート」で海に行く約束をした。	「教えてあげようか？何かあったのか」「なーんにもないよ。ただ、君のことを考えてたの」「本当だよ。君には嘘つかないもん、私」 「うふふふふふふふふふふ」「いやぁ、私、今幸せだなあって思って。死んじゃうかも」（桜良） 「何か隠してるんでしょ。ばれればなんだよ。真実か挑戦も、突然抱きついてきたりするの。僕が何かあったのかって訊いた時の反応も変だった。あんな変な間を取って、僕が不思議に思わないと思ったの？それでも僕は大病を抱えた君を心配してるんだよ」
38	209～	病室	夏休み	「僕」・桜良	夏休み中、計4回彼女のお見舞いに行った。そのうち1回、親友さんとはち合わせた。2回、彼女はベッドが揺れるくらいに大笑いした。3回、僕が帰る時に駄々をこねた。4回、僕は彼女の背中に手を回した。どれも慣れることはなかった。まるで小学生のようにはしゃいでいる日常が、「僕」は好きになってしまったみたいだ。	なし

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
39	210～	家 喫茶店	彼女が退院する日	「僕」・母	朝食を食べていると、母親に「彼女できたでしょ」と言われる。やはり母親は偉大らしい。 約束の時間よりだいぶ早めに着いてしまい、駅前の喫茶店で時間をつぶす。窓の外を眺めながら、彼女に変えてもらった自分の世界について考える。いや、彼女から言わせれば「選んだ」のだろう。改めて、思う。 僕は君に……。 「僕は、本当は君になりたかった」人を認められる人間に、人に認められる人間に。人を愛せる人間に、人に愛される人間に。僕はどうかすれば君になれただろうか。僕はどうかすれば君になれるだろうか。 そんな意味の慣用句があったような気がする。「僕」は渾身の言葉を彼女にメールで送信する。 『君の臍臓を食べたい』 しかし、四時間待っても彼女からの返信はなかった。漠然とした不安を抱えて、仕方なく家に帰ることにする。	「あんた、私があんたの嘘に気づいてないと思ってたの？母親なめんな」（母） 誰も、僕すらも本当は草舟なんかじゃない。流されるのも流されないのも、僕らは選べる。 それを教えてくれたのは、紛れもない彼女だ。もうすぐ死ぬはずなのに、誰よりも前を見て、自分の人生を自分のものにしようとする彼女。世界を愛し、人を愛し、自分を愛している彼女。 改めて、思う。 僕は君に……。 （「僕」・モノローグ）
40	219～	家	夕食時	「僕」・母	ずっとそわそわとしていた僕。思えばあの時で世界中の時間が止まってしまっていればよかった。そう思ったのは、僕が夕食を前にしながら不安でお腹をいっぱいにしている時、テレビを見ていてだった。 僕は、その時初めて、彼女がどうして現れなかったのかを知った。 彼女は嘘をついた。 僕も嘘をついた。 彼女は、僕に死ぬ時を教えるという約束をやぶった。 僕は、彼女に借りていたものを必ず返すという約束をやぶった。 僕と彼女が会うことは、もう二度とできなくなった。 彼女は通り魔に殺された。	甘えていた。この期に及んで僕はまだ甘えていたんだ。彼女に残された一年という時間に甘えていた。ひょっとすると彼女ですら、そうだったのかもしれない。少なくとも僕は、誰しもの明日が保証されていないという事実をはきちがえていた。僕は、残り時間の少ない彼女には明日があるものだと思っていた。まだ時間のある僕の明日は分からないけれど、もう時間のない彼女の明日は約束されていると思っていた。なんて馬鹿げた理由だ。僕は、残り少ない彼女の命だけは世界が甘やかしてくれると信じきっていた。もちろん、そんなことはない。なかった。世界は、差別をしない。まるで健康体の僕のような人間にも、病を患ったもうすぐ死んでしまう彼女にも平等に攻撃の手を緩めない。 （「僕」・モノローグ）
41	223～	家	夏休み （冒頭の続き）	「僕」	彼女の本当の想いも何もかも知ることが出来ないまま、彼女は死んでしまった。諦めてしまっていたが、夏休みが終わる直前、「僕」は気づいた。『共病文庫』を、読まなければならない。	なし
42	223～	桜良の家	雨 十度目の、彼女がこの世にいない朝	「僕」・母・桜良の母親	悲しみはもちろんあったが、「僕」以上に悲しんでいる人がたくさんいるはずで、悲しみを素直に受け止めることが出来なかった。それに、取り乱しても彼女は帰ってこない。 彼女の母親に促され、彼女の遺影と対面する。生前の彼女そのままの、今にもあの笑い声が聞こえてきそうな笑顔の写真。 駄目だ……。 写真から目を逸らしてよく名前の分からない道具で高い音を鳴らし、手を合わせた。どうしたことだろうか、祈りたいことなんて、何も考えられなかった。	「ちゃんと、お別れをしてきなさい」（母）
43	228～	桜良の家	42の続き	「僕」・桜良の母親	今更になってご家族とこんな話をするのはいかなものか、そうも思ったが、桜良の母親に、実は彼女の病気のことを知っていたこと、そして、『共病文庫』を見せていただきたい、と言った。『共病文庫』という言葉が引き金になって、母親は涙を流し始めた。母親は涙ながらに共病文庫を「僕」に手渡した。「僕」はその文庫本を手にとった。	「君、だったのね……」 「桜良から……聞いてた……。この日記は……あの子が死んだら、とある人に渡してほしいって……。たった一人……あの子の病気のことを知ってる……『共病文庫』っている名前を知ってる人が……いるからって……」 「ありがとう……本当にありがとう……あなたのおかげで……あの子は……。あの子は……あなたを……」（桜良の母親）
44	233～	『共病文庫』	43の続き	「僕」・桜良の母親	共病文庫には、彼女の日々の記録、そして、遺書が残されていた。 彼女のメールの履歴を見せてもらう。『君の臍臓を食べたい』というメッセージはちゃんと彼女に届いていた。 「僕」はこらえきれず、大声をあげて、赤ん坊のように泣きじゃくった。	17年、私は君に必要とされるのを待っていたのかもしれない。 桜が、春を待っているみたいに。（桜良）

○君の臍臓をたべたい／住野よる

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
45	253～	桜良の家	44の続き 止んだ雨	「僕」・桜良の 母親	泣きやんで、彼女の母親に彼女との思い出を少し話した。大切な喜びや悲しみはそのままだったが、余計なものがそぎ落とされていくような気がした。 彼女の母親に、下の名前を訊ねられて、「僕」は答える。 「春樹です。志賀春樹、といいます」 「あら、そんな小説家いるわよね？」 彼女の母親の言葉に驚いて、それから口に笑みが浮かぶのを感じた。 「ええ、どちらのことを言っているのかは分かりませんが」	「それ、あげるわ。桜良のハンカチなの。君が持ってくれるなら、あの子も喜ぶ」 「いいの、子供は泣くものよ。あの子も、よく泣いた。昔から泣き虫だったから。でもね、君と出会った日、日記に書いてあった、君と時間を過ごし始めたくらいからね、あの子、泣かなくなったの。全く、ではないけどね。だから、ありがとう。あの子は、あなたのおかげで、とても大切な時間を過ごせたわ」 「いつか、無理にとは言わないけど、できたら、恭子ちゃんとあなたと、うちの家族で、食事でもしましょ。お礼っていうのもあるけど、桜良が大切にしてた二人とそういう風にできたら、おばさん嬉しい」（桜良の母親）
46	262～	家	夕食後	春樹・父・母	帰宅すると、母親に「頑張ったね」と言われ、父親には背中をたたかれた。 夕食後、部屋にこもって、もう一度『共病文庫』を読みながら、僕は考えた。三回、また途中で泣いてしまったけれど、考えた。 これから、僕が何をすべきなのか。彼女のため、彼女の家族のため、自分のため、何ができるかを考えた。 その夜僕は、彼女と喋る夢を見て、また泣いた。	「頑張ったね」（母）
47	262～	指定されたカフェ	お昼過ぎ	春樹・キョウコ	悩んだ末、恭子さんと話することに決めた。葬式に來なかった春樹に怒りをぶつけるキョウコに、意を決して『共病文庫』を見せる。彼女が病気であったという事実、目の前の『共病文庫』に、はじめは全く信じられないといった様子だったが、読み進めるうちに、キョウコは泣き出してしまった。 キョウコが読み終わった後、もうひとつ決心していたことを打ち明ける。「と、友達になってほしいんだ」 キョウコは黙って首を数度横に振って、春樹の顔も見ずに出て行ってしまった。 「これは、難しい」春樹は呟いた。	「どうして……………私に……………言わなかったの…………」 「桜良じゃない！あんたがよ！」 「言って、言ってくれたら…………もっと、もっともっともっと一緒に……………時間を過ごせた。部活も辞めた。学校だって辞めた！桜良と、一緒にいれた…………」 「……………許さない。いくら、桜良があんたを好きで、大切に、必要だったとしても、私は、許さない」（キョウコ） 「彼女の遺志、だけじゃない。僕が、自分で選んだ。恭子さんに、仲良くして、ほしい。仲良く、になりたい」（春樹）
48	271～	桜良の墓	一年後	春樹・キョウコ	恭子と春樹は桜良の墓参りに向かう。石段を登りながら、昔桜良としたような極めて不毛で楽しいやりとりを交わす。桜良の墓の前で、二人仲良く、想いを送る。 春樹は桜良に語りかける。一年前に、君みたいに人に認められる人間に、人を愛せる人間になると決めたこと、そしてそれは決して簡単ではなかったこと、一歩ずつでも、君がいなくても一人で立てるようにならなくちゃいけないこと。ちなみに、「さん」をつける人の話は完全な作り話だ。本当の話は君に会ったときにでも。 もし、僕の本当の初恋の人みたいな女の子がまた現れたなら。 今度こそ、その子の臍臓を食べてもいいかも。 恭子と春樹は桜良の家に向かう。「うわははっ」と声が聞こえた気がして二人ともすごい勢いで振り返る。もちろん、後ろには誰もいない。 僕らは「うわははっ」と笑いながら長い階段を下りた。もう、怖いとは思わなかった。	「高貴な人たちなめんな」（恭子） 「ほら僕、高貴な生まれだから体動かさなくてもいいんだよ」（春樹）

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	5~	会議室	工作中／昼	真緒・浩介	浩介が仕事の打ち合わせに向かうと、かつての同級生「渡会真緒」がいた。かつて「バカ」と呼ばれていた真緒の面影はなく、的確に仕事をこなすことができるようになっていたことに驚きながらも、真緒の持つ悪戯っぽい眼差しなどはかつてのままだった。	「はい、渡来です。こう——奥田くんだよね？」
2	12~	学校	(回想) 十二年前、中学一年の二学期の始業式	真緒・浩介・いじめを行った人物	真緒が転校生としてやってきた。はじめは人気者だった真緒だが、その気まぐれさやバカのせいでいじめられるようになる。浩介はエスカレートしていく真緒いじめに堪忍袋の緒が切れ、いじめの主犯に仕返しを行った。その結果、その仕返しをした事実だけが親、教師に伝わり、悪いのは浩介ということになってしまった。真緒と浩介はそれ以来皆から距離を取られるようになったが、真緒は浩介にいつも付いてくるようになった。	「私、わたらいまお」(真緒が転校してきた際、浩介の席に歩いていき、出し抜けに放った言葉)
3	17~	渋谷 レコード店 センター街	七時すぎ	真緒・浩介	真緒と待ち合わせをして食事に向かう。なぜか真緒と会うだけなのに緊張を隠せない自分がいる。真緒が待ち合わせに現れ、どこに食べに行こうかと訊くと、ステーキが食べたいと答える真緒。自分の欲求に忠実なあたりは昔と変わっていないようだ。	「会社の子たちと行くお店って、『低カロリー』とか『オーガニック』とか、そんなお上品な感じの店がどうしても多くなっちゃうんだけど、そういうのはもう飽きちゃったし、たまには食いでのあるのが食べたくて。だからほら、今日はスーツじゃないでしょ。匂いがついてもいいやつ着てきたの」(真緒)
4	21~	ステーキレストラン	3の続き	真緒・浩介	真緒と近況などを話す浩介。真緒も苦労しているようだ。真緒に下の名前と呼ばれて動揺する浩介。昔から浩介を下の名前で呼ぶのは真緒ひとりだった。付き合っているわけではなかったが、真緒は昔から浩介に付きまわっていた。浩介も、真緒の極端なまでの素直さが決して嫌いではなかった。 今、こうして真緒と再会すると、真緒との距離を縮めたがっている自分に気付いた浩介。十年も凍結されていた思いが、ゆっくりと溶けはじめる。	「え、べつに気にしないで。いまさら苗字で呼ばれてもくすぐったいし、仕事で会ってるみたいで堅苦しくなるから。ね、『浩介』」 「でも、勉強ができるっていうのは、学校社会では最大の武器になるね。誰からもからかわれなくなったし、対等に付き合える友達をたくさん作れたもん」 「でも、おでこくっつけるようにして熱心に分数の割り算教えてくれる人は、作れなかった」(真緒)
5	35~	教室	(回想) 中学時	真緒・浩介	「真緒が夜中の住宅街を裸で歩いていた」という噂が立っていた。真緒はいつもどおりニコニコして浩介につきまわっており、どうせ出鱈目だろうという思いと、本人の口から聞く勇気がないという思いから、噂の真相を確かめることはしなかった。しかし、浩介は真緒にまつわる噂が心配でたまらなかった。	「なんで約分なんてしなくちゃいけないの？15分の6は15分の6のままでもいいでしょ？数を小さくしても言うてることはおんなじなんでしょ？だったら、そのままにしないとあげなよ」(真緒)
6	42~	デパートの裏手にあるカフェ	十月とは思えぬ寒い日	真緒・浩介	真緒と約束をしてカフェに向かう。真緒と一緒にいらなかった期間が浩介にとって悔やまれる。またこうして会うことは浩介にとって迷惑じゃない？と訊ねる真緒に、浩介は迷惑なわけないと慌てて否定する。	「迷惑じゃない？」「また私と会ったこと」 「だって中学のときの浩介、学校から帰るときとか、私がついていくと迷惑そうな顔してたから」(真緒)
7	50~	学校帰りの銀杏公園	(回想) 中学二年生	真緒・浩介	真緒が里子であることを浩介にあっさり打ち明けたのは、放課後の銀杏公園、クラスでは真緒は両親の実の子ではないという噂が立っていた時だった。学校で溜まった鬱憤を吐き出した後「ぜったいに東京の大学に行く」と言って真緒が見せたのは、満点の小テストだった。たった十問だったが、真緒にとってはたゆまぬ努力の結晶だ。 出し抜けに「ありがとう、私にかまってくれて」と言った真緒に、浩介は今まで経験したことのないような火照りを感じ、気がつくとも真緒に唇を重ねていた。	「私はお父さんとお母さんの子じゃないんだよ。里子なの」 「満点だよ。満点取っちゃった。浩介は何点？」「ありがとう」「私にかまってくれて」
8	57~	『ララ・オロール』社内会議室	工作中	真緒・浩介	浩介は真緒と再会してから、なんだかんだ理由をでっち上げて真緒に会うようになっていた。この日も「ララ・オロール」に簡単な報告に向かった。 会議室の中で、お互いに感謝の言葉を述べあう二人。キスは会議室に遅れてやってきた部長のせいで未遂に終わった。	「ちがうからね。喜んでるんだから。私も奥田くんに感謝されちゃうくらいにまで成長できたんだなあ、って。中学のときはなんの力にもなれなかったけど、いまはちょっと、奥田くんに追いつけたみたいでうれしいんですよ。」(真緒) 「また会えてよかった」(浩介)

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
9	71~	善福寺池の畔 朝の陽射し	一月	真緒・浩介	昨夜はいつものように待ち合わせをして、いつものように食事をした。そしていつものように手を振って別れるはずだった。だが、電車が乗換駅に到着したとき、僕は真緒の手を握って車内に引き留めた。またしばらく会えないのかと思うと、そうしないではいられなかったのだった。 朝の陽射しの中、浩介は真緒に告白する。 真緒は、明るく弾むようなメロディを白い息を吐きながら、囁くような声でハミングした。聞き覚えはないが、休日の朝によく似合う曲だと思った。	「浩介、『東京の大学に行く』って中学の頃よく言ってたよね。だから私も目指したの。それで女子大入っちゃうのは本末転倒なんだけど」（真緒） 「愛してる、真緒。言葉と行動の順番が一部逆になったけど、愛しているから。『ララ・オロール』との仕事だって、真緒がいるから頑張れるんだ。おれなんかまだ入社二年目の小僧だから、本当ならいつ担当から外されてもおかしくない立場なんだ。それでも、今はある程度仕事をまかせてもらえるようになった。それもこれも、真緒にかっこ悪いとこ見せたくないから。だから、しがみついてこられた」（浩介）
10	90~	真緒の実家	日曜の午後	真緒・浩介・真緒の両親	「真緒と付き合うのはもう少し考えてからでもいいのでは」真緒の実家に挨拶に向かうと、真緒の父親からそう言われた浩介。浩介は真緒の父親から、真緒が保護されたとき以前の記憶が全くない「全生活史健忘」であることを告げられる。それでも真緒と一緒にいたいことを伝える浩介だったが、父親の姿勢は変わらず、真緒は「私は、誰が反対しても浩介と一緒にだから。」と半ば喧嘩気味に家を出る。	「でもな、真緒」「他人様に迷惑はかけられないよ」（真緒の父親） 「何も思い出さなくてもかまわないって、だいぶ前に結論出てるはずでしょ。『真緒は真緒。それでいいじゃないか』って、お父さんも言ってくれたよね。今日まで彼に秘密にしていた私も悪いけど、でもどうしても、いまさらそのことを持ち出して私たちが付き合うことに反対するの?」（真緒）
11	104~	小さなイタリアンレストラン	10の続き	真緒・浩介	両親に付き合いを反対されて、酒が進む真緒。他に隠し事はないかと訊ねる浩介に、真緒は「んー、ないよ?」と微笑を浮かべ、思わせぶりに目を逸らす。 真緒は駆け落ちをすることを提案する。浩介は、真緒と暮らす日々を想像して、それも悪くないと思うのだった。	「一人娘だから、まだまだ家で飼っていたいんでしょ。まあ、その気持ちに付け込んでずっと実家に住んでる私もどうかと思うけど、でもあの態度はおかしいでしょ」「さあ、どうでしょう。でも、好きな相手にも内緒にしておきたいことって、誰だってあるんじゃない?」（真緒）
12	120~	市役所	春①	真緒・浩介	浩介と真緒は、婚姻届を提出した。手続きは思っていたよりも簡単で、昨晚からずっと身構えていた浩介は拍子抜けしてしまった。「ほんとに、結婚しちゃったんだなあ」口に出せば少しは実感が湧いてくるかと思ったが、どうもそんな感じにはならない。報告のため、真緒の実家に連絡をかける。身構える浩介だったが、真緒の父親は『困ったことがあったら相談に来なさい』と答えてくれた。	「準備にも時間もお金もかかるから、死期なんてやらなくていい。指輪もいらない」（真緒）
13	126~	ペットコーナー	12の続き	真緒・浩介	昼ご飯を済ませてから、ホームセンターに向かうと、ペットコーナーがあった。浩介は昔拾ったロシアンのお話を真緒に語る。真緒は浩介のお話を聞いて、「優しいね、浩介は」と言った後、少し恥ずかしそうに困った笑顔を浮かべてそっと囁いた。 「あのね、私、あなたと結婚してよかった」	「その猫、だいぶ弱ってたみたいなんだよなあ。獣医に見せて薬なんかももらって、一生懸命世話はしてたんだけど、一週間かそこらでいなくなっちゃった。今だから言えるけど、泣いたなあ。ほら、猫は死期を悟ると姿を消すって言うじゃん。死んじゃったのかなあって思ったらもう、たまらなくなってピーピー泣いた」（浩介）
14	132~	賃貸マンション	13の続き	真緒・浩介・隣の部屋の男の子	いろいろと不動産屋を回ってみたが、この部屋を借りる決め手になったのがこの眺めと日当たりの良さだった。浩介はお姫様だっこで真緒を部屋まで運ぼうとするが、偶然隣に住んでいる子どもにその姿を見られてしまった。 なるほど、僕たちはバカ夫婦だ。	「浩介がいま何考えてるか、当ててみせようか」「『明日からまた黄色い電車で揺られて会社に通うのかよー。もう西武線は飽きたー』、とか?」「ここが『ついのすみか』かあ」（真緒） 「真緒、『終の住処』って言葉の意味、わかってないで使ってるだろ。じいちゃんばあちゃんの台詞だよ、それ」（浩介）
15	139~	賃貸マンション	春②	真緒・浩介	5匹の熱帯魚のリュウキンを飼い始めた。真緒はそれぞれに「ビーチ・ボーイズ」のメンバーの名前を付けた。 真緒は機嫌がいいと鼻唄を歌う。曲名を訊ねるとビーチ・ボーイズの「素敵じゃないか」という曲だという。	「素敵じゃないか」「鼻唄の曲名。『素敵じゃないか』っていうの。ビーチ・ボーイズの曲」（真緒）
16	148~	オペラ劇場	休日	真緒・浩介	はじめて観に行ったオペラは思ったよりも迫力があるものだった。帰り道、真緒と感想を語り合う。結婚を機に、浩介は「ララ・オロール」の担当から外れていた。 彼女の記憶について不安がないわけではなかったが、「帰ってきたね」という真緒の声に、真緒と結婚したという実感が強まってきた。 帰り道、真緒が持っていたレジ袋を落としてしまった。浩介が声を掛けると、呆然と見下ろしていた真緒は夢から醒めたような顔をして袋を拾った。	「うん。でも、無理はしないでね。私は家でゴロゴロしてるだけでも幸せなんだから」（真緒）

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
17	155~	居酒屋	仕事終わり	浩介・上司	浩介は媒体部と衝突していた。取引先に入れ込みすぎるあまり、社内にいらぬ波風を立てている浩介を心配して、上司の田中さんが気遣って飲みに誘ってくれたのだ。そして、いま出張で家にいない真緒の話になる。真緒が指輪をプレゼントされるのを待っているんじゃないかと田中さんに指摘され、気付かなかった浩介は反省する。	「だけど、取引先に喜んでもらえて売上も増えるなら、会社にとってもプラスじゃないですか。そこを否定されたら、何を励みに仕事すればいいのかわからないですよ」（浩介）
18	164~	賃貸マンション	17の続き	浩介	指輪を待っているんじゃないかと指摘され、浩介は真緒の指輪のサイズを調べるために真緒のドレッサーを開ける。指輪の入っていたケースを元の位置に戻そうとしたとき、銀行の封筒が奥に入っていることに気付く。そこには、現金で百万円が入っていた。通帳から引き出したものであるらしく、通帳残高はわずか十数万円になっていた。	『もしもし、私。電車乗ってるのかな？いま、三宮のホテル。お風呂から出てきたとこなんだけど、も一、疲れたー。まだ六月なのに、関西ってなんでこんなに暑いのか？関係ないけどこのホテル、すごくベッド狭い。部屋のダブルベッドが恋しくなってきた。それはいいとして、ちゃんとご飯食べてる？朝晩コンビニ弁当じゃだめだよ。時間読めないけど、明日中には帰るからね。そういうわけで明日も早いし、寝ます。じゃあね、おやすみ』（真緒の留守電）
19	168~	賃貸マンション	真緒の帰宅後	真緒・浩介	真緒が帰ってきた。しかし、浩介は引き出されていたお金について問い詰めなければならぬため、気が滅入っていた。 浩介は真緒に百万円のことについて問いたです。真緒は下手な言い訳を並べながら、ついには黙りきりになった。思わず怒鳴りつけてしまった浩介。結局、真緒はそのお金の理由については語ってくれなかった。	「お金のことだけどさ、どうしても必要ならおれに相談して。今回は突然だったからびっくりして怒鳴っちゃったけど、ちゃんと話してくれば冷静に聞けると思うから。いますぐ説明しろとは言わないけど、お互い落ち着いたら、な」（浩介） 「心配かけて、本当にごめんね。ちょっと考えることがあって、焦っておかしな行動とっちゃった。でも、悪いこととか馬鹿なことに使おうなんてほんとに思っていなかったから、それは信じて」（真緒）
20	180~	外／散歩	夏／午後	真緒・浩介・平岩さん一家	隣室の平岩さん一家とは、奥さんと男の子に「お姫様だっこ」を目撃されて以来、廊下で会えば立ち止まって世間話をするような関係になっていた。平岩さん一家を見て、真緒は「浩介、子供欲しい？」と訊ねる。	「あ、ごめん。言いたかったのは、運命を感じることであるよねってこと。私にとっては『ララ・オロール』との出会いも運命だったし、なんといってもいざばん運命を感じるのは、十三年前に浩介と会ったことだと思う。ねえ、浩介は私と会ったこと、運命だと思う？」「私、お母さんになれるのかなあ」（真緒）
21	196~	賃貸マンション	20の続き	真緒・浩介・山井さん（真緒の友人）	約束していた通り、夜に真緒の大学時代の友人の山井さんが遊びにやって来た。酔いつぶれる真緒。山井さんは真緒がどれほど浩介を執念深く探していたかを浩介に語る。 帰り際、酔っていた真緒は、山井さんにまるで今生の別れのような言葉をかける。 山井さんを送る帰り道、山井さんは真緒が以前会ったときよりほっそりしていると言い、きっと陰ですごく努力しているのだと言った。	「真緒の執念深さを甘く見ちゃいけないですよ。安い指輪ひとつ探すのに一年も費やす女だから」（山井さん） 「元気でね。モモにはリミッターが付いてないんだから、あんまり飲みすぎちゃだめだよ、飲ませたけど。ハワイ、楽しかったね。モモに会えてよかった。モモのこと、大好きだからね。元気でね」（真緒）
22	208~	賃貸マンション	21の続き	真緒・浩介	山井さんから変な話を聞かされて、私のことを嫌いになっていないか心配する真緒。浩介はむしろ真緒がそこまでして捜してくれたことに感激していた。	「浩介が大好きだから、浩介ともっと一緒にいたかった。でも、普通の人はこんなにしつこくないんだよね？」 「もし話しておかないで私が死んじゃったら、浩介は最後まで騙されたことになっちゃうし、それは浩介への侮辱みたいな気がしたから。だから、お酒の力を借りて話したの。でももう、嫌いになっちゃったよね。私、普通じゃないもんね」（真緒） 「でもいいじゃん、ちぐはぐでも。真緒は真緒だし、いまさら普通の人になられたらこっちが戸惑う。それから言っとくけど、おれは『運命の人』の座から降りるつもりはないぞ。ただ単にラッキーだっただけなのかもしれないけど、真緒をみすみす手放すような真似はしないからな。これからもずっと、人を見る目を眩ませ続けてやる」（浩介）

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
23	220～	真緒の実家	夏から秋にかけて	真緒・浩介・真緒の母親	真緒の実家に向かった。真緒は疲れたからと言って早くに寝てしまった。真緒の母親は、真緒の記憶がない期間について、虐待をしていた人間がいるのかもしれないとずっと不安に思っていた。以前、真緒が両親を「最後の親孝行」と言って温泉に連れて行ったという。そのときに、『お父さんとお母さんの子でよかった』と別れの挨拶みたいなことを言っていたことを母親が思い出す。浩介も、山井さんとの別れ際の真緒の言葉を思い出し、不安に駆られる。突然どこかにいってしまうんじゃないか、という真緒の母親に、浩介は不安をかき消すように「どこにも行きませんよ、真緒は」と刺々しい声で答えた。	「ほんと、一回でいいからオペラは観に行くべきだよ。プロの歌手の声ってすごいよ、おなかまで響いてくるから」（真緒） 「あの子は、ちゃんと奥さんやってる？浩介さんを困らせてない？」（真緒の母親）
24	235～	マンション	日曜日の午後	真緒・浩介	真緒から少しずつ生気が抜けてきているように思えてならない。「疲れた」という呟きが増え、昼寝をする機会が増えてきている。 浩介は真緒に指輪をプレゼントすることにする。サプライズに真緒は驚きながらも喜びを隠せないでいる。指輪を真緒に嵌めてやる。しかし、サイズがぶかぶかで全く合わない。入念にサイズを確認したはずなのに。「真緒、やせた？」「調子が悪いなら、一度病院に…」心配する浩介だが、「大丈夫だって。変な心配しないで」と真緒は答える。	「まったく、無駄遣いして。この指輪、死んでも離さないから」「ほんとだよ？後生大事にする。もう肌身離さない」（真緒）
25	252～	マンション	十時ちょい過ぎ	真緒・浩介	浩介が帰宅すると、真緒は眠っていた。この頃は目立って寝ている時間が増えてきている。床に水たまりがある。飼っていたリュウキンが一匹いなくなっている。捜したがいらないようだ。 真緒が起きてきた。大きすぎる指輪はペンダントトップ代わりにしている。浩介は寝室の枕に一束ごっそり抜けてしまったような有様の髪の毛を発見し、無理やりにも病院に連れて行こうとする。	「ずっとこのままってことはないから。それはないから」（真緒） 「心配なんだよ！真緒はなんかの病気に罹ってんじゃないかって。もうずっとこんな調子だし、ぴったりのはずなのに指輪はゆるいし、こんなにまとまって髪が抜けるし。ほんとこれ、ただごとじゃないぞ。簀巻きにしても病院連れてくからな」（浩介）
26	257～	電車 銀杏公園	師走にしては暖かい日	真緒・浩介	真緒の言っていた通り、病院の検査結果は「異常なし」だった。しかし、浩介の心は晴れないままだった。 「今からちょっと遠出したいんだけど」と言って真緒が向かった先は銀杏公園だった。昔の思い出に浸りながら、真緒はまるで自分がもうすごいなくなってしまうかのような言葉を紡ぐ。 キスの直前でためらう浩介。「なんか、閉じちゃう気がしたんだよ、輪が」「ここでキスしてきれいに輪が完成しちゃったら、もう続きはないんじゃないかって、そんな風に感じたんだよ」と、不安を隠せない。キスの後、真緒は「なんか、『もうこれで充分。満足した』っていう感じの顔」を浮かべた。	「この銀杏の木から見たら、私たちの命なんてあっという間なんだろうね」（真緒） 「私は浩介が死ぬまでつきまとうつもりだよ。ほら、私って執念深いから」（真緒） 「真緒」「そんな顔しないでくれよ」「なんか、『もうこれで充分。満足した』っていう感じの顔」（浩介）
27	262～	銀杏公園からの 帰り 賃貸マンション	師走にしては暖かい日	真緒・浩介・平岩さん一家	マンションに帰り、お茶を入れようとしたところで悲鳴が聞こえた。平岩さん一家の息子のしゅう君がマンションから落下しそうになっていた。母親が体を乗り出す形でしゅう君を掴んではいるが、長く持ちそうにない。ここは4階で、落ちたらまず命はないだろう。必死に浩介も助けようとするが、ついにしゅう君が落下を始めた。諦めかけたその時、真下の階から真緒が飛び出し、しゅう君を抱えたまま下へ落下した。 真緒の死を覚悟して浩介は下に向かうと、死どころか真緒は無傷だった。 〈まるで空から降ってきたみたいに突然現れた子だからなのか、また突然どこかへ行ってしまうんじゃないかって、ときどきそんなことを考えちゃうのよ〉 義母の言葉を思い出した浩介は「まさか」と呟いた。	ここは四階、下は硬いアスファルトだ。助からない。死ぬのか？まだ三歳のこの子が死ぬのか？ 嫌だ！死なれてたまるか！（浩介・モノローグ）

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
28	282～	病院帰り	27の続き	真緒・浩介	平岩さん一家にさんざんお礼を言われ、真緒と浩介は夜道を歩く。真緒はまるで今から死んでしまうかのような言葉を涙ながらに語る。今までの楽しかったことや、これからしたかったこと。「……ごめんね」そう言ったきり黙ってしまった真緒は、「……なんちゃって！」と、今までの話は冗談だと笑う。この能天気ぶりはいつもの真緒だ。もう大丈夫だ、浩介はそう自分に言い聞かせた。	「私、いい奥さんだった？」（真緒） 「たとえばだ。とりあえず理屈は置いて、真緒は事情があってどこかに行かなくちゃならないんだとする。だからなんだってんだよ。真緒は真緒なんだから、そばにいればいいじゃないか。どこだか知らないけど、行きたくないなら行くなよ」（浩介）
29	298～	賃貸マンション	翌朝 午前十一時	真緒・浩介	翌朝目覚めると、溶けたバターのいい香りがする。たっぷりすぎる朝食を真緒が用意しながら、真緒が久しぶりに「素敵じゃないか」を口ずさんでいる。しかもコーラス付きだ。 朝刊を取ってくるという、真緒が玄関に向かう。「おはようのキス、忘れてた」と、浩介にキスをする、「じゃあ、ね」そう言って真緒は軽やかな足取りで玄関から出て行った。 そしてそのまま、帰ってくることはなかった。	「じゃあ私、朝刊取ってくるね」 「おはようのキス、忘れてた」 「じゃあ、ね」（真緒）
30	301～	賃貸マンション	一時間後	浩介・真緒の母親・平岩さん一家	真緒が帰ってこない。平岩さん一家に訊ねても、不審そうな顔で、そもそも真緒とは誰なのかという答えが返ってくる。 〈私はもう寿命が来てるんで、行かなくちゃいけないの。だから、何もかも消すつもりだった。私についてのこと、全部〉昨日の真緒の冗談を思い出す。記憶や物を消すなんてできるはずがない。平岩さんたちはきのうのショックが抜けていなくて、少しおかしくなっているだけだ。しかし、真緒の携帯にかけても『現在使われておりません』というメッセージが流れ、真緒の実家にかけても『うちには息子も娘もいませんよ』と言われ絶望する。結局、日が傾いても真緒が帰ってくることはなかった。	「奥田さん、いいかげんにしてくれませんか。真緒って彼女か誰かのこと？うちが知ってるはずないでしょう」（平岩さん一家） 『……どちら様ですか？』 『うちには息子も娘もいませんよ』（真緒の母親）
31	304～	仕事場	月曜日	浩介・上司の田中さん	結局、一睡もできなかった。「ララ・オロール」に電話をかけてみても、やはり真緒という人物はいないという。奥田真緒という人物は、初めからこの世にいないことになっていた。嗚咽が止まらず、仕事にならない浩介。部屋に帰っても、真緒がいない。受け入れがたい事実を前に、浩介はあやうく叫びだしそうになった。	「『ララ・オロール』に入れ込みすぎたお前と媒体部の喧嘩が収拾つかなくなったから、部長判断で外されたんだろうが。」（上司の田中さん）
32	307～	賃貸マンション	夜	浩介	真緒の行方についての手掛かりを探していると、和室に置かれたノートパソコンに目が留まった。ほとんどのデータが消えてしまっていたが、家計簿だけが残っていた。そこには、真緒が几帳面に管理していたお金のこと、備考欄には真緒なりの反省文や感想文が書かれていた。 寝室に取って返し、ドレッサーを開けてみると、以前と同じ場所に封筒に入った札束が入っていた。〈私と一緒に口座も消えるはずだから、ここに移しておきます。生活費とか、家賃の足しにしてね まお〉と書かれた便箋が添えられていた。	〈11月 浩介から結婚指輪をもらった。すごく高そうでもったいない。でも、もう、うれしくてうれしくて。生きててよかった。浩介ありがとう。愛してる〉（真緒／家計簿より） 「なんでおれを連れて行かなかったんだよ、真緒」（浩介）
33	311～	仕事場	真緒がいなくなって十日	浩介	甘く楽しい夢を見た。真緒との生活をそう割り切ってしまう、きっと楽になれる。なのに、寂しい。どうしようもなく寂しい。 今でもふいに涙が溢れて止まらなくなることがある。通勤経路を変えて真緒を捜しているが、いないことも分かっている。「ララ・オロール」に向かってしまい、真緒について訊ねてみるが、いるはずもない。「ああ、やっぱり」と思っただけ。両目から涙が零れて止まらなくなる。もう、受け入れなければならない。真緒はどこにもいないのだ。	「申し訳ございませんが、渡来という者はこちらにはおりませんが……」（「ララ・オロール」受付）

○陽だまりの彼女／越谷オサム

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
34	318～	大泉学園駅	六時①	浩介・真緒の両親	大泉学園駅で声をかけられた。聞き覚えのある声だ。真緒の両親が浩介に道を尋ねてきたのだった。もちろん、両親は浩介のことを知らない様子だ。少し動揺する浩介。二人はオペラを見に行くのだという。真緒が以前に両親にオペラを勧めていたことを思い出し、浩介は危うく涙を流しそうになる。 「まおのご飯、足りるかしら」と漏らす義母に、浩介がおもわず聞き返すと、最近猫を飼い始めたらしく、その子の名前が「まお」というらしい。両親の中には、おぼろげながら真緒の存在が残っている。浩介は少し明るい気持ちになった。	「オペラなんて柄じゃないんですが、なぜだか一度くらい観てもいいんじゃないかという気になりまして」 「あまり猫らしくない名前でしょう。でも、どういうわけか名前はそれ以外にない気がしたんですよ。飼ってみたらこれがもう、娘のようにかわいくてね。猫を飼うのは初めてなのに、昔からずっとそばにいたように馴染んでしまっ。ほら、親馬鹿でしょう」（真緒の母親）
35	325～	電車の中（夢）	中学時代	浩介・浩介の母親	夢を見ていた。中学生の浩介は、拾ってきた猫を親に反対されながらも、おれが育てると涙ながらに言い張っていた。〈仕方ないわね。あんたが帰ってくるまでお母さんが面倒みるから、学校行ってきなさい〉と、折れた母親に浩介はしばらく考えた後、頷いた。 乗り換え案内のアナウンスが聞こえてきた。池袋だ。起きなければ。	嫌だ。おれが育てる。 嫌だ。今日は休む。（浩介／モノローグ）
36	326～	大型書店	34の続き	浩介	こらえ性のなさど飽きっぽさ。知能の低さや、ジャングルジムの上に難なく立てるバランス感覚。浩介は確かめておきたいことがあった。「ネコ」の書架から本を抜き出し、中身を確認めると、真緒そのものの姿があった。そういえば、猫は人間に化けるという話を聞いたことがある。浩介は笑顔と涙を隠した。	なし
37	327～	レコード店	36の続き	浩介	もう一ヶ所立ち寄るべき場所があった。レコード店で、ビーチ・ボーイズの「素敵じゃないか」を購入して、大泉学園駅のベンチで開封する。その歌詞に浩介は人目も憚らず嗚咽を漏らした。	なし
38	332～	駅からの帰り道	37の続き	浩介・真緒	書店で手に取った一冊に、心にひっかかる一文があった。〈西洋のことわざには、『猫は九生を持つ』というものがあります。これは、高所から落ちてでも簡単には死なず、回復力も高い猫のしぶとさを昔の人が多生になぞらえたものといわれています。〉 「真緒のは、いくつめだったのかな？」とそっと呟くと、「二つめだよ」という声が聞こえてきた。見ると、足元に、灰色の目で、茶色がかった目の仔猫がいた。視界が滲んでよく見えないが、指輪が後ろ足で引きずられている。浩介は三つめの命を拾い上げた。	「真緒、お前、金魚のブライアン食ったろ」（浩介）

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	5～	電車	朝	高寿・愛美	一目惚れをした。なけなしの勇気を振り絞って、宝ヶ池駅で降りる彼女を追いかけて声をかける。「話したい、です」といった高寿に、愛美はぴんと張りつめた表情で「はい」とうなずいてくれた。	「電車の中で見て、その……」「一目惚れしました！」（高寿） 「私、これから宝ヶ池に行くんです」（愛美）
2	22～	国道・宝ヶ池	1の続き	高寿・愛美	国道を渡りながらお互いに自己紹介をする。愛美は「完璧」をたたえたような、笑ってしまうくらいの高嶺の花だった。公園で鯉を眺めながら彼女は静かで慎重な響きで問う。「どうしてわたしに……その……どこが」勇気をもって答えると、彼女の声が少しかすれた。時間が来たようで、愛美は時計を曇った表情で見る。「また会える？」と高寿が聞いたとたん、愛美は涙を流し始めた。抱きつく愛美に固まる高寿。無理に明るくふるまう愛美。「また会えるよ」彼女は涙に濡れた瞳で高寿をみつめて、笑顔でそう言った。	「本能……だと思う」「この人だっていう直感が自分の中にあって、もう、行くしかないって思った。じゃないと、無理だったと思う」（高寿） 「ちょっとね……かなしいことが……あってねっ」（愛美）
3	33～	上山の家	夜	上山・高寿	上山の家で今日の出来事を話す。連絡先を聞かなかった高寿に上山はあきれながらも、だいじょうぶだって！と励ます。高寿は、きっとこれを求めてここに来たのだろうと思った。 『また会えるよ』彼女の言葉と笑顔をお守りのように浮かべながら高寿は眠りについた。	「連絡先、聞いてないのか？」（上山） 「なあ。なんで抱きついてきたのかな？」（高寿）
4	38～	京都市動物園	次の日	高寿・愛美	動物園で課題のキリンのクロッキーを描く。昨日の出来事は夢だったのではないかという不安と、信じたいという意志がせめぎ合っていた。 「いいね」とうしろから声が聞こえた。振り向かずとも、それが愛美とわかった。愛美と動物園を見て回る。その時に、五歳の頃震災にあって家が半壊した時に助けてくれたおばさんの話を愛美に語る。愛美も五歳のときに、死にそうになったことがあるという。帰り際、愛美と連絡先を交換した。	「あっ、教室に張り出されるやつだ」 「実は、わたしも死にそうになったことがあるの」「うん。しかも、同じ五歳のときに」「ね、偶然だよね」（愛美） 「降りてすぐ、ぼくの部屋の窓から、大きくなった火がチロチロって出たのがすごい記憶に残ってる。あのままだら絶対死んでただろうなって。だからそのおばさんは本当に、命の恩人なんだ」（高寿）
5	52～	上山の家	夜	上山・高寿・愛美	連絡先を交換したのはいいものの、出かける約束もしていない高寿に上山は呆れ、今から電話するように促す。緊張する高寿は、紙に言うべきことをたくさん書き留めてから彼女に電話をかけた。紙は上山にひったくられたが、なんとか次の土曜日に映画を見に行く約束を取り付けることができた。上山がいて本当によかったと高寿は思った。	「たぶん別れるとき、『あれ？』とか思われたぞ。『この人私のこと好きなのに、なんで誘わないんだろう？』って」（上山）
6	60～	三条河原町通り	土曜日 デート二時間前	高寿	デートの下見を行う。だが、緊張で集中できない。前に課題で描いたキリンのクロッキーは教室で張り出されることになった。そういえば、彼女がクロッキーを描いているのを見て「教室にはられた」とか言っていたのを思い出して、少し不思議な感覚になる。 下見をしながら、自分の「良かった」だけで終わらない、彼女と分かち合いたいと望む自分に気付き、人を好きになるってこういうことなのかと実感した。	このさき彼女との関係がどうなっても、ぼくはこんな心境があることを教えてくれた彼女に感謝するだろう。（高寿・モノローグ）
7	66～	三条河原町通り カフェ	デート	高寿・愛美	待ち合わせ場所に彼女が現れた。下見のおかげで、順調にいろいろなところを見て回ることが出来た。映画を観た後も、ピザを食べたり、カフェに行ったりした。愛美は表情がころころと変わり、面白い。高寿は愛美と過ごす空気の密度が少しずつ変わっていくのを感じた。 川沿いを眺めながら、高寿はクロッキーのことを思い出して、愛美に訊ねてみるが、どうやら憶えていないらしい。	「わたしもねー、いろいろやってるよお。子供が『きれいなお母さん』って自慢できるようなママになりたいって思うんだぁ」（愛美） 「福寿さん、何か言ってなかったっけ？」「ほら、張り出されたとかなんとか」（高寿）
8	84～	三条河原町通り	7の続き	高寿・愛美	帰り際、高寿は愛美に付き合ってくださいという決心していた。愛美は言う。「わたし、ずっとあなたのこと見てたんだよ」とっさに言葉が出ない高寿。「ちょうど、あなたと同じくらい」告白するなら今ではないか、高寿は悩んだ末、「……福寿さん」「ぼくと付き合ってください」と口にした。愛美は涙を浮かべ、「はい」とよれよれの声で答えてくれた。	「だからあのとき……急に『一目惚れ』とか言われるの、ちょっと憧れてたから……嬉しかった」（愛美） 自然と溢れたきみの笑みには、幸福を呼び込みそうな円く光る美しさがある（高寿・モノローグ）

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
9	92～	寂れた道	(回想) 高寿が十歳の頃	高寿・おばさん	サッカー教室の帰り、震災のときに助けてくれたおばさんに声をかけられる。おばさんはたこ焼きを10個買ってくれた。おばさんは「……懐かしいなあ」と言った。泣いているんじゃないかと、高寿は思った。 おばさんは帰りに、高寿に「箱」を渡した。次に会ったときに一緒に開けよう。おばさんは高寿にそう言った。	「あなたは必ずなれるよ。ものを創る人に」 「なくさないで持っていてね。開けちゃダメだよ？」(おばさん)
10	102～	三条駅	夕方	高寿・愛美	朝の講義から、高寿は恋人ができたことに、にやけが止まらなかった。愛美から連絡がきて、三条駅で待ち合わせることにする。高寿は上山に頼まれていたことを思い出して、愛美の写真を撮る。 二人でこうして恋人として歩いていることに嬉しさを感じる高寿。彼女は自分がわがままなこと、食べ物でかなり機嫌が左右されるけどいいの？と訊ねるが、いいに決まっている。「じゃあ、あらためてよろしく願いします」なんてやりとりを交わす。なんていいんだろう。 「そうだ、あとひとつあった」彼女が少し濡れた目をしながら。「わたし、だいぶ涙もろい」	「最初は本を読んでのんびり待とうって思ってたんだけど……なんか、じっとしてられなくて」 「……恋人なんだなって」(高寿)
11	111～	西内くんのマンション	夜	高寿・愛美・高寿の友人たち	彼女はよく泣いた。「愛美ちゃん」「高寿くん」と呼び始めたとき、高寿の友人といっしょに飲み会をしたときや、「みんな、これからも高寿くんと仲良くしてね」と言ったときにも。 ほどなく高寿は丹波橋のアパートで一人暮らしをはじめた。	「潤いだよ」 「観月橋っていい名前だね。見る月の橋って、趣あるね」(愛美)
12	116～	アパート	引っ越しが終わった日の夜	高寿・愛美	彼女と電話していた。愛美と付き合い始めてからほとんど毎日会っていた。明日の待ち合わせの時間を決めて電話を切る。 彼女の門限と電話は午前〇時まで。携帯電話を持たせないくらい厳しい家のわりに、〇時というのは微妙な線だと思った。	「愛美ちゃんと会うの、楽しいよ。ぜんぜん苦にならないし——うん、ほんとにそうだな」(高寿) 『だってそれで今日、会えなかったんだよ?』 『もしかして重い?』(愛美)
13	120～	アパート	引っ越しの次の日	高寿・愛美	彼女が高寿のアパートに遊びに来た。高寿は緊張をかくせない。引っ越しの荷物をほどこしながら、出てくるゲームやCDなどの話で盛り上がる。荷物のなかに小説のアイデア帳が入っていた。小説を書いていることは誰にも秘密にしていたが、そのことを愛美に打ち明ける。 「すごいね。え、どんな話?」と輝く笑顔の愛美に、高寿は宝物が照らされたような気がした。	「絵だけでなく、小説もずっと書いてるんだ。誰にも見せたことないし、内緒にしてるんだけど」(高寿)
14	131～	商店街	13の続き	高寿・愛美	昼食を食べるため、商店街に向かう。喫茶店に入ると、愛美は何を食べるか真剣に悩んでいる。高寿は小説のあらすじを話していると、店員の名前が「ゆうこ」と呼ばれているのを聞いて、愛美は「すごい偶然だね」と言った。たしかに小説のヒロインの名前は「優子」であったが、それはまだ愛美には話しておらず、彼女が知っているはずのないことだった。あわてて誤魔化す愛美。そういえばクロッキーの時も似たようなことがあったと思い、愛美に冗談めかして訊く。「愛美ちゃんってさ、予知能力とかあるんじゃないの?」	「あなたの未来が分かるって言ったら、どうする?」 「まあ予知なんてできないんだけどね。わたしは普通の人間です。残念でした」(愛美)
15	142～	商店街	夕方	高寿・愛美	高寿は彼女とまだキスはおろか手をつないだことさえないのは、彼女をそういうふうに見ることに抵抗があったからだ。「今度はごはん作りにくるね」と言った彼女に、勇気を振り絞り、「手……つなごうか」と口にする、と、恥ずかしそうに彼女も頷いた。浮かれる高寿の隣で、気付くと愛美が涙をこぼしていた。	「嬉し泣き、だろ」(高寿)
16	148～	アパート	夕方	高寿・愛美	待ち合わせ場所に向かう。愛美は髪を切ったみたいだ。高寿の書いた小説の感想を愛美から手紙で教えてもらう。 「面白かったよ」という愛美の言葉に嬉しさが広がる高寿。愛美の笑った顔がとても魅力的で、「やばい、抱きしめたい」と口走る。「抱きしめたらいいんじゃないかな?」高寿は愛美を抱きしめた。変わっていく空気が怖くなり、体を離してしまった。	「ちょっと、気持ち切り替えたくて」(愛美)

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
17	160～	アパート	16の続き	高寿・愛美	高寿の髪を愛美が切る。文句のない出来ばえだった。この日、お互いを「愛美」「高寿」と呼び捨てで呼んだとき、夕食を作ってくれた愛美に「また作ってね」と高寿が言ったときに、愛美はなぜか瞳を潤ませた。愛美はほんとうに泣き虫だ。 夕食後、テレビを並んで見ていると、だんだん言葉数が少なくなってきた。テレビを消して見つめ合い、キスをする。そしてまた、ひかれあう。高寿は、愛美の華奢な体を抱きしめた。	「彼女の手料理ってやつだよなあ。こういうの初めてだけど、なんかすごく嬉しい」（高寿）
18	168～	アパート	夜11時～12時	高寿・愛美	高寿は何でもできそうな幸福に包まれていた。十一時になり、彼女の門限が迫る。彼女は少し泣いているように見えた。駅まで愛美を送りアパートに帰ると、見覚えのない小さなメモ帳が落ちているのに気づく。そこには、数週間後の出来事が、まるで日記のように記されていた。ちょうどそのタイミングで愛美から連絡が来る。『メモ帳はもう見たよね』というニュアンスに高寿は引っかかる。まるで事前に見られることが分かっていたかのようなニュアンスに。『隠してたこと、ぜんぶ話すね』高寿は動揺を隠せなかったが、「大丈夫、受け止められる」そう自分に言い聞かせた。	「〇時までには帰らないと、魔法が解けちゃうよ」（高寿）
19	175～	アパート	18の続き	高寿・愛美	呼び鈴が鳴り、愛美が戻ってきた。愛美は、自分がこの世界の隣にある、別の世界から来たのだと告げる。電波なのか、中二病なのか、何かのサプライズなのかとも思ったが、「高寿くんは今、そう思ってるんだったよね？」という愛美の言葉に、心臓を突かれたような驚きを覚えた。〇時になると『調整』が起こって、高寿とは違う方向に日付が変わるという愛美。全く理解できない高寿。明日、十年前に預かったあの箱を持ってきて、そういうと愛美は目の前から消えてしまった。 夢ではないかと、本気で疑ったが、覚めない。高寿は途方に暮れて時計をたしかめると、〇時を二分過ぎていた。	「高寿は、この世界の隣に別の世界がある……って言ったら、どう思う？」 「この時点だと、ここまで伝わらないものなんだねえ」 「今のわたしには、ちょっとふれたくない、のかな」 「明日、二十九日朝六時に、あなたの大学の教室で待ってる」（愛美）
20	182～	学校	ゴールデンウィーク初日の朝	高寿・愛美	彼女はもう教室にいた。彼女の髪はまだ長く「まだ」切っていないからだという。彼女はキリンのクロッキーのことについても、あのタイミングで「言うことになっていた」と語り、自分が高寿とは時間の流れる方向が違うのだと告げる。否定したい気持ちの高寿に、愛美は続ける。十年前に箱を渡したおばさんこそ、三十歳になった十年後の愛美だと。愛美に促され、あの日の約束通り、ためらいながらも箱を開ける。そこには、現在の高寿と愛美が映った写真が入っていた。しかし、日付が一月近く先になっている。高寿はもう、愛美の言っていることを信じるしかなかった。	「伸びたんじゃないよ。まだ切ってないの」 「明日切るの。明日、美容室に行く。そして三条駅のいつものクネクネした三本柱であなたと待ち合わせする。……でもそれは、あなたにとっては昨日の出来事——だよね」 「その写真は、わたしにとっては二十四日前、あなたにとっては、二十四日後に撮るものだよ」（愛美）
21	192～	学校の棟にほど近い裏山の道	20の続き	高寿・愛美	歩きながら二人は会話を続ける。高寿にとっての思い出は、愛美にとっては未来の出来事で、それを愛美が10歳の時に、三十歳の高寿から教えてもらったという。愛美が五歳の時に死にそうになったところを助けてくれたのも高寿だった。そのときに、愛美は高寿に一目惚れしていたのだという。「あなたと同じだね」とみつめる瞳が潤む。高寿はどうして彼女を見た時に全身から訴えるような直感があったのかについて理解した。そして、愛美はこちらの世界には五年に一度、四十日間しか留まっていられないことを告げる。高寿は愛美を抱き寄せる。そうしないと凍えてしまいそうだった。「ごめんね」と囁く愛美。「……謝ることじゃないよ」高寿はそう言って、愛美にキスをした。	「五歳のわたしは、あなたを見ながら『この人だ』って感じたの。理由はわからないけど、はっとなって、全身で感じたんだよ」 「今こうしている時間はとても大切なの。わたしたちが同じ二十歳の恋人でいられるこの五月二十三日から四月の十三日までの期間は……とてもかけがえがないんだよ」（愛美）

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
22	202～	喫茶店	次の日 大雨	高寿・愛美	高寿は複雑な心境だった。愛美と待ち合わせて、いつものスタバに向かう。いつものようにが阿吽の呼吸が成立する。河川敷でポメラニアンがおじいさんの後ろを付いていく。以前見た光景だったが、愛美のリアクションは初めて見るものに対するそれだった。違和感に高寿は固まる。自分のした過ちに気付いた愛美。今まで見たことのない愛美の焦りと動揺が伝わってくる。取り繕うように以前に高寿が言っていたという記憶に関する説を持ち出すが、高寿はそんな説を愛美に語った覚えはなかった。はっとなって足元を見ると、高寿が今日買った、脳科学の本が目についた。彼女も、さっきよりさらに深刻な表情をしていた。	「愛美はさ」「ぼくにとっての未来から、今日に遡って来てるんだよな」 「わたしたちの辿ってきた、辿っていく、大切な歴史を守らなきゃだから」 （愛美）
23	211～	山中の神社	22の続き	高寿・愛美	いつも通りに明るい愛美。高寿は限界だった。メモ帳の予定通りに愛美が行動していることを知ってから、お互いの「昨日」の記憶を共有できずに、そうと気づかれないように振る舞う瞬間も見えるようになった。まるで愛美と会っているのに愛美ではないような感覚。愛美が懸命な表情で高寿の手を掴む。「これも予定されてる出来事なのか」辛くなりすぎて、高寿は我慢していた最後の一線を越えてしまった。愛美の表情がこわばる。手を振りほどき、高寿は山道を下りて行った。愛美はもう追ってこなかった。	「どうしても、メモ帳どおりに行動しなきゃいけないのかな」 「ぼくが昨日一緒に過ごした愛美を、今のきみは知らない。昨日だけじゃなく、今まで一緒に過ごしてきた思い出全部を、きみは知らない。一度そのことがわかってしまうと、どんどんそれが見えてきて……きみが気づかせまいと努力してる瞬間もわかってしまっ……きみの言ってること、やってることぜんぶ……。……きついんだよ。きみと会ってるのにきみじゃないような、すぐきつい感じになるんだよ」 （高寿）
24	217～	コインランドリー アパート	午前一時	高寿・愛美	コインランドリーで乾燥機をぼんやり眺めながら高寿は考える。愛美の行動はすべて演技で、ほんとうは高寿のことは何とも思っていて……といういやな考えに嵌りそうになる。愛美の写真を眺める。その笑顔を見て、高寿は愛美がいつも泣いていたことを思い出す。高寿にとっての初めては、すべて愛美にとっての「最後」だったこと。ぼくは全然わかってなかった。どれだけ切なくさせたんだろう。高寿の目に映る愛美の写真がばやける。 いてもたってもいられなくなり、アパートの階段を駆け上がり、愛美に電話をかける。日付が変わっていて、前の日の愛美になっていたが、だからこそ伝えたいことがあった。	「ぼくは明日……きみにとっての明日、きみにひどい態度をとってしまう」「それはぼくたちのこの状況に我慢できなくなったせいだ。でも——乗り越えたから。今のぼくは、ちゃんと乗り越えたから」 （高寿） 『わたしもだよ』『わたしも、あなたのことが好き』（愛美）
25	226～	アパート	朝	高寿・愛美	始発で愛美が部屋に来た。高寿は愛美を抱きしめる。「がんばってるんだな」高寿の言葉に愛美は涙を流し、しゃくりあげる。「……聞いてないよ」と不器用に笑う愛美。高寿はこんなことを言うということを事前に教えていなかったのだろう。過ぎて行った日々の愛美に伝えたかった。きみはちゃんとやり遂げたよ、と。ぼくはきみのことを尊敬する。心から愛している。	「初めて手をつないだときに泣いた。きみにとっては最後だったからだ。その日を境にして、つなげない関係になっていくからだ。……ぼくが付き合ってくださいって言ったときに目が潤んだのもそうだね。付き合う前に戻っていくからだ。……呼び方も、高寿、高寿くん、南山くんになっていって……どんどん巻き戻しになっていって……最後には知らない人みたいに振る舞わなきゃいけなくなって……」 「それって……すごく辛いよな」「がんばってるんだな」 （高寿） 「あなたのことが好きで。あなたと過ごしてきた時間が……子供の頃からの日々がとても素敵で大切だから……だから、がんばれるんだよ」 （愛美）
26	234～	アパート	（非明示）	高寿・愛美・上山	上山がアパートに遊びに来た。愛美の前で、高寿がデートに誘ったときの様子や、昔話などを面白おかしく話し、愛美も興味津々だった。夕方になり、夕食を作っている愛美。上山は高寿に、高寿の雰囲気が少し変わったなと言った。 帰り際、「南山のこと、よろしく」と言った上山の言葉に、一瞬切なげな表情を浮かべた愛美だが、すぐに明るく答えた。高寿は愛美を駅まで送る。二人は別れるまでの一日一日を大事に過ごそうと「覚悟」を決める。 『ぼくたちはすれ違ってなんかいない。端と端を結んだ輪になって、ひとつにつながってるんだ』愛美にとっての最初の日、高寿が愛美に言ったものだという。高寿にとっての最後の日、不安になったわたしに言ってあげてほしい。高寿は愛美に約束した。	「さっきから思ってたけど、お前ちょっと雰囲気変わったな」 （上山） 「今の高寿とは、今日でお別れなのかな」 「今のあなたとは今日でお別れ。明日からは少しずつ…こういう関係じゃなくなっていくんだって」 （愛美）

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
27	242～	日常	(非明示)	高寿・愛美	高寿は愛美との残された日々を大切に過ごしていった。だいたいがメモ帳通りの行動だったが、むしろそれをネタにして楽しんだ。なにげないテンションで、笑ったり、おいしいねって言い合ったり、けれどふとした瞬間をいとおしいんで、愛美のいる美しい風景を目に焼きつけた。	「おはよう高寿くん。本日のきみの予定を発表します。……わたしと銀閣寺へ行きます」（愛美）
28	243～	アパート	5月15日	高寿・愛美	雨の日は、アパートの部屋で一緒に過ごした。高寿は、以前愛美にもらった手紙は存在しているのだろうかとか疑問に思ったが、ちゃんとそこにあった。愛美は手紙の丸写しはしたくないと、高寿の書いた原稿を手にする。 愛美をお願いされて、高寿はキーボードの前に座る。六畳間にショパンの『雨だれ』がゆっくり、流れる。	「ほんと、ヘンな感じだなあ」「ぼくはもうきみからの感想をもらってるのに、きみは今、その原稿を読んてるなんて」（高寿） 「ねえ高寿。これだけは今言っておくね」「これ、面白いね」（愛美）
29	249～	実家への道	5月22日	高寿・愛美	会うなり、愛美が泣きそうな顔をした。枚方に向かう列車の中、愛美のまなざしに気づく。それは愛美に声をかけた日、高寿に向けていた視線と同じものだった。明日が別れの日だが、まだ感覚が追いついていない。 駅から高寿の両親の営んでいる自転車屋に向かう。高寿は思い出を語りながら道を行く。途中のたこ焼き屋でたこ焼きを買う。あつさに足をトントンさせる動きが、あの日の、30歳の愛美と重なる。あれはたしかに、きみだった。	「高寿の生まれ故郷なんだね」（愛美） 「なら余裕だよ。ガキの頃やりたかったんだ。ここでこの『30個』を買うの』（高寿）
30	254～	自転車屋	29の続き	高寿・愛美・高寿の両親	高寿の両親に笑顔で挨拶をする愛美。高寿は恥ずかしかったが、愛美との別れが迫っている、最初で最後だと思ったとき、親に愛美を会わせておきたいと感じた。寡黙な父と、愛想のいい母。高寿はいろいろな感情で胸が締め付けられて、曖昧な表情を浮かべることしかできなかった。	「そうよ、福寿さん、高寿のことをよろしくね?」 「こんないい子、あんた二度と会えないだろうから、逃がしちゃだめよ」（高寿の母）
31	259～	バス停のベンチ	30の続き	高寿・愛美	誰もいないバス停のベンチで、二人しずかに手をつないでいた。「……どうして愛美とは家族になれないんだろう……」悲しみが、絶望が溢れてくる。「……ごめんね」「なんで謝るんだよ……」穏やかな午後のバス停で、二人でひたすら泣いた。 今日が終わっていく。最後の日が来てしまう。	「……実家から離れすぎるのが怖かったのかもしれない」「思ってたより、ぼくは家とつながってるのかもしれない」（高寿）
32	261～	丹波橋	5月23日	高寿・愛美	待ち合わせ場所に現れた愛美は、とても久しぶりの相手を目にしたときの、遠慮を含んだ照れ笑いを浮かべていた。愛美にとってはこれが『最初』だった。高寿はショックを隠すために、あえて軽いトーンを出す。部屋に向かおうと、無意識に差し出した手を見て、愛美が軽く固まっていた。「慣らしです」とつぶやき手をつなぐ 愛美の頬が紅くなっていく。慣れていない愛美は年下の態度で接してくる。同じ時を過ごした四十日の終わりの日、高寿と愛美の逆転が垣間見えた。	「やっぱり隠せないですね」（愛美） 「大丈夫。昨日さんさん悲しんで、心の準備はしてるから」（高寿）
33	263～	アパート	32の続き	高寿・愛美	アパートに着いて、コーヒーをいれる高寿。てきぱきと作業を進める愛美はやはり愛美のままだった。愛美は手帳を取り出して、高寿に今までの出来事を聞かせてほしいと言った。「あなたとの歴史を変えたくないから」と、高寿の語る今までの思い出をすべて記していく。 すべて語りつくした後高寿が知ったのは、愛美の失言や動揺もすべて分かった上でやっていたという些細な事実と、昨日までの三十九日間に及ぶ、彼女の献身だった。高寿は打ちひしがれた。「……それじゃ愛美はちっとも楽しくないじゃないか」「そんなことないよ」と愛美が穏やかに微笑む。愛美は高寿の腕を取り、もたれかかってきた。「こういうことは好きにできるんだから、なんの問題もないよ」きみは本当にすごい。もう、いつもの愛美との感じになりつつある。 愛美を抱きしめて、頭を撫でる。「ほんとうに、なんの問題もないなあ」愛美はつぶやいた。	「そんな細かい台本どおりにやっていったら、愛美はぜんぜん楽しくないじゃないか」（高寿） 「一緒にいるだけで嬉しいし、何があるかわかっていても、楽しいものは楽しいよ」（愛美）

○ぼくは明日、昨日のきみとデートする／七月隆文

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
34	268～	商店街・宝ヶ池	33の続き	高寿・愛美	商店街で買い物をして、愛美は昼食を作ってくれた。おいしくて泣きそうだった。できるだけ目に映してたくて愛美を見つめ続けていた。 叡山電車で、出会った日と同じ宝ヶ池に、最後の場所に向かう。 箱の中に入っていた写真を再現するために構図をみつけて、二人で写真を撮る。気のせいかもしれないが、手元にある写真とまったく同じように見えた。 これで、最後のイベントが終わってしまった。あとはもう、別れしかない。	「今の高寿と同じ気持ちになるんだもんね。泣かないようにしないと」「泣いたらだめだよ」（愛美） 「……泣いてないよ」（高寿）
35	273～	宝ヶ池	19時33分	高寿・愛美	愛美は演技に興味が出てきたという。美容師の学校と演技の学校に通おうかと考えている愛美。高寿は十年後の愛美が「テレビに出ている人」になっていることを思い出したが、内緒にしておくことにした。 愛美の演技は上手かったと高寿が言うと、「あなたは私の……王子様だから」と、透き通った横顔で言った。	「ずっと憧れて、そうなれたらいいなって夢見てて……だから十五の時それを聞かされた瞬間は泣きそうなくらい嬉しかった。だからね……」 「恋人になるのは、すごく簡単なの」（愛美）
36	275～	宝ヶ池	22時05分	高寿・愛美	二人は話すこともやめて、ただみつめあう時間がほとんどになった。夜になって、ぐっと冷えてきている。 「やっぱりちょっと寒い」愛美はそう言って、高寿の肩にもたれかかった。 手をつないだ。	「……この缶、取っとうかな」「愛美のもいっしょに」（高寿） 「やだ、ヘンタイっぽい」「洗わなきゃダメだよ?」（愛美）
37	276～	宝ヶ池	23時57分	高寿・愛美	時間が迫る。高寿は吐きそうになり、愛美を抱きしめる。不安になる愛美に高寿は約束したとおり、愛美に語りかける。「ぼくたちはすれ違ってなんかいない。端と端を結んだ輪になって、ひとつにつながってるんだ」「二人でひとつの命なんだ」 愛美が消えていこうとしている。今までの感謝の気持ち、「ぼくはきみを愛してる」という言葉を愛美に伝える。愛美は円く光る印象の福笑いを浮かべて。消えた。	「わたし、いい恋人だった?」 「今日まで、楽しかった?」（愛美）
38	281～	となりのせかい	愛美が五歳の時	「彼」・愛美	愛美は家族に連れられて「となりのせかい」に家族旅行にやってきた。祭りの屋台に愛美は楽しかったが、両親とはぐれてしまった。不安になっていると、なにか変な臭いのする液体が降ってきた。そのとき、男の人が目の前に現れ「爆発するぞ!」と叫んだ。愛美は彼に手を引っ張られた。瞬間、愛美は特別な感覚に貫かれた。 爆音。炎。彼の大人の肩越しに熱風が吹き過ぎる。「大丈夫?」という彼を見て、純粋な本能で感じとった。——このひとだ。 彼は愛美の無事を確認してから、深く、さみしそうな目で「……さようなら」と言った。そして、そうじゃなかったという風に首を振ってから「また会おう」と言い直した。「また会える?」愛美の言葉に、彼は笑顔でうなずいた。「また会えるよ」	「また会える?」（愛美） 「また会えるよ」（「彼」）
39	285～	アパート	2010年 4月13日	愛美	愛美は、五歳のあの日のことを思い出しながら、アパートの階段を上った。三階の五番目の部屋、そこにはまだ入居者がいない。愛美はドアに掌をあて、まぶたを閉じる。微かに睫を滲ませた。目を開けて、自分を奮い立たせるように、笑んだ。そしてまた歩き出す。彼にいつも送ってもらった駅までの道のり、何度も通った駅の改札、ホームまでの階段。八時一分着、出町柳行き特急、一番後ろの車両、二番目のドア。最後に確認して、四十日間お世話になったシステム手帳をしまう。 ドアが開き、混雑する車内のなか目指すところに向かう。行く手の隙間に、吊革を持ちつつ一人だけやる気に満ちた目をした男の子が見えた。 そして。 ——高寿。 彼のもとに、辿り着いた。	なし

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	9～	一杯飲み屋	数年前	センセイ・ツキコ	ツキコとセンセイは数年前に駅前の一杯飲み屋で隣り合わせた。「大島ツキコさんですね」と声をかけてきた人物が高校時代の先生だったことを思い出すのには時間がかかった。名前が分からないのをごまかすために「センセイ」と呼びかけた。以来、センセイはセンセイになった。 以来、二人で飲むことが増えた。	「ときどきこの店でお見かけしているんですよ、キミのことは」 「はあ」 「センセイこそお変わりなく」（ツキコ）
2	12～	センセイの家	初めてのセンセイの家	センセイ・ツキコ	はじめてセンセイの家に誘われた時には少し身構えた。センセイの部屋は思ったよりも雑然としていた。朧月がくっきりと輝いている。	「ほそぼそ生きてるんですね」（ツキコ） 「そのうちに全部死に絶えるけれどねえ」（センセイ）
3	23～	市	二十八日	センセイ・ツキコ	「八の市」という、八のつく日に開かれる市に行きましょう、と先生は飲み屋でツキコを誘った。生活のものあれこれを取り扱った市だという。センセイが手帳に予定を書き込む。ツキコも同じように手帳に予定を書き込んだ。	「市は市ですよ。市といえば、生活のものあれこれです。むろん」（センセイ）
4	26～	バス停・弁当屋	日曜日 暑い夏の一 日の日	センセイ・ツキコ	バス停の前で待っているとセンセイが来た。バスに乗って寺町まで着き、少し歩くと、センセイは「腹が減りませんか」といって、お弁当屋さんに入っていった。豚キムチ弁当を注文したセンセイと同じく、ツキコも豚キムチ弁当を注文した。	（料理を）「恋人がいるときはするんですがねえ」（ツキコ） 「それは道理だ。ワタクシも恋人の一人や二人、つくればいいのでしょうね」（センセイ）
5	29～	道沿い	4の続き	センセイ・ツキコ	道沿いにばらばらと露店があらわれはじめた。二人はベンチに並び、弁当を食べる。食べ終わり、ふたたび露店を回っていると、食料品を扱う店、家庭電化製品を扱う店と移り変わっていく。センセイは古いレコードプレイヤーでかかっているバイオリンの音色を、曲が終わるまでじっと聞いていた。	「ここいらはね、四十年前の台風の大水のときに、すっかり水にやられてね」（センセイ）
6	33～	猫・ひよこを売る露店	5の続き 夕方の気配	センセイ・ツキコ	露店を回っていると、猫を売っている店があった。センセイはひよこの露店に近づいていき、「ワタクシも、買います」と突然言っ、雌と雄を一羽ずつ取り出した。そして、支払いをすませて、ひよこの箱をさかさに持った帽子の中に入れ、大事そうに脇に抱えて歩きはじめた。	「ツキコさんは酒にかんしてはできのいい生徒だ。国語の成績の方はさっぱりでしたが」（センセイ）
7	35～	飲み屋	6の続き	センセイ・ツキコ	センセイが雄雌二匹のひよこを飼ったのは、単に一羽だと可哀相だからという理由らしい。ひよこを早く箱から出してあげたいと、この日はビールだけでおしまいにして、きっちりと割り勘にした。	「センセイはお酌されるのが、嫌いですか」（ツキコ） 「上手な人ならいいんですがね、ツキコさんは下手だ」（センセイ）
8	39～	飲み屋	ペナントレースの終盤	センセイ・ツキコ	センセイと口をきかなくなった。そのきっかけは、いつもの居酒屋でのラジオの野球中継だった。巨人ファンのセンセイに対し、ツキコは巨人嫌いだった。巨人が勝ったことで、センセイは上機嫌になり、巨人嫌いなツキコに対して厭味を楽しんだ。それを感じ取ったツキコはますますいまましい思いになり、「巨人っていう球団はね、くそつたれです」といって、センセイがついでくれた酒を、あまさず空いた皿にこぼしたのだった。 センセイと口をきかなくなったことで、そういえばセンセイ以外の人間と、隣あって酒を飲んだり道を歩いたり面白げなものを見たりといったことをしていないことに気づく。センセイと知らんぷりをしあうのはおさまりが悪いが、かんたんにおさまり良く直すのも癪だった。	「日本人なのに、巨人が嫌いとは」（センセイ） 「なんですかその偏見は」（ツキコ）
9	46～	合羽橋	（非明示）	ツキコ	仕事で合羽橋に行くことがあった。その際に立ち寄った刃物屋で、センセイの家に合いそうなセール中の卸金の一つ買った。その刃物を見ているうちに、なぜかセンセイに会いたくなった。この卸金を渡して知らんぷりを続けるほどセンセイは不実ではないと思うが、いかんせん巨人ファンなので、そこまで信用するわけには、いかない。	なし

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
10	48～	飲み屋	9からしばらくして	センセイ・ツキコ	しばらくして、居酒屋でセンセイに行き合った。あいかわらずセンセイは知らんぷりをきめこんでいるが、ツキコもつられて同じ調子になってしまう。センセイが湯豆腐を注文すると、ツキコも湯豆腐を注文した。 途中、センセイの視線がじわじわとツキコに寄せられているのを感じていた。ツキコも慎重にセンセイの方を振り向いた。「こちらに、来ますか」センセイが、小さく言った。 帰り道、卸金を筒慥貪なやりとりで渡すツキコ。センセイは芭蕉の句を口ずさみながら、「こんど一緒に、とろろ汁作りましょう。」と言った。	「卸金ですね」（センセイ） 「卸金です」（ツキコ） 「くださるんですか？」（センセイ） 「どうぞ」（ツキコ）
11	53～	飲み屋	（非明示）	センセイ・ツキコ・主人	いつもの飲み屋で、センセイが「キノコがわたしは好きですね」と言い始めた。すると、いつもは親しく話しかけてくることのない店の主人がセンセイの話に食いついた。センセイとツキコは、主人が毎年栃木でやっているというキノコ狩に誘われた。	「キノコといえば松茸、と決めるのは、野球といえば巨人、と決めるのと同じくらい短絡的なことですね」（センセイ） 「たとえば、ムラサキシメジなんてのを、採ったその場で焼いて醤油をたらして食べる。たまりません」（センセイ）
12	56～	山道	日曜の、朝六時	センセイ・ツキコ・サトルさん（主人）	主人の危なっかしい運転でひやひやさせられたが、山道に着いたところでサトルさんは車から降りた。二人車内でサトルさんの行く方向を見つめていると、センセイは突然「ツキコさん、帰れますかね」と言った。お疲れになったんでしょう、引き返してもいいんですよと言うツキコに「このまま一緒に行きましょう。どこまででも」とセンセイは言った。ツキコは驚いてセンセイの表情を窺ったが、いつもと変わりなかった。 そうしているうちに、サトルさんが、従兄弟のトオルさんを連れて戻ってきた。	「なんだかワタクシはこのまま二度と帰れないんじゃないかという気分になってきました」（センセイ）
13	62～	山道	12の続き	センセイ・ツキコ・サトルさん・トオルさん	息の上がっているツキコとは対照的に、センセイはすいすいと山を登っていく。センセイの姿は時々木のなかにまじって見えなくなっては、気がつくと隣にいたりする。いつも一緒だと言っているでしょう、というセンセイだが、そんなふうに言いながら、いつだってセンセイは先に行ってしまうのだ。	「心意気さえあれば、どんな場所でも、人間は多くのことを学べるものですよ」（センセイ） 「ツキコさん、ワタクシはいつも一緒だと言っているでしょう」（センセイ）
14	69～	山道	13の続き	センセイ・ツキコ・サトルさん・トオルさん	他のみんなは山の奥へ奥へと入っていつってしまったが、ツキコは大きな切り株の上に座りながら、空を見上げていた。こんなに多くの生き物に囲まれているこの環境が不思議に思えた。ちょうどそのとき、センセイたちがキノコを抱えて戻ってきた。	「乙女の感傷、ってやつですか」（トオルさん） 「乙女ですとも」（ツキコ）
15	72～	山道	13の続き	センセイ・ツキコ・サトルさん・トオルさん・（妻）	センセイはキノコを食べながら、昔に「妻だった者」と息子でハイキングに訪れた時の話をした。ねえ、ワライタケ、みつけちゃった。そうセンセイの耳もとにささやきかけた妻は十五年前に逃げてしまったという。息子も、妻が出奔した年齢、五十歳にじきに届こうとしている。 センセイは続ける。妻はワライタケが毒キノコだと知っていながら、大丈夫よといって食べてしまった。慌てたセンセイは泣きじゃくる息子と一緒に妻を病院に連れて行った。その夜、センセイは妻に説教した。自分がどれだけ人に迷惑をかけたのかと。妻は反省したあと、しみじみと「人が生きていくことって、誰かに迷惑をかけることなのね」と言った。	「ワライタケじゃ死なないわよ」（妻） 「ワタクシは迷惑なんぞかけません。あなたが、迷惑をかけたんでしょう。自分個人のことを人間いっぱいに敷衍しないでください」（センセイ）
16	80～	山道	14の続き	センセイ・ツキコ・サトルさん・トオルさん	トオルさんとサトルさんがベニテングタケだと言って、干しキノコをツキコに差し出した。猛毒のキノコであるが、トオルさんもサトルさんも、センセイまでもがそれをしゃぶっている。本物が偽物かも分からず、ニヤニヤしているトオルさんたちの前でそれをおそるおそるなめてみた後、それを数回噛んだ。 そのまま一時間ほど飲みつづけたが、別状はなかった。帰り道で笑いたくなったり泣きたくなったりした。センセイ、逃げた奥さまのこと今でも好きなんですか、とツキコが呟くと、センセイの笑い声は高くなった。そして、妻はいまだワタクシにははかりかねる存在なんですな、と言った。	「毒キノコなのに、だいじょうぶなんですか」（ツキコ） 「さあねえ」（センセイ）

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
17	85~	実家	正月明け （正月）	ツキコ・母	蛍光灯の外し方がわからず、無理やりにやっていると蛍光灯が割れてしまった。あわてて椅子から降りた拍子に足の裏を切ってしまった。貧血のせいかめまいがする。そういえば朝食も食べていない。正月に生家に帰ってきた後は、いつもこんなふうだった。 実家に帰り、母の用意してくれた湯豆腐を食べながら会話をしたが、ごちない。何を話していいのか、近いがゆえに分からなくなった。	なし
18	88~	ツキコの家	17の続き	ツキコ	ツキコはめまいが引かないまま、天井をぼんやりと眺めながら昔の恋人のことを思い出していた。なんとなく電話をかけあわなくなったところを友人に呼び出されて、どうして電話してあげなかったの、と言われてツキコはぼかんとした。当事者のツキコではなく第三者の友人に相談することがまったくの見当違いとしか思えなかった。自分は恋愛というものをしにくい質なのかもしれない、はんぶん上の空で友人の言葉を聞きながら思った。	なし
19	91~	ツキコの家	18の続き	ツキコ	めまいも引いてきて、足の出血も止まってきたので床を片付ける。本当は恋人のことをずいぶんと好きだったこと、電話をしたかったが、電話の向こうでひややかな声を出されたらと思うと怖かったこと。そんなことを思いながらかごからりんごを一つ取り出した。母と同じように、丸のままくるくと皮をむいていると、途中で皮は切れた。突然流れ出した涙にツキコは驚いた。	なし
20	93~	道・飲み屋	19の続き	センセイ・ツキコ	厚いコートを着て、ツキコは部屋を出た。途中で涙がなんどもじんわりと出た。バス停の前に立ったが、最終のバスはすでに出てしまっていた。センセイ、帰り道がわかりません。そう呟いてみたが、センセイはいない。スキーの歌を口ずさんでみたが、歌詞が思い出せなくなり、また泣きたくなった。ツキコさん、という声があるのは頭の中の声だろう。ツキコさん。もう一度呼ばれて振り返ると、本当にセンセイがそこに立っていた。涙は出なくなっていた。サトルさんの店の並びにある店に入り、お酒を飲んだ。えらいえらい。センセイにそう言われて頭を撫でられながら、ツキコはゆっくりとお酒をすすった。	なし
21	99~	道	夕方	センセイ・ツキコ	通りを歩いていると、センセイにばったり行きあった。忙しさに一段落がつき、土曜は昼過ぎまで眠り、そのあと風呂に入ったり悠悠自適に過ごしていたが、夕暮れになると、唐突に心細さが押し寄せてきた。この心細さを抱いているのは自分だけではないと確かめたくなり、通りに出たところ、センセイにばったりと行きあったのだ。	なし
22	102~	おでん屋	21の続き	センセイ・ツキコ・男	尻が痛いというセンセイ。サトルさんの店だと心配されてしまうからと、サトルさんの店の隣にあるおでん屋に入った。おいしいですねえ。そう言いながらおでんを食べていると、センセイはツキコの頭を軽く撫でた。このごろ、おりにふれてツキコの頭を撫でるようになっている。 隣の男が突然話しかけてきた。そうとうに酔いが深い様子だ。「歳も離れてるんだろうのに、いちゃいちゃしちゃってさ」と下品に絡まれるが、センセイは無視を続けた。ひととおり絡んだあと、男はカウンターに突っ伏して眠ってしまった。	「あのさ、いいご身分だよね、おたくら」（男） 「このじいさん、あんたとヤッてるの」（男）

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
23	108～	おでん屋	22の続き	センセイ・ツキコ	「ツキコさん、もうしわけない」とセンセイは謝ったが、ツキコはセンセイにこんな無為な謝罪をさせた男に対する怒りが収まらない。センセイは眠っている男のピアスを「すってやりました」と天真爛漫な表情で見せる。内田百閒の素人拘摸、という話に倣って盗ったという。そのあと、勘定を別々にすませて店を出た。 帰り道、センセイは心細くなること、ありますか、と訊ねてみた。センセイは体の痛みがいちばん心細さを誘うと言った。そうなんですね。ツキコも前を向いたまま答えた。	「ツキコさん、ワタクシは、相手をこらしめるためにこういうことをしたのでは、ありません。ただ、いまいまいしく思っている自分を満足させるために、すったのです。そここのところを、勘違いなさらぬよう」（センセイ）
24	115～	バス停	（非明示）	センセイ・ツキコ	石野先生から、学校の恒例行事の花見の誘いが来たという。石野先生は、ツキコの学生時代には、男女問わずとても人気のある女性美術教師だった。センセイはツキコに日程を念押しして確認した。	「四月七日ですからね。お忘れなく」（センセイ）
25	118～	花見会場	四月七日	センセイ・ツキコ・先生方	花見になど行きたくなかったが、当日、センセイはらしくもなく、ツキコのアパートの下まで迎えに来ていた。花見会場では、卒業生や先生たちで賑わっており、ツキコは誰が誰だか分からなくなった。センセイは石野先生と歓談しており、ツキコは隅のほうで一人酒をすすっていた。	なし
26	120～	花見会場	25の続き	ツキコ・小島	突然中年の男性に話しかけられた。はじめは誰か分からなかったが、高校の同級生の小島であることを思い出す。小島とツキコは近況を話す。小島は同級生と一度結婚したらしいが、離婚したらしい。ツキコも、学生時代に一度だけ小島とデートをしたことがあった。「大町は、結婚しないの」と訊かれたが、冗談で返した。	「大町は、結婚しないの」（小島）
27	124～	花見会場	26の続き	ツキコ・小島	ツキコを呼ぶセンセイの声が聞こえた。石野先生も手招きをしていて、センセイの声は心なしかはずんでいた。ツキコは聞こえないふりをした。 日が暮れてきた。小島は抜け出して飲みなおさないかとツキコを誘う。ツキコは雑に敷物を払い、「行こう」と言って立ち上がった。センセイの姿は、暗闇ごしでよく見えなかった。	「いつも大町って、どうしようかな、とか、迷うわねえ、とか言ってたよ、そういえば」「それも、確信に満ちて、そう言うんだよな」（小島）
28	129～	バー	27の続き	ツキコ・小島	小島は、ビルの地下にあるこぢんまりとしたバーに連れていってくれた。慣れた様子の小島と並び、ツキコは不思議な時間に入り込んだような気持ちになっていた。センセイのことが時折ちらりと頭の中をよぎったが、どれも、ちらり、で終わった。十時を過ぎてきたところで、ツキコは小島と軽く腕を組むようなかたちで地上への階段をゆっくりのぼっていった。	「ほんとに大町は変わってないな」（小島）
29	133～	花見会場	28の続き	ツキコ・小島	小島は大人の男というような所作でツキコと歩く。花見会場に戻ると、人っ子一人おらず、ゴミなどもきれいに片付けられていた。ツキコを抱きしめる小島。ツキコはそれを受け入れつつも、なんだか妙だな、と頭では思っている。キスをされたが、嫌ではないが嬉しくはなかった。 ツキコは心は高校生のままで、センセイのことが気にかかっている。小島は大人になり、センセイのことが苦手だったという。「帰ろうか」ツキコはそう言った。センセイも、小島も、何もかもが遠かった。タクシーの窓越しに流れる風景を、ツキコはじっと眺めていた。	「このまま、夜明まで歩きつづけるのかと思った」（小島） 「わたしも、なんかそんな気分だった」（ツキコ）
30	145～	飲み屋	花見の翌々日～	ツキコ・サトルさん	花見の翌々日も、その翌週も、センセイとは入れ違いになってしまい、会釈だけを交わす。 サトルさんはセンセイとデートをしないのかとツキコに訊ねる。したくないと答えると、へえ、とサトルさんは返した。その声が気に食わず、ツキコはとび魚の刺身を所在なく箸でつついた。 太った男性のお客さんによると、センセイはきれいなご婦人と一緒だったという。ツキコは何でもない風に振る舞った。	「ツキコさん、先生とデートしなくていいんですかい」（サトルさん） 「デートなんてしたことないわよ」（ツキコ）

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
31	149～	商店街	土曜日	ツキコ・センセイ	小島からデートに誘われた。小島に会う前に髪を切ろうと商店街を歩くと、センセイと出くわした。今からデートだと言うと、センセイは深刻そうな顔をして、ツキコをパチンコ屋に誘った。センセイの台はたくさんの玉が出ていた。	「デートって、男性と、ですか」（センセイ） 「誰だっていいじゃありませんか」（ツキコ）
32	157～	商店街	31の続き	ツキコ・センセイ	パチンコの景品をツキコに差し出すセンセイ。センセイと並んで商店街を戻る道中、ツキコはセンセイをサトルさんの店に誘う。明日はデートじゃないんですかと言うセンセイに、ツキコは、まあいいです。と答えた。まあ、いいです。ツキコは心の中で繰り返しながら、センセイに寄り添った。	「歩きましょうか」（ツキコ） 「歩きましょう」（センセイ）
33	161～	バー	梅雨に入る前	ツキコ・小島	小島から旅行に行かないかと誘われた。ツキコはあいまいな態度をとった。「大人」になった小島に対し、ツキコは自身がいまだ大人になれていないような気がしていた。	「あのねえ、僕はあなたに、旅行に行こう、二人きりで、ってさそってるの。分かってるのかなあ」（小島）
34	165～	飲み屋	（非明示）	ツキコ・センセイ	ツキコはセンセイに、小島に旅行に誘われたことを言いそうになったが、言わなかった。なにかありましたか、と訊ねるセンセイに、なんでもありませんてば。あるはずないでしょう。と、強く否定する。今日は飲みすぎですよ。そっというセンセイに、ほっといてください。そうツキコは言って、四本目の銚子を注文する。ツキコは一瞬センセイにもたれかかった。センセイがそれに気づいたかどうかは分からなかった。	「センセイ、そんなに鮎がお好きなら、温泉宿かなにかに鮎を食べに行ったりしないんですか」（ツキコ） 「わざわざそのためには行きませんねえ」（センセイ）
35	168～	センセイの家	34の続き	ツキコ・センセイ	気がつくと、センセイの家にいる。ツキコはまだ酔いが残っているような気がしていた。センセイも酔っているのだろうか。 どこかに行きませんか、ツキコの言葉に、どこにも、行きません。センセイは返した。ツキコは聞き分けのない子供のように、いやだと駄々をこねる。つい口走ってしまった、センセイが好きなんだものという言葉。ツキコはだめ押しのようにもう一回繰り返した。センセイはあきれた顔でツキコをじっと見ていた。	「ききわけのないことを言うんじゃない」（センセイ） 「ききわけなんかぜんぜんないです。だってわたしセンセイが好きなんだもの」（ツキコ）
36	171～	センセイの家	35の続き	ツキコ・センセイ	遠いところで雷が鳴った。怖がって固まっているツキコを抱きしめるセンセイ。雷を怖がるような人間は、ただの子供ですからね。そう言って笑うセンセイ。ほんとにセンセイが好きなんですってば。ツキコの声は雷と笑い声にかき消されてセンセイには届かない。まるで夢を見ているみたいだと、ツキコは思った。	「ツキコさんが妙なことを言うから、妙な空になってしまいました」（センセイ）
37	175～	民宿	土曜日	ツキコ・センセイ	センセイと島の小さな民宿にいた。雷の夜、あまりにツキコが請うので、根負けしたのか、なにか心情の変化があったのか分からないが、センセイがツキコを旅行に行こうと誘ったのだった。部屋の隅には、いつもの黒いセンセイの鞆が置いてあった。	「ツキコさん、次の土曜日曜と、島に行きませんか」（センセイ） 「行きます行きます」（ツキコ）
38	179～	島	37の続き	ツキコ・センセイ	センセイと島の散策に出かける。ぐんぐん坂をのぼっていくセンセイにツキコも後を追う。「着きました」と言ったその場所は小さな墓地だった。「妻の、墓です」という言葉にツキコは声をのんだ。「ワタクシは、今でもやはり妻のことが気になるんでしょうかね」今でも。そんなことをわざわざ言うためにこんなさびれた島まで連れてきたのか。ツキコは「宿に帰ります」そう言ってセンセイに背を向けた。くそじじい。そう繰り返しながら坂を下りた。 宿に戻ったときにはもう外は暗かった。センセイ、早く帰ってきて。さっきの怒りも忘れて、ツキコはつぶやいていた。	「ツキコさんと、一緒に来ようと思ったのです」（センセイ） 「ワタクシは、今でもやはり妻のことが気になるんでしょうかね」（センセイ）
39	191～	民宿	38の続き	ツキコ・センセイ	センセイと蛸しゃぶを食べる。センセイはあれからずいぶん経ってから坂を下りてきたのだった。 センセイに促されて温泉に向かう。夜が長いようなら部屋にいらっしゃいというセンセイの言葉に、ツキコは「期待するなかれ、期待するなかれ」と一人で繰り返した。	「湯からあがってもまだ夜が長いようでしたら、ワタクシの部屋にいらっしゃい」「意味というほどのものはありません」（センセイ）

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
40	193～	民宿	39の続き	ツキコ・センセイ	温泉から上がって念入りに髪にドライヤーをあてると、知らぬ間に一時間以上が過ぎていた。ツキコはセンセイの部屋に向かった。 部屋でセンセイと酒を交わす。「静かですね」何十回めかのこの台詞を、二人同時に行った。姿勢を正し、二人向かい合ったが、同時に視線を逸らせた。「眠りますか、もう」センセイの言葉に「はい」と答えて、ツキコは部屋に戻った。他に何も言いようがなかった。	「静かですね」（ツキコ） 「静かですね」（センセイ）
41	200～	民宿	40の続き	ツキコ・センセイ	夜中に目が覚めた。何をしても目は冴えるばかりだ。センセイの部屋の前でセンセイの様子をうかがっていると、戸が開き、センセイは部屋の中へ入るよう促した。センセイは句を書いていた。ツキコとセンセイは二人でどんだん句を作った。しまいには寝てしまっていた。 目が覚めると、センセイは布団のなかでツキコを待っていた。センセイはツキコの髪にキスをし、胸を触った。眠りたくないのにまぶたが開けていられない。センセイも同様にかすかな寢息を立てている。二人で深い眠りにひきずりこまれていく。	「ツキコさん、いらっしゃい」（センセイ） 「いい胸です。いい子だ、ツキコさんは」（センセイ）
42	207～	飲み屋	（非明示）	ツキコ・センセイ	このごろセンセイに会っていない。カウンターの端に腰かけ、ひややっこを注文する。センセイの家を訪ねてみようか、と考えながら手洗いにいき、戻ってくると、センセイはいつものように端然と座っていた。さあさあツキコさんも飲みましょう。結局その夜はいままでにない深酒になった。	「豆腐はたいしたものです」（センセイ） 「はあ」（ツキコ）
43	209～	干潟	42の続き	ツキコ・センセイ	気がつくとツキコはセンセイと干潟にいた。センセイはこの場所に心当たりがあるようだ。ここには時々来てしまうのだが、人と一緒に来たのは初めてだという。いつの間にか手にはカップ酒が握られていて、いくら飲んでも少しも酔いがまわってこない。そういう、場所なんです。センセイが独り言のようにつぶやく。センセイの輪郭がぼやけはじめた。また、必ず来ますから。そう言いながら、センセイはずっと消えてしまった。	「サトルさんの店を出たんでしょうか、わたしたち」（ツキコ） 「出てないかもしれません」（センセイ）
44	212～	干潟	43の続き	ツキコ・センセイ	約束どおり、センセイは間もなく現れた。センセイはいつの間にか家に帰っていたという。干潟にいる人々はほとんどが帽子をかぶっており、しゃがんで貝を掘っていた。センセイは話しながら突然三転倒立を始めたが、ツキコはそれを不思議にも思わなくなっている。婦人と髭の男が現れ、手品をする。様々な動物を引っ張り出し、センセイに止まらせる。猿を引っ張り出してセンセイの背中にしよわせたところで婦人は「あなた、どうですか」と晴れやかに言った。「それでは、おまえは、スミヨなのか」とセンセイは訊ねる。その問いには答えず、髭の男と女はすすずと行ってしまった。	「酔っ払いは存外帰巢本能が発達しているものです」（センセイ）
45	216～	干潟	44の続き	ツキコ・センセイ	センセイの奥さまの名前はスミヨさんというらしい。センセイはこの場所のことを「境」と呼んだ。センセイはスミヨさんが出奔するいきさつを語る。センセイはこの境に今のツキコと同じとしごろから来るようになったという。	「いつごろから、ここに来るようになったんですか」（ツキコ） 「今のツキコさんと同じとしごろからですかね。なんだかね、来なくなるんですよ、ここは」（センセイ）
46	221～	（非明示）	（非明示）	ツキコ	このところひきつづき、センセイと会っていない。あの場所に行ってからツキコはセンセイを避けるようになっていた。長く会わないでいれば、センセイへの感情も立ち枯れさせることが出来るかもしれない。	なし
47	224～	道	46の続き	ツキコ	ひとりで映画を見に行ってみたり、旅行してみたりもしたが、どうも楽しくなかった。今までは一人で楽しく生きてきたはずなのに、どうしたことか。今までどんなふう生きてきたのか、ツキコは分からなくなった。	なし

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
48	228～	バー	(非明示)	ツキコ・小島	小島と久しぶりに会った。バーで飲んだ後、他人行儀な握手をして、他人行儀なキスをした。夏も終わるなあ、そう言い合って、また他人行儀な握手をして別れた。	「なんだかうわのそらだね」 (小島)
49	230～	飲み屋	十時過ぎ	ツキコ・サトルさん	二ヶ月ぶりにサトルさんの店に行った。サトルさんによると、センセイが先週に風邪をひいてから一度も来ていないらしい。「だいじょうぶかね」サトルさんはそう言ってツキコの顔をちらりと見た。ツキコは何も答えずに黙っていた。	「センセイがさ、風邪ひいたって言ってたけど、だいじょうぶかね」 (サトルさん) 「え」 (ツキコ)
50	233～	センセイの家	49の続き	ツキコ・センセイ	十分以上もセンセイの家の前をうろうろした挙句、戸を叩いた。出てきたセンセイは無精髭が伸びていた。死んでいるとでもお思いでしたか、と言って笑うセンセイと一緒に笑ったが、死ぬなんて言葉を使わないでください、センセイ。ツキコはそう言いたかった。いつだって、死は私たちのまわりに付きまどっている。お茶を飲み終わると、ツキコはいとまを告げた。	「風邪はひいておりましたが、ワタクシはいたって元気ですよ」 (センセイ)
51	237～	帰り道	50の続き	ツキコ	もう、どうでもいいや。恋情とかなんとか。どっちでもいいや。帰り道、センセイに何かを望むのはやめよう、そう思いながら歩いた。	なし
52	239～	ツキコの家	(非明示)	ツキコ・センセイ	センセイに、デートに誘われた。センセイの電話越しの声が、いつもより甘く響いた。あの。はい。ええと。ツキコはそんな音ばかり発していた。電話が切れると、わたしはべったりと床に座りこんだ。	「ツキコさん、デートをいたしましょう」 (センセイ)
53	241～	美術館	土曜日	ツキコ・センセイ	いくらツキコが近づこうと思っても、センセイは近づかせてくれない。以前からセンセイはそんな空気があった。待ち合わせにセンセイが現れ、美術館に向かった。様々な展示を眺めながら、ツキコはセンセイとこうして一緒にいることが嬉しかった。	「ツキコさんだって、いい男を見たら、たとえその人と言葉が通じなくても『ああなんていい男』と思うでしょう。字だって同じことですよ」
54	244～	公園	53の続き	ツキコ・センセイ	いつもはセンセイが先に立つか、ツキコがさっさと行ってしまうか、どちらかだったが、センセイはツキコの腕をとったまま歩いた。美術館のある公園でセンセイは、ワタクシはいったいあと、どのくらい生きられるのでしょうか、と言った。「ずっと、ずっとです」思わずツキコは叫んでいた。ごめんなさいね、と言いながらセンセイはツキコを抱きしめる。そして、ツキコはセンセイに告白を受ける。ツキコはセンセイの胸の中で、ほんの少し泣いた。	「センセイ、センセイが今すぐ死んじゃっても、わたし、いいんです。我慢します」 (ツキコ) 「ワタクシと、恋愛を前提としたおつきあいをして、いただけますでしょうか」 (センセイ)
55	255～	飲み屋	(非明示)	ツキコ・センセイ・サトルさん	サトルさんの店で、センセイが来るのを待っている。センセイは携帯を持つのを嫌っていたが、ツキコの説得で持つことになった。センセイを携帯でサトルさんの店に呼び出した。	「携帯電話じたいには特に文句ありません。人さまの前で独り言を大声で言っているように見える、あの様子だって、興味深いものです」「しかしそれだからといって、ワタクシが携帯電話を使うのを良しとするかといえば、それは難しいところです」 (センセイ)
56	261～	センセイの家	(非明示)	ツキコ・センセイ	ツキコはセンセイとまだ体をかさねていないことを案じていた。センセイも長らく経験がないため自信がないのだという。近いうちにこころみてみましょう、そう言いたかったが、センセイの厳肅さに気圧されて、言えなかった。	「でも、できるかどうか、ワタクシには自信がない。自身がないときにおこなってみて、もしできなければ、ワタクシはますます自信を失うことでしょう。それが恐ろしくて、こころみることもできない」 (センセイ)
57	263～	ディズニーランド	(非明示)	ツキコ・センセイ	二人はいろいろなところでデートをした。二人はいつだって真面目だった。ディズニーランドの夜のパレードを見ながら、二人で泣いた。たぶん、べつべつのことを思いながら、泣いた。センセイとツキコは闇の中で手を繋いだ。	「センセイ、どこにも行かないでくださいね」 (ツキコ) 「どこにも行きませんよ」 (センセイ)
58	266～	センセイの家	(非明示)	ツキコ・センセイ	一度だけ、センセイが携帯電話をかけてくれたときの話だ。今からいらっしゃいというセンセイ。センセイは門のところでツキコを迎えた。何も言わずに布団に向かい、倒れこんだ。ツキコははじめてセンセイに抱かれた。朝、鳥の鳴き声がセンセイの庭に響きわたった。ツキコさんはいい子ですね。センセイが言った。センセイ、好き。ツキコは答えた。	「ツキコさん、今からいらっしゃい」 (センセイ) 「センセイのおうちへですか」 (ツキコ)

○センセイの鞆／川上弘美

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
59	268～	(非明示)	(非明示)	ツキコ・センセイの息子	センセイと再会してから二年、「正式なおつきあい」をしてから三年の月日をセンセイと過ごした。センセイが亡くなった後、息子さんからセンセイの鞆をもらった。息子さんから聞いたセンセイの本名に、自分が知らないセンセイの影を見た気がしてツキコは泣いてしまった。今でも鞆は鏡台の前に置いてある。センセイ、と呼びかけると、ときおり、ツキコさん、と返ってることがある。センセイ、またいつか会いましょう。ツキコが言うと、センセイもいつかきっと会いましょう、と答える。	「父春綱が生前にお世話になったそうで」 (センセイの息子)

○ナラタージュ／島本理生

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	5~	新居 川べりの道	春の夜	泉・「彼」	もうじき結婚する「彼」と新居を見に行った。川べりの道を歩きながら、泉は思い出す。一緒に歩いた風景や空気を、すれ違う男性に似た面影を探している。彼のことを過去だと意識することで現実から切り離している。	「君は今でも俺と一緒にいるときに、あの人のことを思い出しているのか」「きっと君は、この先、誰と一緒にいてもその人のことを思い出すだろう。だったら、君といるのが自分でもいいと思ったんだ」（「彼」）
2	8~	駅前のファミリーレストラン	大学一年	泉・泉の母	父のベルリン支社への転勤の話が出た。両親は春にはドイツへと旅立ってしまう。泉は一人で住むためのアパートを借りた。ときどき高校の演劇部に顔を出していたが、後輩の方が上手いからといって最近顔を出していない。顧問の葉山先生とも連絡はほとんどとっていない。	「あんたは一時期あの先生の話ばかりしてたわね。正直、毎日のように聞かされて飽きてたけど、話してるときの泉が楽しそうだったから黙って聞いてたのよ。もう連絡を取ったりはしてないの？」（泉の母）
3	11~	泉のアパート	ゴールデンウィークの少し前	泉・葉山先生	葉山先生から、演劇部に顔を出して、今度の舞台の手伝いをしてほしいと連絡があった。泉は一年前には四六時中ずっと胸の中を浸していた甘い気持ちがよくみえりそうになったが、すぐに感傷だと思い直し、次の土曜日に行くという約束をして電話を切った。	「うん。だから君さえ良かったら、週一回ぐらい、時間のあるときに様子を見に来てくれないかな。……と遠慮がちに言いたいところだけど、本当は練習に参加してほしいんだ。夏休み明けの始業式の後、吹奏楽部と合同で小体育館を使わせてもらえることになったから、そのときに発表する芝居を作りたいんだ」（葉山先生）
4	15~	高校	（回想） 高校三年生	泉・葉山先生	葉山先生は泉が高校三年生のときに、世界史の教師として赴任してきた。通りすがりに会釈しただけだったが、泉はそのことを憶えていた。	なし
5	17~	高校	約束の土曜日	泉・葉山先生・黒川・柚子・伊織	高校に向かうと葉山先生がいた。懐かしく思えてじっと見つめていると、それよりもさらにじっと見られたため、先に照れてこちらが目を逸らしてしまった。軽いミーティングを済ませてから解散となった。部長だった黒川は全然変わっていなかった。彼女の志緒とはまだ続いているという。	「うるさいな。葉山先生に頼まれたから来ただけだよ」（泉） 「やっぱり。おまえは本当にあの先生に弱いなあ」（黒川）
6	25~	泉のアパート	深夜	泉	台本を読み返しているうちに眠ってしまったらしい。母に手紙を書いてから手帳に挟む。そこには、ずいぶん前に葉山先生に宛てた手紙も挟んであった。卒業式の日、この手紙を持って告白するつもりだった。葉山先生には恋人がいますか。葉山先生はその質問にいつまでも黙っていた。そして、僕は誰よりも君を信用している、と静かに告げた。だから本当のことを言う。その代わりにこのことは誰にも言わないでほしい、と。	なし
7	28~	高校	ゴールデンウィーク明けの土曜日	泉・葉山先生・黒川・小野君・志緒・新堂・柚子・伊織	前回欠席していた部員と志緒、そして黒川が連れてきた同じ大学の助っ人の小野君も加えて仮の配役を決めた。一通り練習した後、解散となった。泉は帰る前に葉山先生に声を掛けられた。もし時間があるなら、少し話していかないかと言って葉山先生は静かに笑った。	「工藤、ちょっと渡すものがあるから帰りに社会科準備室に寄ってくれないか」（葉山先生）
8	41~	社会科準備室	7の続き	泉・葉山先生	社会科準備室で葉山先生と思い出話をする。葉山先生は卒業前に借りたビデオを返したかったらしい。教室を出て階段を下りるところで別れを告げると、葉山先生は「君とまたこんなふうに校内で会って話せるとは思っていなかった」と言った。葉山先生はそれ以上はなにも言わずに職員室へ戻っていった。	「君、前によく付けていた香水を今もまだ使ってるんだね」（葉山先生） 「ああ、はい。一度、違うものに変えたんですけど、やっぱりなんとなく落ち着かなくて。最初に使ってたニナリッチのものに」（泉）
9	45~	小野君のアパート	8の続き	泉・黒川・志緒・小野君	校門の外では三人が待っていてくれた。小野君のアパートに近いということで四人でアパートに向かう。アパートで飲んでみると、小野君はCDをかけた。前の彼女との思い出の曲だという。それをきっかけに恋愛観の話になる。ちょうど酒を切らして買いに行っていた黒川が戻ってきて、小野君と泉が似ていると言った。	「小野と工藤ってなんとなく後ろ姿の雰囲気似てるな。今日会ったばかりの他人なのに、どことなく兄妹みたいだと思って」（黒川） 「うん、私もじつは同じことを思ってた」（志緒）
10	56~	高校	（非明示）	泉・葉山先生・黒川・志緒・小野君	配役が決まり、読み合わせの稽古に入った。小野君の台詞を覚える速さは尋常ではなかった。休憩中、泉は小野君に黒川たちと長野の実家に遊びに来ないかと誘われる。	「こうやって文字を目で追うのと、台詞の言い回しを考えると、両方同時に集中することができなくて。最初に覚えちゃったほうが楽なんだよ」（小野君） 「それじゃあ、俺たちは金曜日の夜七時に新宿駅に集合ということで」（小野君）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
11	62～	バス	金曜日	泉・黒川・志緒・小野君	大学の授業が終わると、待ち合わせの新宿駅に向かう。バスの車内は混み合っていた。泉は小野君と互いのMDを交換して聴いた。以前小野君のアパートに行った際に聴いた『タイム・アフター・タイム』が流れ始めたので、タイトルの意味を小野君に聞いてみる。「何度も何度も」という意味だという。まるで今の私みたいだ。泉は心地よい振動に揺られて眠りに落ちていった。	「俺、レディオヘッドはあんまり聴いたことがないんだ。ちょっと貸してもらってもいいかな」（小野君） 「いいよ。代わりに小野君のMDを貸してくれると嬉しいな。正直、自分のは聴きすぎて飽きちゃったものが多いから」（泉）
12	66～	小野君の実家	11の続き	泉・黒川・志緒・小野君	夜、小野君の実家に到着した。小野君のお父さんもお母さんも歓迎してくれた。用意してくれた二階の部屋で、黒川が留学してしまうことは淋しくないかと志緒に尋ねる。淋しいが、そんなこと言っても何にもならないと、ハンドクリームを手に塗って、先に布団にもぐりこんだ。	「泉と気が合う男って、だいたい私とは合わないのよね」（志緒） 「そういう、まだ実際に起こっていないことに対する心配なんていうものは、しょせん、すべて妄想なのよ。自分の中で勝手にあれこれ妄想を膨らませて不安になるなんて馬鹿馬鹿しい。唯一、心配なことがあるとしたら、クロちゃんの英語がちゃんと現地で通じるのかっていう」（志緒）
13	70～	小野君の実家	次の日	泉・黒川・志緒・小野君	次の日、みんなで練習を行った。発声がきれいな小野君は出来の悪い生徒である泉に付きっきりで指導を行った。休憩中、小野君が先輩の彼女にしつこく言い寄られたのが原因で劇団を辞めたらしいという話を志緒から聞かされる。小野君はそれで責任を感じて辞めてしまったのだと苦笑いしながら答えた。泉は小野君が真面目な人だと心の中で思っていた。	「付き合ってる相手がいる女の人にそんなことしたりしないよ。俺はたとえ好きな人ができても、その人がほかの相手と付き合っていたら、無理に壊してまで押し入ろうとは思えないから。もっともそのときは、先輩の彼女のことを好きでもなんでもなかったんだけど。ただ、それでも彼女があれほど行動に出たっていうことは、俺も無意識のうちに期待させるような言動をしていたんじゃないかって今では思うよ」（小野君）
14	75～	小野君の実家	13の続き	泉・黒川・志緒・小野君	午後からは家の周辺を散策し、遅くまでビールを飲みながら過ごした。真夜中に目が覚めてトイレに立つと、小野君と顔を合わせた。小野君は土蔵の中に行ってみないかと泉を誘う。土蔵の中には柩があった。そこには小野君が子供の時に亡くなった祖母の残した着物が入っていた。小野君は祖母の思い出話をする。そして、縁があってこうして泉と演劇をする機会が生まれたわけだから、公演までお互いががんばろうと、涼しい顔で小野君は笑った。泉も笑顔で頷いた。	「不思議だよな。もしも黒川に呼ばれなかったら今ここで二人で庭を見てることもなかったんだね」（小野君）
15	82～	高校	六月	泉・葉山先生・黒川・小野君・志緒・新堂・柚子・伊織	次第に全員の足並みがそろってくると、同時に細かい欠点も目立つようになってきた。葉山先生は小野君の癖が多い癖を指摘した。その日、珍しく小野君は先に一人で帰ってしまった。志緒は小野君と葉山先生の相性が悪い気がするという。 翌日は母から電話がかかってきた。泉が火事で崩れた廃墟の中にいる夢を見たという。泉は母が疲れているのかもしれないと心配になった。	「だって小野君ってあんまり自分の感情をすぐに外に出さずにいつも一步引いてるけど、本当はすごく自分に自信があるっていうか、プライドが高そうじゃない。逆に葉山先生って、小野君が意識して引いているような部分にあまりこだわらない感じがするから。二人とも他人に気を遣うタイプだけど、その気の遣い方がまったく違うっていう印象があるのよね。だから葉山先生のほうはなんとも思っていないくても、小野君は葉山先生を苦手だと思っているかも」（志緒）
16	88～	高校	次の土曜日	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	次の土曜日も雨が降っていた。泉は朝から下腹部が痛くなってしまった。なんとか痛みが和らいだので高校に向かうと、柚子ちゃんが珍しく練習を休んでいた。泉の体調が悪いことに葉山先生はいち早く気づき、柚子ちゃんのお見舞いに行くという新堂君と一緒に車で泉の家まで送ってくれた。	「そんなのは体を見ていればすぐに分かるよ。それにしても君は変わっていないな、前にも風邪をひいているのに大丈夫なふりをして、練習の後でいきなり吐いたじゃないか」（葉山先生）
17	99～	大学	翌週	泉・葉山先生・新堂・柚子	翌週、葉山先生から食事の誘いを受ける。ちょっと話したいことがあるというが、それ以上は教えてくれなかった。新堂君と柚子ちゃんが大学に見学をしにくるので、その後に待ち合わせることにする。大学にやってきた新堂君と柚子ちゃんだったが、柚子ちゃんは少し痩せたように見えた。	「私、最近、いろんなことを同時に上手く考えることができななんです。目の前のことだけで精一杯なのに、その上、先のこととなると頭の中が混乱して。工藤先輩は、時々、なにもかもが嫌になって、何もしたくなくなることはないですか」（柚子ちゃん）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
18	105～	店内	17の続き	泉・葉山先生	葉山先生と待ち合わせた。はじめは新堂君や柚子ちゃんの話をしていたが、泉が本題は何かと切り出すと、葉山先生は今年度いっぱい違う高校に移るかもしれないということだった。静かな店内で、泉は葉山先生にこれから恋人を作っていないのかと問うた。 高校の卒業式、誰もいない教室で泉は突然葉山先生にキスをされた。呆然とする泉は、なぜか不安がこみ上げてきた。「ごめん」とすぐ謝った葉山先生の言葉がすべてを物語っている気がした。それが葉山先生と最後に顔を合わせた時のことだった。 店からの帰り道、なにか言ってくださいという泉の言葉に、葉山先生は黙ったまま首を横に振っただけだった。	「あのことがあってから、長い間、幸福な意味で感情が動かされることがなくなってしまったんだ。自分でも問題だと思っているけれど、どうしようもないんだよ」（葉山先生）
19	111～	高校	次の練習の日	泉・小野・葉山先生・志緒・新堂	次の練習の日、どんな顔をして葉山先生に会えばいいのかと教室の前で躊躇していると、小野君がやってきた。そのまま教室に入ると、いつもと様子が違った。柚子ちゃんがおとといの夜から家出をしていて、それっきり行方不明だという。稽古にならないからといって、その日は解散となった。	「はい。ただ黒川先輩がさっき、今日はもう稽古にならないからこのまま解散したほうがいいんじゃないかって言っていたので。それならちょっと寄りたいところがあるんです」（新堂）
20	113～	ダイニングバー	19の続き	泉・志緒・小野・黒川	帰り道、黒川の提案でダイニングバーに寄った。柚子ちゃん心配だったが、小野君の言葉で少しだけ気持ちが軽くなった。アルコールが回ってきた頭で、少し葉山先生のことが心配になった。	「だけど、まあ、たぶん心配ないよ。俺も家出は中学生くらいの頃にしたことあるし。突発的に誰にも会いたくないときだってあるから。俺たちが知らないだけで、学校外に友達がいることだってあるだろう。そういう子のところに行ってるんじゃないかな」（小野）
21	116～	車	20の続き	泉・葉山先生	深夜一時、公衆電話から電話があった。相手はやはり葉山先生で、声が掠れていた。電話を切ろうとする葉山先生に、今どこにいるのかと訊いた。 公園脇に停めてあった先生の車に乗り込む。葉山先生は話し相手が欲しい様子だった。葉山先生を一人にする と落ち込んでしまうと、泉は葉山先生に付いて行こうとするが、葉山先生はそれを拒んだ。	「自信がないんだ。僕はきっと君に頼ってしまう。どうしてかは分からない、だけどとにかく君には、ほかの相手よりも正確に僕の言葉が伝わっているという実感がある。そういうのは危険なんだ。今、一緒にいたら、僕は君になにをするかわからない」（葉山先生）
22	122～	レストラン	二週間後	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	三日後に柚子ちゃんが戻ってきたと連絡があり、彼女はあまりにいつもの笑顔で謝りながら復歸したのでなんだか拍子抜けしてしまった。帰り道、小野君に芝居を見に行かないかと誘いを受けた。そのことを、志緒と昼ご飯を食べながら何気なく話すと、志緒は小野君が泉のことを好きなのではないかと言った。なぜ小野君が自分のことを好きになったのかよく理解できない泉だったが、自分が小野君の好意に気付かなかったのは、泉もまた他の誰かを見ていたからだとは志緒に気付かれなかったようで泉はほっとした。	「だから無理に好きになる必要はないけれど、もしも泉が彼のことを好意的に思っているんだったら、ちょっと考えてみてもいいんじゃない。第一、長野から帰ってきた頃から、いつも小野君は泉のことを見てたのよ。私にとってはむしろ泉がまったくそれに気が付かなかったことのほうが驚きなんだけど」（志緒）
23	127～	小さな劇場 小野君のアパート	金曜日の夕方	泉・小野・志緒	小野君と芝居を見に行った。お茶代は出すからという小野君に、まだ付き合っているわけでもないので泉は申し訳ない気持ちになり、自分で払った。小野君のアパートで、泉は後ろから突然抱きしめられた。「俺さ、工藤さんのこと好きだよ」泉は「ごめんなさい」そう言ってアパートを後にした。雨が降っていたが雨曝しのまま歩いた。	「小野君って」「付き合っている人はいるの？」（泉） 「春に会ってから今日初めて工藤さんにその質問をされたなあ、と思って」（小野君）
24	136～	志緒のアパート	23の続き	泉・志緒・黒川	びしょ濡れで志緒のアパートに上げてもらったので、そこにいた黒川もぎょっとしたように眉を寄せた。黒川は気を遣って先に帰ってくれた。志緒にアパートでの出来事を話すと、志緒はやっぱり上手いかなかったかと呟いた。志緒は泉が葉山先生に思いを寄せていることも以前から見抜いていた。そして黒川はそのことには気づいていないとも言った。雨はまだ止みそうになかった。	「馬鹿じゃないの。それぐらい見ていればすぐに分かったわよ。ただ泉があんまりそのことについて喋りたくなさそうだったから突っ込まなかったの。て、なんで私が自分でこんなことまで言わなくちゃならないのよ」（志緒）

○ナラタージュ／島本理生

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
25	139～	川沿いの道	(回想) 卒業式間近	泉・葉山先生	先生に告白しようとした日、葉山先生は自身の過去を泉に語った。母子家庭だった先生は、母親が一人になってしまうことを心配し、結婚の話も出ていた恋人と同居することにした。初めは恋人と母親はうまくいっていたが、だんだん衝突するようになり、先生はどちらの立場に立てばいいか分からなくなってしまった。そして、恋人は精神的に追い詰められ、母のまだいる家に放火をしようとした現場を現行犯で逮捕された。母親もいまだにその時のショックが残っている。先生はその時から自分を責め続けている。	「私ではあなたの力にはなれませんか」(泉) 「君はまだ若くて、大切に愛してくれる家族もいるだろう。仮に僕が君の両親だったら、絶対にそんな男とは付き合うなど言うだろうし、それが娘の幸せのためだと信じて疑わないと思うよ。普段は意識しなくても、人間はじつは自分が思っている以上に多くのものに守られているし、その状況を切り離してしまうことがいかに困難か、君もいずれ分かるときが来るよ」(葉山先生)
26	145～	泉のアパート	翌日	泉・葉山先生	翌日、軽く熱が出てしまった。葉山先生から電話がかかってきた。小野君のことを先生に訊いてみたが、今日もいつも通り上手い演技をしているという。泉は恋人や結婚について、赤の他人にそこまで寄り添うことができるのだろうかという質問を先生にした。先生は、君はまだ本当に誰かを愛したことがないからだ、厭味もなく静かに答えた。	「あなただけには、そんなことを言われたくないです」(泉) 「たしかに今の僕みたいに、最初から恋愛自体を拒絶している人間がそんなことを言うのはおかしいかも知れないけれど」(葉山先生)
27	149～	高校	翌週	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	翌週、教室に行くと小野君はすでに来ていた。小野君はいつも通り接してくれた。伊織君はなぜか短い毛を金髪に染めてきていた。 夕暮れどきに外で大きな音が鳴った。花火大会があるらしい。みんなで屋上で花火を見上げた。高校生最後の夏っていう気がするという新堂君の言葉に、泉と志緒は顔を見合わせた。自分たちは本当はこの場所にいないはずの人間だということに気付いた。	「良かった。先々週、工藤さんがいないときには大変だったんだ。葉山先生が代わりに台詞を言ってくれたんだけど、あの先生の女言葉は正直ものすごくおかしくて。全員が爆笑しちゃったせいで稽古にならなかったよ」(小野君)
28	154～	デパート	平日	泉・黒川	黒川は志緒の誕生日プレゼントを優柔不断気味に選んでいた。泉は黒川の買い物に付き合っていた。黒川は志緒が本当は強くないからと、留学してから志緒のことを様子を見てやって、と泉にお願いした。黒川と志緒が離れ離れになることに泉は実感が湧いていなかった。	「強いことを言いたがるのは、本当はそんなに強くないからだって、ようやく気付いた。それに、今はもう結婚して出て行ってるけど、あいつには年齢の離れたお兄さんがいて、ずっと大事に可愛がられてたしさ。そういう環境に慣れてるから、本当はもっと年上で包容力のあるタイプのほうがあいつにはいいのかも知れない」(黒川)
29	158～	学校	練習後	泉・小野君・伊織・新堂・葉山先生	練習後に、泉は伊織君と新堂君にドイツ旅行のお土産を期待される。小野君には本を渡された。小野君は泉が葉山先生のことが好きだということに気づいていた。準備室で葉山先生にお土産は何がいいかと聞きに行った。いらないといっても君は気を遣って買ってきてくれるだろうから、という言葉に泉は唐突に大声で泣いてしまいたい衝動に駆られた。 旅立ちの朝、泉は高鳴る鼓動を抱きながら、ひとり出国時間を待った。	「葉山先生はもうずっと前から私の気持ちを知っていて、それには応えられない、とも言われているから」(泉) 「お互いに不毛なんだな」(小野君)
30	163～	ドイツ	夕暮れ	泉・母	ドイツに着くと母親が迎えてくれた。アパートは煉瓦造りでいかにもドイツという雰囲気がした。レストランでは仕事で遅くなるという父がいないということで、いくつかの愚痴をこぼしていたが、とても楽しそうだった。帰ってから風呂に入ると、簡易ベットで泉はそのまま眠ってしまった。	「だけど楽しそうにやってるみたいで良かった。そういえばあんたの手紙って、部活のことになるとあいかわらずあの先生の名前が多いわね。この前、数えてみたら五枚の中に九回も登場してたわよ。あんたの一人称よりも多いんじゃないかって思っちゃった」(母)
31	168～	ドイツ	翌朝	泉・父・母	朝もやの中を頼まれたパンを買いに繰り出す。時差ボケは大丈夫かと、父は心配してくれた。 街を歩きながら泉は母に、こっちに来て楽しいかと尋ねる。母は淋しい時もあるが、それはどこにいても一緒だと言い、辛く思っている様子はなかったので泉は安心した。 夜、ホームパーティーに呼ばれたという両親を送り出し、屋上で煙草をふかした。時間が経つのはあっという間だな、と泉は思った。葉山先生に触れた一瞬、一瞬が思い起こされて息が詰まりそうになった。	「そんなことを言ったら近くに知り合いがいても、そばに夫がいても、淋しいときはあるの。逆に人間がいるからこそ淋しいことだってあるでしょう。そんなのはどこに行ったって同じだし、それなら一番好きな男の人のそばがいいわよ。そりゃあ、まだ自分一人ではろくに言葉も通じなくて、ストレスも閉塞感もあるわよ。息が詰まって突発的に日本へ帰りたくなるわよ。だけどそんな感覚はどこにいたってあるし、特別なことでもなんでもなくて当たり前なのよ」(母)
32	175～	ドイツ	帰る前日	泉・父・母	帰る前日にお土産を選ぶことにした。葉山先生のお土産だけはなかなか決まらない。途中で見つけた薄暗い文房具屋でようやく葉山先生のお土産を買った。帰ったら、葉山先生ともう一度、話をしてみよう、そう決めた。 帰る日、仕事の父を送り出して母は空港まで見送りに来てくれた。またいつでもおいで、と言って母は手を振った。泉も手を振りかえして別れた。	「本当は泉のほうがなにか話したかったことがあったんじゃないなかったの」(母) 「相談したら気が済んじゃうから。私も一人でじっくり考えてみる」(泉)

○ナラタージュ／島本理生

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
33	179～	高校	土曜日の昼	泉・志緒	帰国してから稽古に向かうと、教室には誰もいなかった。志緒に電話をすると、今日は人が集まらないから中止になったという。葉山先生も体調が悪くて来られなかったという。泉は葉山先生の体調不良は嘘だと思い、葉山先生のマンションに向かう。インターホンを鳴らしても誰も出なかった。居留守をしているのかもと思ったが、泉は先生を探すことにする。	「昨日、クロちゃんのところに連絡があって、葉山先生が体調が悪くて来れなくなったの。それに新堂君も休みだし、小野君もできれば行きたいところがあるって言うから、今日の練習はやめることになったんだけど」「ごめん、メール送ったんだけど届いてなかった？」（志緒）
34	182～	ターミナル	次の日	泉・葉山先生	葉山先生と死に近いイメージが泉にはあった。だから彼が突然死んでしまっても驚かないだろう。泉は彼の行きそうな場所を探した。博物館の芳名帳に先生の名前があったが、日付が昨日のもので落胆した。日が暮れて高校に戻ってみても見つからず、十一時を過ぎて再び駅のほうへ戻ると、最終バスの終わったターミナルで葉山先生がひとりベンチに腰掛けていた。葉山先生は彼女の実家から連絡を受けて、義父に会いに行っていた。時が流れていたことに気付いた先生は、彼女に会いたいと思ってしまった。でもどうすればいいか分からずにいた。	「私になにかできることはありますか。なんでもします」（泉） 「僕と一緒に死んでくれと言ったら」（葉山先生） 「一緒に死にます」（泉）
35	189～	葉山先生のマンション	34の続き	泉・葉山先生	先生のアパートに戻った。先生の様子はどこか変だった。先生の伸びた髪を泉が切ることにする。風呂場で先生の前髪を切る。泉は気が付くと先生に唇を重ねていた。曖昧な関係でいたくないという言葉を先生は聞こえないふりをした。 風呂場から出て、先生の寝室に初めて入った。部屋に貼られた数枚の写真に写った明るく笑う女性が誰なのかは泉にはすぐに察しがついた。寝室全体も女性の趣味で選んだようなものが多くあった。泉は先生を問い詰めた。反論してほしい泉だったが、代わりに先生はまだ奥さんと別れていないという告白をした。泉は訳が分からなくなり、ただ呆然としていた。	「籍はまだ抜いていない。別れることもやり直すこともできないまま、僕は今ここにいるんだ」（葉山先生） 「私は葉山先生のことが好きで、どうしてもなく好きだったから、少しでも力になりたかった。 嘘をつかれているなんて微塵も思わずに、それどころかあなたの苦しみを少しでも共有しているとさえ思っていた。馬鹿みたいじゃないですか。なにも知らずに、分かっているつもりでいたなんて。どうして今さらそんなことを私に教えてしまったんですか。そんな大切なことを隠されていたのに、どうやってこれからあなたの言葉を信じればいいのか分からない」（泉）
36	202～	葉山先生のマンション	翌日	泉・葉山先生	翌日、十二時くらいに目が覚めた。葉山先生と言葉少なに朝食を摂った。演劇の台本は葉山先生が選んだもので、家で一人だった奥さんが心を病んで、ついに夫を他人だと思い込んでしまうようになるというストーリーだった。葉山先生は純粋にこの話がおもしろいと感じたから選んだと言ったが、その顔は淋しそうだった。葉山先生は話題を変えるように、どこかへ出かけようかと言った。	「起きてたんですか」（泉） 「うん。目だけ閉じて、うとうとした」（葉山先生）
37	206～	駅のホーム	（回想） 高校三年生	泉・葉山先生	死んでしまおうと思った。毎日次の朝を迎えるのがうっとおしくておそろしくて、ついに死んでしまえばいいのだというたしかな意志が湧いてきた。駅のホームでこのまま飛び込んでしまおうと思ったとき、葉山先生が階段から下りてきた。あいさつもそこそこに葉山先生は泉に以前貸していたビデオの完全版が見つかったからとそれを貸してくれた。今ここで飛び込んでしまおうかと思ったが、先生の穏やかな表情を見て思いとどまってしまった。車内で他愛ない話をしながら、泉は先生のこと好きなのだ気付いた。その日から、もし先生が泉と同じように何もかも投げ出したくなったら嫌がらせになっても引き留めようと決めている。	「先週、貸したビデオなんだけど、完全版のほうを見つけたから、そちらも貸すよ」（葉山先生）
38	209～	山手線	36の続き	泉・葉山先生	山手線で美術館に向かう。先生は呟くように「隠していて本当にごめん」と言った。駅を出てデパートでアイスを買った。食べ終わると口の中や胃の辺りがひんやりしていた。	「君は、どうしてもっと僕を責めない」（葉山先生） 「いまさるなにが言えるのですか」（泉）
39	214～	地下鉄	38の続き	泉・葉山先生	美術館を出て、地下鉄に乗って帰る。泉は先生に本当に最初の頃に戻りたいと切り出した。もうこうして会うのも最後にする。先生も同じことを考えていたという。地下鉄を降りて先生と別れた後、後悔が頂点に達してホームに戻ったが、先生の姿はなかった。泉はひさしぶりに人前で泣いた。 どうやって帰ったのかは覚えていない。気が付くと家にいた。タオルケットを被ってベッドに入る。急に穴蔵に入ったような安心感に満たされた。	「昨夜のことだけじゃなくて、今までに言われたことをすべてひっくるめてずっと考えていた。もうあなたを追うのはやめようって。本当に最初の頃に戻りたいって」（泉） 「最初っていうと、僕が君にいろんなことを話す前ということか」（葉山先生）

○ナラタージュ／島本理生

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
40	219～	葉山先生のマンション	39の続き (夢)	泉・葉山先生	目が覚めると、葉山先生のベッドだった。葉山先生が優しい顔で泉を手招きする。毛布の中で手が触れたので、軽く握ると、強く握り返してきた。なんだ、と泉は拍子抜けした。泉は嬉しくなった。生身の人間がそこにいるという実感があった。	「私たち、これからも一緒にいられるんですか」 (泉) 「もちろん、そうだよ」 (葉山先生)
41	220～	泉のアパート	40の続き	泉・葉山先生	目が覚めると、そこは自分の部屋だった。ようやく状況を理解し、絶望する。不安、緊張の鎮静がこの薬の効能です、そう書かれた薬を二箱分少しずつ飲み込んだ。次第に胃が焼けるような熱さになってきた。吐きたいのにうまく吐けない。携帯電話が鳴ったので、ふらふらしながらベッドまでたどり着くと、葉山先生からだった。もうやめて、と体が言っていたが、それでも電話に出る。君があればから帰ったのか心配で、と言いかけた先生の声を遮って、もうやめて、頼むから放っておいて、と何度も叫んだ。朦朧とする意識の中電話を切り、泉は気を失った。	なし
42	221～	病院	41の続き	泉	気が付くと、床に倒れていた。口がおそろしく乾き、体の痺れがはっきりしてくる。涙が流れてきた。ゼロに戻ろう、泉はそう思いながら明け方によく眠りについていた。 翌日、病院で点滴を打ってもらった。ひとりで診察室の廊下で座っていると、昨日まで一緒にいたのに、今はこんなにも遠い、と思った。病院を出て、ぼっかりと空いた体の底が清々しいくらい淋しくて途方に暮れる。二人ならなんとかできるのではないかと思っていた、だけど本当は違っていた。馬鹿馬鹿しくて笑うと、やはり涙が溢れた。それでも泉はゆっくりと歩き出した。	なし
43	223～	高校	次の練習日	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	次の練習日、葉山先生はいつもと同じ表情でやってきた。練習が終わると泉のほうを見ることなく職員室に戻っていった。泉はもう自分は全く関係なくなってしまったと、淋しさに打ちのめされた。	「この前は本当にごめんね」 (志緒)
44	224～	高校	八月後半	泉・小野君	小野君は泉が葉山先生と何かあったことを察していた。小野君はストレス発散にと泉をバッティングセンターに誘った。	「工藤さんは顔に出るからすぐに分かるよ。台詞を噛んだときとかも、表面的には平然を装うんだけど、内心ではものすごくあせっているだろう。その空気って観客にもものすごく伝わりやすいから気をつけたほうがいいよ」 (小野君)
45	226～	バッティングセンター	44の続き	泉・小野君	バッティングセンターで、泉の旅行の話や、小野君自身の話をする。小野君はかなり自分のことを素直に話してくれる。もうすぐ九月になる。芝居の稽古が終わったら泉と会えなくなるのはつまらないという小野君。駅まで送ってくれた彼に真顔でバイバイ、と言われたとき、泉はふいに胸が鳴った。	「最初に会ったときは、感じがいい割にあまり隙がないように見えたから少し意外だったんだ」 (泉) 「あんまり悪いところを見せたくないから、最初は表面的にそういう態度を取っちゃうのかも知れない。かっこつけてるだけだって言われたらそれまでだけど。逆にいったん体勢が崩れると、歯止めが利かなくなるところがあるから」 (小野君)
46	232～	高校	本番の朝	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	高校に着くと、校内放送で葉山先生が劇の案内を行っていた。みんなで舞台の衣装などの用意をする。小野君は髪を切ったようだ。珍しく志緒が誉めたので、小野君はすっかり機嫌がよかった。演劇部の前に行われる吹奏楽の演奏が聞こえてきた。もうすぐ本番だ。	「工藤さんはそういうスーツが似合うね。雰囲気落ち着いてるからかな」 (小野君) 「ありがとう。小野君の髪型も似合うよ」 (泉)
47	235～	高校	46の続き	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	泉は舞台に立つときの胃が痛くなるほどの緊張感がなぜか癖になっていた。出番が近くなった泉に、葉山先生はがんばれ、という風に口を動かした。がんばります、という口の形が正確に伝わったかは分からないが、泉は舞台に飛び出した。	なし
48	236～	高校	47の続き	泉・葉山先生・黒川・小野・志緒・新堂・柚子・伊織	舞台が終わり片づけをしていると、葉山先生が一人一人に感想を伝えまわっていた。葉山先生とした握手は別れの挨拶の象徴なのかも知れない。泉はトイレで鳴咽した。体育館に戻ると小野君が泉の荷物を持って待っていた。小野君と電車に乗った帰り、降りる駅が近づいてきたところで、小野君にこれから長野に行きませんかと誘われた。小野君は真剣な表情で、泉の返事を待っていた。	「忙しい大学生活の合間にありがとう。楽しかったよ。新堂たちにも、卒業前に充実した部の活動をさせてあげることができて良かった」 (葉山先生)

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
49	239～	バス	48の続き	泉・小野君	小野君と長野行きのバスに乗る。小野君は正直泉がついてくるとは思っていなかったようだ。泉もどうしてついて行くことにしたのか分からなかったが、一人きりの部屋に帰りたくなかったことは事実で、小野君に甘えている自分はずるいのかも知れないと思った。	「本当はまた一緒にどこかへ出掛ける約束をする程度で良かったんだ。だけど一生に一度ぐらい思い切ってみるものだね」（小野君）
50	240～	小野君の実家	49の続き	泉・小野君	二度目の長野に到着した、小野君の両親には泉と付き合っているという嘘をついたらしい。その方がいろいろ聞かれずに済むだろうという小野君の配慮だった。夕食をいただいた後、小野君が煙草を吸いに泉の部屋にやってきた。虫の声を聞きながら、小野君の恋愛の話になる。小野君は多くの女性と付き合って、別れてきたという。本当は一人と長く付き合いたいとこぼす。	「だけど、そういうバランスの悪いときに付き合うと、よけいにお互いの過不足を確認するだけだって分かったから、もうしないよ」「工藤さんは今、バランスの悪い時期？」（小野君） 「バランスは、たしかに悪いかも知れない」（泉）
51	247～	温泉	翌日	泉・小野君	小野君と山にあるという温泉に向かう。線路を歩いてみたいという泉。歩きづらくない？と言って小野君が泉の手を取る。泉はふいに鼓動が高鳴った。温泉の脱衣所は賑わっていた。ひさしぶりにゆっくりしている気がした。温泉から上がってそう言うと、小野君もいますごく幸せだと言った。その嬉しそうな様子に泉はどきとした。帰り際、駅のホームで電車を待っているとき、「小野君と付き合ったら幸せだろうな」と無意識に口にしてしまった。泉もどうしてそんなことを言ったのか分からなかった。	「小野君と付き合ったら幸せだろうな」（泉） 「それ、本気で言ってるの」「いや、いいんだ。ごめんな、答えなくていい」（小野君）
52	253～	小野君の実家	夕方	泉・小野君	夕方、小野君の友人が遊びにやって来た。泉は馴染めずに黙ってビールを飲んでいた。気がつくと、小野君が一人で片づけをしていた。もし高校時代に小野君と出会っていたら、そんな話をしながら泉はまた意識が遠ざかっていった。目が覚めると、寝ぐせがついて子供のような小野君が横で眠っていた。その寝顔を見ていると、突然小野君が起き上がり、「俺、やっぱり工藤さんのこと、好きだよ」と言った。それだけ、と呟くと小野君はまたクッションの上に倒れこんだ。朝、小野君にバス停まで送ってもらった。小野君は泉に付き合ってくださいと言った。泉はいいよ、と答え、小野君と付き合うことにした。	「一度は断られてるから、これが最後です。あなたが俺のことを嫌いじゃなくて、だけど特別に好きでもないことは分かってる。それでもかまわないし、前に好きだった相手を忘れてなくてもいいんだ。一緒に過ごして楽しかったから。苦しくても、都合の良いことだけ覚えていてみせる。だから俺と付き合ってほしいんだよ」（小野君） 「分かった」「私、小野君と付き合う」（泉）
53	262～	志緒のバイト先	長野から帰ってきて	泉・小野君・志緒	志緒のバイト先に向かい、小野君と付き合うことになったと報告する。志緒ははじめ露骨に戸惑った目をしたが、強引に押し切られたり、情が移ったわけではなく、泉が納得の上だと聞くと、安心したようだった。その夜、小野君に電話をした。電話を切ってから小野君の下の名前を小言で呼んでみたが、知らない人の名前を呼んでいるような感覚がした。	「じゃあ俺のこと、名前で呼んでくれたら切る」「なんでもない。おやすみ。明日また電話する」（小野君）
54	266～	公園	黒川の旅立ちの日	泉・小野君・志緒・黒川	黒川が留学に旅立っていった。志緒に夜中の公園に呼び出された。志緒は放心しているように宙を眺めていたが、やがて話しているうちにいつもの彼女の表情に戻っていた。	「時間を惜しんでしがみついていると、よけいなことを考えて疲れたり空しくなるだけだし」（志緒）
55	268～	電車	土曜日の午後	泉・小野君	小野君から会いたいと電話がかかってきた。待ち合わせに向かうと小野君は額にガーゼを貼っていた。実験中に額を怪我したという。 小野君が「彼女」という言葉を使ったとき、泉は小野君と付き合っているのだと実感した。	「大学の友達がやっぱり彼女と出かけて良かった場所があるから、行ってみようか」（小野君）
56	271～	観覧車	55の続き	泉・小野君	観覧車の順番を待ちながら、大人とは何かという話をする。小野君は最後には誰かに寄り掛かることなく自分で何とかすることが大事だという考えを持っているようだ。観覧車に乗り込むと、小野君は外を見ようとしない泉を気に掛ける。言い出せなかったが、泉は高いところが苦手だった。大丈夫ですか、と小野君に抱きしめられた。泉は頬が冗談みたいに熱くなるのを感じた。	「どうして先に言わないの？それなら観覧車なんて一番アウトだっただろう」（小野君） 「高い場所が好きだって言われたから、切り出せなくて」（泉）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
57	276～	公園	56の続き	泉・小野君	夜空の下、公園のベンチでホットドッグを食べた。泉は小野君に自分のどこが好きなのかを訊ねる。小野君はむせた後、言葉にするのは難しいと言いながら、泉の好きなところを正直に答える。泉は何でも真剣に答えてくれるところが小野君の良いところで、好きだよと言った。肌寒くなってきたので、帰ろうかとベンチから立ち上がった。	「だろう。俺だって同じだよ。言葉にするのは難しいよ。ただ、俺がなにかするとすごく嬉しそうな顔をしてくれるとか、一緒にいると落ち着くとか、そういうところははっきり意識して好きだけど。あとはそうだな、正直に言えば、最初に会ったときから声が好きだった」（小野君）
58	279～	デパート 泉のアパート	十月	泉・小野君	十月二十六日が小野君の誕生日なので、プレゼントを買いに出かけた。迷った末に、落ち着いた銀色のジッポライターをあげることにした。それを買った夜、小野君に電話をかけた。少し遅れて電話に出た小野君は、家に友達が来ているところだという。今度の金曜日に泉も泊まりに来ないかとさらっとした口調で言うので泉は少し戸惑ったが、分かったと返事をした。電話のあとでコンビニに行く用事を思い出し、外に出て、公園を通りかかった。なんとなく立ち寄り、泉はふと一週間ほど前のことを思い出した。	「それなら俺、一緒に作りたいものがあるんだけど」「餃子。もう出来ているものを買ってくるんじゃないくて具から作って、自分たちで包むところもやりたい」（小野君）
59	282～	有楽町	（回想） 一週間前	泉・小野君	小野君と有楽町で映画を見る約束をしていたが、雨がひどく地下道を通して他の映画館へ向かった。その際に泉の靴が壊れてしまった。靴の修理屋で直してもらうことにする。小野君は泉と自分の「好き」の温度差を感じていた。強張ったその表情は、泉が何を言っても信じないだろうと思わせるものがあった。悔しさと途方に暮れた気持ちで目頭が熱くなった。小野君は泉にキスをした。路上でこんなことしたのは初めてだ、と呟く小野君に、路上じゃなかったらあるんだな、と当たり前のことを泉はぼんやり考えた。それからすぐに修理が終わり、新宿で違う映画を見てお茶を飲んだ後に別れた。	「その言い方だと、まるで私が大して小野君のことを好きじゃないみたいだよ」（泉） 「そんなことは言わないよ。だけど、どちらの気持ちのほうが強いかも、俺は分かてるつもりだよ」（小野君）
60	287～	小野君のアパート	金曜日	泉・小野君	大学帰りにそのまま小野君の家に行くと、小野君はCDを整理しているところだった。いらないものは売ってしまうという。CDを手にとろうとして小野君の左腕に軽く触れただけで、泉は妙に動揺して体を引いてしまった。	「こういう聴きこんだCDって、数少ない、小野君の隙を感じる部分だね」「いつもよりも身近に感じるっていうことかな」（泉）
61	289～	小野君のアパート	60の続き	泉・小野君	小野君はなにをさせても器用で、泉よりもきれいに餃子を包むので泉は少し複雑な心境になる。食べ終わった後、二人でテレビを見た。しばらくして、小野君に抱き寄せられた。しばらくは軽く口づけしていたが、小野君の吐息が激しくなってくる。「いいの」と確認する小野君に泉は小さく頷いた。小野君は明かりを消し、部屋の中が沈黙と暗闇に包まれた。	「小野君はどれくらいの割合で美容院へ行っているの」（泉） 「二ヵ月に一度くらいかな。髪が伸びるのが早いから、けっこうまめに行くよ」（小野君）
62	291～	小野君のアパート	61の続き	泉・小野君	体が離れてから小野君はベッドを降りた。泉は眠気が忍び寄ってきた。泉は最中に、小野君がほかの女の子とそういうことをするときを想像していた。小野君は想像する必要はないよ、と言った。泉は古い映画のほうが詳しい。小野君と映画のことを話しながら、二人違う夢の中に落ちていった。	「小野君はけっこう不安が強いんだね。もっといつでも安定しているんだと思っていた」（泉） 「がっかりした？」（小野君） 「あなたが思っているよりも、きっと、私はあなたのことが好き」（泉）
63	296～	小野君のアパート	夜中	泉・葉山先生・ 小野君	小野君と二人で眠っていたとき、携帯電話が鳴っていることに気づいた。画面を見て、泉は一瞬、息が止まりそうになった。部屋の外に出て応答する。葉山先生は泉の声が耳から離れなかったから連絡をしたという。泉は小野君と付き合っていることを伝える。葉山先生は、泉が幸せになって本当に良かった、もうかけないようにすると行って電話を切った。泉はしばらく気持ちが落ち着かなかったが、小野君の寝顔を見て反省し、もう気にするのはやめようと自分に言い聞かせた。	「夏に別れた後で電話をしたときに聞いた君の声が耳から離れなかった。もうやめてくれ、放っておいてっとう泣いている君の声がずっと頭の中に残っていて、眠っていても夢で何度もあのときの声を聞いた。だけど小野君と一緒にいると聞いて、安心したよ。君が幸せになって本当に良かった」（葉山先生）
64	299～	小野君の大学	文化祭の日	泉・小野君	小野君の大学の文化祭に遊びに行った。小野君の以前の彼女が小野君を「玲二」と呼び、出店に誘ったが、小野君は一瞥しただけで歩き出した。未だに名前と呼ばれることが嫌だという小野君に、泉は嫉妬する気持ちよりも意外さのほうが先立っていた。	「そっか。たしかに別れたら戻してほしいかもしれないね」（泉） 「他人事みたいに言うから、反応に困って（小野君）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
65	301～	小野君のアパート	64の続き	泉・小野君	夕方になり小野君のアパートに戻った。小野君はこの前の夜中の電話の相手は誰かと訊いた。あの時小野君が眠っていると思い込んでいた泉は驚いた。小野君は着信履歴を確認すると、露骨に寒々しい態度になった。小野君は泉が葉山先生と隠れて連絡を取っていたのかと勘繰る。語調が強くなってしまい「黙れよ」と口走ってしまった小野君は、今度は不安げで気弱な声で謝り、この話はやめようと言った。	「いきなりあの先生からそんなふうに連絡があって、動揺したのかって訊いているんだよ。どうして俺に教えてくれなかったの」（小野君） 「隠してたわけじゃないよ。よけいな心配はかけないほうがいいかもと思って」（泉）
66	305～	小野君のアパート	65の続き	泉・小野君	先ほどの小野君の強い怒りを思い出し恐怖を感じたが、顔を洗い流して落ち着き、いつも通り夕飯の支度を始めた。眠る前、小野君が抱きついてきた。そういう気分とはいい難かったが、さらに彼を傷つける気がして身を任せていた。小野君のその行為は、愛情とは果てしなく遠い距離にある乱暴なもので、泉は信じられず呆然としていた。やめてくれるように小野君に言ったが、彼は聞こえないふりをした。結局、小野君は途中で体を離し、今日はちょっとおかしいと謝った。泉が分かっていたことは、小野君は泉をまったく許していないということだった。小野君は正直、葉山先生がいなくなってしまうといいと思ってしまったことを打ち明ける。泉も小野君に問い詰められたとい、葉山先生の事情を隠す気持ちが先行したことに戸惑っていた。	「さっき、一瞬、いなくなればよかったんだよ」 「あの先生が泉の前からいなくなってくれればいいって、そう思ったんだ。そうすれば俺自身も平穏でいられるし、苛立ったりせずに優しくしていただける。それでも俺になにも悪い部分がないって言えるの」（小野君）
67	309～	小野君のアパート	66の続き	泉・小野君	目覚めると小野君が台所に立っていた。いつもの通りの小野君に、泉は昨夜のことが夢か幻だったような気がした。俺のこと嫌いになったかと思ったという小野君に、そんなに簡単に嫌いになったりしないと答える。小野君が出かけている間に映画を借りて見たが、それほど趣味に合うものではなかった。ところが、突然涙が零れたことに驚き、この部屋からすぐに飛び出して帰りたくなった。しかし、自分の帰りたがっている場所はもうどこにもないことは分かっていた。泉は帰ってきた小野君に夕食を作り、レポートがあるからそろそろ帰ると告げ、雨の中ゆっくりと歩き出した。	「急にいなくなったりしないよな」（小野君） 「うん」（泉）
68	313～	デパート	（非明示）	泉・志緒	小野君と別れたらどうか、と志緒に心配された。泉の態度が誤解を招きやすいこともあるが、小野君の反応もどうかと思うと志緒は言う。いきなり別れるということには抵抗があるが、志緒の言うことはもっともで、反論もできない。時々喧嘩をしながらも志緒は黒川を信頼しているようで、泉はそんな相手がいることが羨ましかった。志緒は、葉山先生と泉は付き合っていたわけでもないのに親密な感じがあったと言った。	「私と葉山先生はそういうふうに見えていたんだって。自分の思い込みだけじゃなくて」（泉） 「知らなかったの？あんとと葉山先生、一時期だけど、噂にまでなっていたのよ。私だって何度かクラスの子に訊かれたし。もしも本当に二人になにかあるなら、ウカツに気付かれるような態度は取らないだろうと思ってたけど」（志緒）
69	317～	小野君のアパート	十二月	泉・小野君	短期のバイトを増やそうと派遣会社に登録した。小野君のアパートでバイトの苦労話をする。小野君は泉が気弱そうなところがあるからつけ込まれるんだろうなと言ったが、自分ではそういう風に思っていなかったので違和感を感じた。入浴を終えると小野君が体を寄せてきたが、疲れているから眠らせてほしいと言った。しかし小野君が求めてくるので、投げ出すような気持ちで力を抜いた。脳が感覚的な部分を閉ざしてしまったようになにも感じなくなった。小野君の顔を見て目を閉じると、突然、泉が高校に通っていた頃の葉山先生の顔が浮かび上がってきた。小野君はどうしたの、と訊いたが、泉は次から次に溢れてくる記憶に涙が止まらなくなった。	「泉はちょっとぼうっとして気が弱そうなところがあるからなあ。だから、つけ込まれるんだろうな」（泉）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
70	321～	帰り道	十時	泉・小野君	夜、スーパーマーケットでの買い物を終え、裏のほうの細い道を歩いていると、柴犬を連れた男性とすれ違った。彼は突き当りを右に曲がり、泉は左に曲がった。しばらくしてふと足音に後ろを振り返ると先ほどの男性がなぜか泉の後ろを歩いていた。泉はぞっとして公衆電話を見つけて、小野君に電話をした。小野君は素っ気ない様子だったが、事情を説明すると驚いたように、うちに来た方がいいと言ってくれた。小野君は少しの沈黙の後、もし迎えにいったらもっと自分のことを好きになってくれるかと問うた。泉は一瞬何を言われているのか分からず、このごろの小野君は変だということ、今度は小野君が小野君という呼び方を未だに続けている泉に不満を漏らす。困ったときにだけ俺を頼るなよ。泉はちゃんと小野君のことを好きだ、と言いかけたが、それを遮るように、「だったら目の届く場所に、あんなものを置いておくなよ」と小野君が言った。泉は察しがついたと同時に強いめまいがした。葉山先生への手紙が入った手帳を小野君は勝手に見ていたのだ。気がつくと泉は電話を切っていた。どこで間違えてしまったのだろう。ここまで彼を追い詰めた私が悪いのだろうか。	「やっぱりそんなに前のものを肌身離さず持ってるなんて、未練がある証拠だろう」（小野君） 「だから無理やりセックスするの？」（泉）
71	326～	葉山先生のマンション	70の続き	泉・葉山先生・小野君	自転車の駐車場でうずくまっていた。「君、一体どうして」泉の真上に、怪訝そうに目を細めた葉山先生が現れた。来たらいけないことは分かっているが、泉はここにやってきてしまった。泉は顔を見るなり泣き出した。葉山先生に事情を説明すると、僕に言ってくればいつでも飛んでいくのに、と言ったが、泉には今さらそんなことを言う理由が分からなかった。小野君と付き合っていると言ったときにも平然としていた葉山先生が。「平気なわけないだろうっ」葉山先生は強い語調で反論する。僕は君の求めるものをなに一つ与えることができない。その言葉に泉は頭にかっと血がのぼった。一気に葉山先生に思いをぶちまけた後、送っていくという葉山先生を遮り、自転車だけを借りて暗闇のなかを漕ぎだした。途中で高校のそばの川に出て、手紙と、葉山先生と泉と一緒に写った唯一の写真を破って川に投げた。葉山先生のことを本当は責められないことは分かっていた。泉も小野君に同じことをしていた。翌日、小野君からの謝りの電話で、手紙は捨てたと報告すると、そこまでしなくても良かったのに、と少し嬉しそうな気配を滲ませて言った。	「あなたはいつもそうやって自分が関われば相手が傷つくとか幸せにできないとか、そんなことばかり言って、結局、自分が一番可愛いだけじゃないですか。なにかを得るためにはなにかを切り捨てなきゃいけない、そんなの当然で、あなただけじゃない、みんなそうやって苦しんだり悩んだりしてるのに。それなのに変わることを怖がって、離れていてもあなたのことを想っている人間に気付きもしない。どれだけ一人で生きてるつもりなの？あなたはまだ奥さんを愛しているんでしょう。私を苦しめているものがあるとしたら、それはあなたがいつまで経っても同じ場所から出ようとしらないことです」（泉）
72	333～	病院	真夜中	泉・葉山先生・小野君・新堂・伊織	真夜中の電話で飛び起きた。今夜に限って携帯電話を鳴らないようにし忘れていたことがなにか嫌なタイミングだったのだろうと後になってから気付いた。葉山先生の声을聞いて、以前の恐怖を思い出して危うく電話を切りそうになったが、その隙さえ与えない素早さで用件を告げた。柚子ちゃんが歩道橋から飛び降りた。小野君と指定された病院に向かう。葉山先生と生徒たちは既に到着していた。志緒とは連絡がつかなかったらしい。電話では言えなかったんだ、柚子ちゃんの容態について、葉山先生は今にも泣きだしそうな顔でそう言った。	「それじゃあ、（集中治療室の）中には入れないんですね」（泉） 「入れるよ。というよりも、名前を呼びかけたり話しかけたりするために、呼んだんだ。今のところ僕たちにできることはそれぐらいしかないから」（葉山先生）
73	336～	病院	72の続き	泉・葉山先生・小野君・新堂・伊織	色のない、思いの外細かい傷しかついておりますきれいな顔をしている柚子ちゃんの様子を見ていると、泉はとても堪えられなかった。彼女の手を取ると涙が止まらなくなった。新堂君は柚子ちゃんからおとといに手紙をもらっていて、柚子ちゃんの抱えている事情をぜんぶしっていたと、激しく乱れた口調で言った。生徒たちを送っていくという葉山先生と別れて帰ることにする。ふいに気にかかって一度だけ振り返った葉山先生の表情は身震いがするほど淋しげな表情をしていた。小野君とタクシーに乗り込んだ泉はもうたった一つの考えに取り付かれていた。	「落ちた瞬間を見た人はいないんだよ。ちょうど赤信号のときで、車が止まっていたから撥ねられることもなくすぐに病院に運ばれた。だけど落ち方が悪くて、頭から首の後ろまでを強く打っている」（葉山先生） 「柚子が来たんです。おとといぐらいに俺のところに来たんです。それで、何も言わずに手紙を置いていったんです、俺はぜんぶ知ってたんです」（新堂君）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
74	340～	雑木林	73の続き	泉・小野君	タクシーを降りていつもの雑木林に差し掛かったとき、泉は足をとめて「ごめんなさい」と言った。身勝手なことを言っているのは分かっていたが、泉は葉山先生のところに戻ると小野君に告げた。小野君はじゃあどうして俺と付き合ったんだと迫った。本当に悪いと思ってるなら、今すぐこの場に手をついて謝れよ、という小野君の言葉に、言われた通り泉は地面にしゃがみこんで手をついた。もう行けばいいよ、小野君の言葉におそるおそる立ち上がると、小野君は今度は懇願するようにお願いだから行くなよ、と縋りついた。小野君と一緒に気持ちで、私は葉山先生を見てる、そういうと小野君は力なく手を離れた。泉は駆けだした。そして携帯電話で葉山先生に電話をかけた。	「あの先生が今のおまえになにをしてくれたんだよ。たしかに過去には世話になったのかも知れないし、俺がそのときに戻ってあの先生の代わりをすることはできないよ。だけどこの数ヵ月間一緒に過ごして来たのは俺だろう。一生懸命だったんだ、俺だって。そこまで好かれていないところからスタートして、ここまできてやっと良い関係を築いていたと思ってたんだよ。それがどうして今になって、また振り出しに戻るんだよ。今までの時間は泉にとってそんなに意味のない時間だったんだ」（小野君） 「意味がなかったわけじゃないんだよ。だけどあの人は本当にほかに誰もいなくて、私が小野君と付き合っているから言わないだけで、私を呼んでる。それが分かるから、ごめんなさい。本当にごめんなさい」（泉）
75	344～	病院	74の続き	泉・葉山先生	葉山先生は病院の駐車場の隅で、車を駐めて待っていた。傷だらけの様子に葉山先生は驚いたようだ。小野君はどうしたのか尋ねる先生に、別れたいと言った、と泉は告げた。葉山先生が呼んでる気がしたから。先生は息を吐き、本当は君にそばにいてほしかった、と言った。柚子ちゃんを救うことが出来なかった不甲斐なさに、葉山先生は黙ったまま泣いた。泉はただ、ずっとその手を握っていた。	「あんなに頭も良くて能力があった、なにより生きることを楽しんでいた塚本がどうしてこんなことになるのか。僕は悔しいんだ、なにかほかに方法があったはずなんだ。それを見つけて与えることができなかった」（葉山先生）
76	347～	（手紙／柚子ちゃんから新堂君へ）	（柚子ちゃんが亡くなる前）	柚子ちゃん	柚子ちゃんの手紙には、夜家に入ろうと鍵を取り出したところを男に襲われ、乱暴されたこと、そしてそれを友達はもちろん親にも言えず、ずっと抱え込んでいたこと、自分が壊れてしまったように感じることに、そして来週くらいから心療内科に通うことが書かれていた。手紙の最後には、最後まで読んでくれて本当にありがとう 塚本柚子と記されていた。	なし
77	353～	病院 喫茶店	三日後	泉・葉山先生	事故のあと、三日後に柚子ちゃんは亡くなった。泉は病院のすぐ前の喫茶店で、新堂君を送っていった葉山先生を待った。戻ってきた葉山先生と、性犯罪者は強制的に去勢して、死刑にしていまえばいい、なんて言い合ったが、やがて葉山先生は打ち切るように首を振った。どんなことをしても、柚子ちゃんは帰ってこない。	「以前、本でこんな拷問の話を読んだことがあります。手足をつないで一切の食事を与えず、極限状態になったところで腐り切った鼠の肉を、拘束された人の口元に近づけるんです。そんな肉は当然、食事なんて呼べない代物だけど、それでも飢えて死にそうな人は必至でその鼠の肉を食べようとするんです。死ぬまでそれをくり返すんです。読んだときにはひどい話だと思って気分が悪くなったけど、今、あれをやればいいのに。目には目と云うけれど、なにも悪くないのにひどい目にあった人間と加害者が同じ苦しみで、どうして救われることができるんでしょう」（泉）
78	357～	小野君のアパート	75の翌日	泉・小野君	小野君のもとを飛び出した翌朝、話がしたいと電話で小野君に告げた。彼の部屋に向かうと、泉の荷物を袋にまとめてくれていた。一瞬でも、俺のことを、あの先生より好きだった時があったのかという問いには、泉は答えられなかった。小野君はため息をつくように笑って、今まで本当にありがとう、と言った。ドアを開けてゆっくりと歩き出した。振り返ると、彼は手を振っていたが、泉が手を振り返すと、小野君は途方に暮れたようにその手をだらんと下げ、本当に楽しかったっ、と叫んだ。泉は大きく手を振ってからふたたび歩き出した。彼との日々を思い出して泣きそうになったが、ここで泣くのは自分の役目ではないと堪えた。いろんな場所に出掛けたし、一緒に食事をしたり抱き合って眠った、つねに小野君よりも葉山先生のほうが好きだったなんて、本当はそんなわけがない。だけと言えなかった。	「最初に泉にふられたときは、こんなに晴天じゃなくて、たしか雨が降ってた」「今日が雨じゃなくて良かった。同じ天気の日にはふられたら、これからずっと雨が降るたびにづらい気分になっただろうから」（小野君）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
79	361～	見知らぬ団地	77の続き	泉・葉山先生	見知らぬ団地の前で、ちょっと降りようと言われて不思議に思っていると、敷地の中に大きな樹木が立っており、クリスマスのライトアップが行われていた。この前に泉が夜中に葉山先生のもとにやって来た時、奥さんのところに言っていたと葉山先生は告げる。奥さんとやり直すんですか、という泉の問いに葉山先生は短く、でもはっきりと頷いた。泉は良かったなあ、と思う自分が不思議だった。悲しくないと言えは嘘になるのに、それでも心の底から良かったと思った。	「最初はただ様子がおかしいから心配していた程度だった。だけど色々と相談を受けるようになって、頼りにされることで自分が気力を取り戻していくのを感じた。昼休みになると準備室に君がやって来る。それがいつの間にか楽しみになっていた。この気持ちはなんだろう、と何度も考えてみたよ。そのときには結論は出せなかった。 今から思えば、おそらく恋とは少し違っていたんだ。だけど、同等に、あるいはそれ以上に深く君を必要としていた。卒業式の日のことは、これでもう明日から君が校内にいないのかと思ったら、どうすればいいのか分からなくなって、ものすごくあせったんだ」 （葉山先生）
80	366～	葬儀場	柚子ちゃんのお通夜	泉・新堂君・志緒・葉山先生	柚子ちゃんのお通夜には大勢の参列者がやって来た。新堂君の方を見て、二人が付き合っていたとかいないとかいう声が聞こえてきたが無視をした。声を掛けられて顔を上げると、三浦先生が立っていた。彼は志緒と泉が嫌いな先生だった。三浦先生の言葉に悔しさで頭がぼうっとしてきた。他人のせいにはばかりしているから工藤は進歩がないんだよ、そう言われて不覚にも涙が止まらなくなってしまった。そこに志緒が葉山先生を連れて戻ってきてくれた。葉山先生は泉をかばってくれた。帰り道、志緒と歩いていると今度こそ悲しくて泣けてきた。隣の志緒も無防備に泣いていた。	「工藤、おまえ、今は大学でどうだか知らないけど、あんまり甘えた考え方をしていると社会に出てから困るぞ。協調性のなさはある程度、本人の責任でもあるんだ。俺を責めるのは筋違いだろう。それよりもどうして自分がそういう目に遭ったのか、自覚を持って考えるべきじゃないのか」 （三浦先生）
81	375～	大学のそばのカフェ	春の新歓コンパの時期	泉・新堂君	新堂君は泉と同じ大学の法学部に合格した。新堂君と昼ごはんを食べながら、柚子ちゃんの話になる。新堂君は柚子ちゃんがいなくなってから煙草を少し吸うようになったようだ。新堂君は柚子ちゃんのことを好きだったわけではないが、それでもあの時に柚子ちゃんを救えるのは自分だけだったと振り返る。手紙をもらった後もどうすればいいか分からず、メールを送ったら返事がなかったもので、明日でいいやと思ってしまったことをずっと悔いている。彼は大学を中退し、伊織君が彼のお母さんに居場所を尋ねても教えてくれないという。	「手紙をもらった後もどうすればいいのか分からず、あいつの携帯電話にメールを送ったら返事がなくて、その時点で俺は動くべきだったのにひとまず明日でいいやって思った。 俺は今でも毎晩のように考えるんです。あのときなんとかできたのは世界にたった一人しかなくて、それが俺だったってことを。工藤先輩」 （新堂君）
82	378～	病院	柚子ちゃんのお葬式から一週間後	泉・葉山先生	葉山先生から電話がかかってきた。慌てて電話に出てから事情を聞いてさらに驚いた。病院に到着した泉に、葉山先生はベッドに横たわったまま弱々しい笑顔を見せた。先生は大腸炎にかかってしまっていた。先生は頼れる人間が泉以外に思いつかなかったと呟いた。これからは毎日来ます、と言うと、先生は無防備な笑顔を見せた。泉は、その顔を見て、この人にただ与えるだけ、それで満足なのだと痛烈に実感する。	「君が来てくれて安心した」 （葉山先生） 「いくらでも安心してください。これからは毎日来ます」 （泉）
83	384～	病院	（非明示）	泉・葉山先生	穏やかな日々だった。泉は大学の帰りに病院に寄り、先生の隣で本を読んだり授業のレポートをやったりした。一度葉山先生が彼の母親に電話をかけているところを見かけた。葉山先生は妻を選んだので、母親とは距離を置いておいた方がいいと、悲しそうな目をして言った。	「母にかけてた。こちらに来たほうがいいかって訊かれたから、大丈夫だって言って断った」 （葉山先生）
84	386～	病院	入院から一週間後	泉・葉山先生	退院の日が近づいてきた夜、葉山先生は来年の春には違う高校に移ることに決めたと泉に告げる。一瞬、ものすごいショックに襲われたが、すぐに納得するような気持ちに包み込まれた。お礼がしたい、なんでもすると言う葉山先生に、先生の部屋に泊めてもらえたら、と言ったがすぐに嘘だと取り消した。葉山先生はベッドから乗り出して泉を抱きしめる。僕は君が好きだ。絞り出すような声に、私も好きです、どうしようもないほど、あなたが好きです、そう泉は答えた。	「本当は、ずっと君のそばにいてあげたかった」 （葉山先生） 「それが聞けただけでも十分です」 （泉）

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
85	389～	葉山先生のマンション	退院した午後	泉・葉山先生	ボストンバッグを片手に、葉山先生の家二人に戻った。まだ考えあぐねている先生の様子に、やっぱり帰りましょうかと言うと、葉山先生は泉にキスをした。そして、泉の服を一枚ずつ脱がせていく。そして、先生と体を重ねる。泉は欲望の強さで愛情すら霞んでいくような、もう彼のことを愛していないのではないかという感覚に襲われ怖くなる。やがて沈黙が訪れた。葉山先生は泣き出しそうな顔で、僕が君にあげられるものは、これしかなかったのかと言う。泉は叫んだ。あなたはひどい人だと。二度と私の前に姿を見せないで、どこか遠く離れた場所で幸せになって、あなたのことなんかどうでもいいと思わせて、と。葉山先生は分かった、と言った。	「約束する。僕は君のまったく知らない場所で幸せになる。だから君も約束してくれ。僕が去った後も無事であることを。塚本のように一人で苦しんだまま、いきなりこの世からいなくなることだけは絶対にしないでくれ。そのために僕のことを嫌っても軽蔑してもかまわない、だから、約束してほしいんだ」（葉山先生）
86	396～	葉山先生のマンション	85の続き	泉・葉山先生	夕暮れが訪れるまで、ベッドの中で起きたり眠ったりを繰り返していた。今度こそ私はどこへでも行ける。でも、泉は少しも嬉しくなかった。葉山先生はデリバリーのピザを頼み、一緒に食べた。葉山先生の肩に寄り掛かり、映画を見る。どこへも行きたくなかった。しかし、映画もあと一時間程度で終わってしまう。	「明日、目が覚めたらすぐに帰ります。長居するとつらくなるから」「このまま眠りに連れ去られてしまいたい。どこへも行きたくありません」（泉）
87	398～	葉山先生のマンション 駅のホーム	翌日	泉・葉山先生	夜明けの光で目覚めた。葉山先生は懐中時計を泉に差し出した。先生にとって思い出の品だったが、もう必要ないから泉にもらってほしいという。泉もドイツのお土産で買った、深緑色の万年筆を渡した。朝食を済ませて、家を出る。電車を待つ間、葉山先生の横顔に今までどの表情よりも魅力を感じた。電車がやってくると、泉は軽く会釈をした。先生はじっと黙り込んでいた。色々とうございました、と呟いたが返事はなかった。そして、そのまま電車のドアは閉まった。隣の駅に着いた時、抑え切れない淋しさが込み上げてきて、さっきの駅まで戻った。反対側のホームにまだ葉山先生は立っていた。泉に気付くと驚いたように顔を上げた先生。手を大きく振ると、彼も真顔で手を振り返してきた。やがて、葉山先生は階段に向かって歩き始めた。視界を遮るように快速電車が一気に滑り込んできて、彼の姿は完全に消えた。泉が葉山先生に会った、本当に最後のときだった。	「もらえません。大切なものでしょう」（泉） 「いいんだ。きっとこれから、僕は変わっていく。君のおかげだ。だからもう、これは必要ないから君にあげたいんだ」（葉山先生）
88	403～	会社	大学を卒業した後	泉・「彼」	大学を卒業して希望していた会社に就職することができた。志緒とは次第に連絡を取らなくなってしまったが、黒川と別れたという話は聞かないので今でも二人は仲良くしているのだろう。葉山先生からもらった懐中時計は今でも肌身離さず持ち歩いている。残業中、その時計を眺めていると、少し年上の男性が話しかけてきた。泉は彼のことを気持ちのいい人だなあ、と心の中で思った。やがて二人で出かけるようになり、彼と結婚することに決めた。	「愛していたとか、そんなに大袈裟なものじゃないです。最初に会ったときなんか高校生だったし、まだ子供だったからよけいに、この人しかいないっていう思い込みが強かったんですよ」（泉） 「そうかな。年齢に関係なく愛したりはすると思うけど。工藤さん、きっとそれ、子供だったから愛とは違うとかじゃなくて、子供だったから、愛してるってことに気付かなかったんだよ」（「彼」）
89	408～	レストラン	映画の試写会のあと	泉・同僚・カメラマン・カメラマンの連れの男性	映画の試写会のあと、同僚からの紹介で四人で食事に行った。カメラマンが泉の高校で教員をしていた友人がいるという話が出たが、それは葉山先生のことだった。彼が二年ほど前に奥さんを連れた葉山先生と会ったとき、奥さんに内緒だと言って、卒業式の日葉山先生と女の子で撮った写真を見せてもらったという。それは、泉が卒業式の日葉山先生と撮った写真だった。彼はそこで話を切った。泉が涙をながしていたからだ。泉は途方もない幸福感にも似た熱い衝動に揺さぶられながら、落ちる涙を拭うこともできずに空中を見つめていた。	「彼はあなたのことが好きだったみたいです。いや、写真なんか持ち歩かれてあなたにしてみたら気持ち悪いなんて思うかも知れないけど。だいぶ前のことだし、もともと子供みたいに純粋なところがある男だから、許してやってください。おそろくもう顔を合わせる機会もないだろうしね。だけどこんなところでご本人にお会いするなんて、妙な縁が」（カメラマン）

○僕は何度でも、きみに初めての恋をする。／沖田円

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
1	10～	(非明示)	(非明示) 事後 (prologue)	セイ	きみに出会った日のことは、はっきりと覚えている。きっと、わたしの世界は、きみと出会ってはしまった。	なし
2	12～	公園	秋 五時ごろ	セイ・ハナ	いつも通りの学校。帰り道を変えてみたのは気まぐれだ。空を見上げるのが癖だった。頭とか胸に抱えたごちゃごちゃしたものを全部捨ててしまえるから。そのため、カシャ、という音に気づくのが遅れた。真っ黒なカメラを掲げる男の子がセイをカメラで撮っている。綺麗な人だな、と思った。彼は自己紹介をした。「ねえ、僕はハナ」「ねえ、きみは？」	「はじめまして、こんにちは」 （ハナ）
3	16～	公園	2の続き	セイ・ハナ	セイは戸惑いながらも自分の名を告げる。憶えておけたらいいな、というハナの言葉に不信感を募らせる。ハナはセイの隣に腰かける。ハナの人懐こい雰囲気、セイは離れるタイミングを逃してしまった。写真を撮るのはハナの趣味だという。その言動や雰囲気から、セイはなんだか変な人だな、と思った。	「はじめまして、こんにちは」 （ハナ） 「写真を撮ることよりも、撮りたいと思うものを見つけるのが楽しい。それから、ずっと後になっても、それを残しておけることも」 （ハナ）
4	21～	公園	3の続き	セイ・ハナ	ハナに突然手を引かれて、セイは小高い丘のようなところに連れていかれた。そこから見えたのは、夕焼けに照らされた街の風景だった。とても綺麗だった。セイは抱えている思いをつい初対面のハナにぶつける。ハナはそんなセイをフレームに収めて、セイのことを綺麗だ、と言って笑う。セイは思わず目を逸らした。 辺りが暗くなってきた。「……帰る」とセイはハナに言う。「ねえ、明日も会えるかな」というハナの言葉に、「さあ」とだけ返した。ハナはやっぱり嬉しそうに笑っていた。	「なんにも綺麗じゃないよ。世界は綺麗だなんて、誰が言ったか知らないけどさ、そんなの、それこそただの綺麗事じゃんか。憶えておきたいくらいなのが、こんな場所のどこにあるわけ？わたしには見えないよ。忘れてしまいたいものだらけ。だっていつだって、どこでだって、こんな世界、汚れたものしかないんだから」 （セイ） 「苦しいことがちょっと多いのかな。そういう顔してた。でも、そういう思いばかり駆け巡ってるからってさ、セイちゃんに綺麗な世界が見えないからってさ。セイちゃん自身が綺麗じゃないとは限らないんじゃない？」 （ハナ）
5	34～	セイの家	4の続き	セイ・セイの母	家に帰り、「ただいま」と母に笑顔を作って浮かべる。家に帰るのが嫌になってから、自然な笑顔の見せ方がわからなくなった。いつからか両親とぎくしゃくし始めてしまった。夕食も食わず部屋にこもる。『きみは綺麗だよ』というハナの言葉が頭の中に響いて、心の奥が苦しくなった。	「ごはんあるけど、食べる？」 （セイの母） 「ううん、いらない。ごめんね。もうシャワー浴びて寝るから」 （セイ）
6	36～	学校	次の日	セイ・三浦さん	雨が強さを増す。『ねえ、明日も会えるかな』と言っていたハナもこの天気じゃないだろう。教室では三浦さんに話しかけられ、運転免許の教本を貸すことになった。 下校時刻になっても雨はやまない。今日は真っ直ぐに家までの一本道を歩いて帰った。	「珍しいよね、倉沢さんが課題忘れるなんてさ。なんか、そういうとこ真面目なイメージあるから」 （三浦さん）
7	42～	公園	土曜日	セイ・ハナ・ハナの両親	朝目覚めると、今日も両親が一回のリビングで怒鳴りあっていた。いつからこんな風になったのだろう。服を着替えて、家を飛び出した。 雨空の公園の噴水で、ハナに声を掛けられた。「きみのこと憶えてた」と嬉しそうに言うハナに、セイはついぼかんとしてしまった。ハナは昨日もここに来ていたという。約束していたわけではないが、セイは申し訳ない気持ちになる。この前撮ったセイの写真を見せるハナ。話していると、ハナはこの前に会ったときの会話の内容をほとんど憶えていないようだ。ハナはそのとき気付いたかのように、苦笑いしながらセイに告げる。「僕の記憶、一日しかもたないんだ」 それでも、セイのことを憶えていたのは、「ずっときみのこと考えてた」からだという。ハナはとても恥ずかしくて、とても泣きそうな気持ちになる。「デートしよう」唐突に言い出したハナに手を引かれてセイは走り出す。空はすっかり晴れていた。	「そうなんだって……憶えておけよ、自分で言ったことくらい」 （セイ） 「また会えたらいいなって思ってたんだ。そしたら、また会えたね」 （ハナ）

○僕は何度でも、きみに初めての恋をする。／沖田円

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
8	62~	街	7の続き	セイ・ハナ	ハナとのデートは、住宅街のほうへ向かっていくという、とてもデートなんていう雰囲気ではないものだった。野良猫を見つけるたびカメラを抱えて走り出すハナを、セイは息を切らしながら追いかける。猫を追いかけた細い道の先、地平線まで見渡せる風景が広がっていた。セイはハナの言っていた記憶のことについて訊ねる。ハナは綺麗な目で、強がりもなく、記憶が保たないことを辛いと思っていないと語る。 この場所を秘密の場所にしよう、とハナは言う。憶えていられないハナのかわりにセイに憶えていてほしいと。「また、明日も会える？」その日から、セイとハナの約束のない約束がはじまった。	「なんにも憶えてないのってさ、うらやましい。わたしには忘れてしまいたいものがいつもたくさんあるのに、全然忘れられなくて。毎日どこまでも、その嫌な思いばかり続いていくから」（セイ） 「でも、僕は憶えていてもらいたいなあ」「僕のこと。セイちゃんに」（ハナ） 「僕にはね、たしかに過去も未来もないよ。今しかないんだ。だからその分、ここにある”今”をめいっぱい存分に味わいたいと思うんだよ。できるだけ鮮やかにね、少しだって零さないように」（ハナ）
9	88~	学校	昼休み	セイ・三浦さん	三浦さんに運転免許の教本を貸してあげた。ハナのことを聞いてみると、どうやら三浦さんも知っているらしい。ハナが中一のときに交通事故にあっているらしい。そこから記憶が一日しか保たなくなってしまうらしいということを教えてくれた。三浦さんは、突然ハナのことを訊ねてきたセイのことを怪しがり、「なんか進展あったら絶対教えてね」悪戯っぽい目でセイにそう言った。	「いやいや、わかってるよ。ナイショにしておくから。倉沢さんに彼氏いるなんて知れたら、悲しむ男子多そうだしね」（三浦さん）
10	97~	公園	学校帰り	セイ・ハナ	いつからか、ハナとセイのどっちが先に来るか、何となく競争するようになっていた。この日はセイのほうが早かった。携帯でハナのように風景の写真を一枚撮ってみる。「うん、いい写真だね」突然の声にセイは驚く。いつの間にか後ろに立っていたハナは制服姿で、セイは少し見とれてしまった。ハナに褒めてもらったこの写真も消せそうにない。	「かったいい。ハナ」（セイ） 「ありがとうセイちゃん。セイちゃんにそう言ってもらえるの、なんかとても嬉しい」（ハナ）
11	103~	公園	10の続き	セイ・ハナ	ハナとどうでもいい話をし続けた。セイはハナをいつかバイクの後ろに乗せてあげるといって、ノートにそのことを書き留める。『約束は嫌いなんだ』いつかハナが言った言葉が引っかかっていた。だからセイは「約束」はしないと決めている。	「原付はダメだけど、バイクの後ろに乗せてあげる。わたしそのうちバイクの免許も取るから」（セイ） 「よしじゃあセイちゃんが忘れないように書いておこう」（ハナ）
12	106~	公園	11の続き	セイ・ハナ・ハナのお兄さん	日が暮れてきて、そろそろ帰ろうと立ち上がると、丘の下にいたのはハナのお兄さんだった。ハナとお兄さんの話している様子を見ると、家族なんだと少し羨ましくなる。送っていくというハナだったが、セイは慌てて断る。セイはハナに、自身の日常に入ってきてほしくないという思いがあった。ハナにはいつもハナの世界にいてもらいたい。	「迎えに来なくていいって言ったでしょ。さすがに僕だってここから家までくらいひとりで帰れるよ」（ハナ） 「別に心配してるわけじゃないさ。お前はいつもひとりでふらふらするもんだからたまには付き合えて思っただけだろ」（ハナのお兄さん）
13	113~	セイの家	12の続き	セイ・セイの両親	ベッドで今日撮った写真を眺める。なぜ撮ったのか分からないが、たぶんハナの真似をしたかったんだと思う。思い出したことがあって、一階に向かうと、両親の怒鳴りあう声が聞こえて足が止まる。両親はセイの気配を感じてハッとこちらを向いた。無理に明るい声を出そうとする母親の顔は見ないで部屋に戻る。どうしたら、わたしたち、家族に戻れるんだろう。すごく、ハナに会いたくなった。	「何もないよ。もう寝るね」（セイ）
14	120~	公園	翌朝	セイ・ハナ	いつもより早く家を出て学校に向かう。小さいときに両親の手に引かれて見上げた星空を思い出すと、いつの間にか足が止まっていた。今にも零れそうなものを我慢するので精一杯だった。気がつくと別の場所に向かっていた。 「セイちゃん」ハナがいつもの丘の上で驚いたようにこちらを見ている。本当に会えるとは思っていなかった。涙が止まらないセイを見て珍しく慌てた様子でどうしたのかと訊ねるハナ。ハナはセイに、秘密の場所に連れて行ってほしいと願うする。	「泣きたい？セイちゃん」（ハナ） 「……泣きたくない」（セイ）

○僕は何度でも、きみに初めての恋をする。／沖田円

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
15	124～	秘密の場所	14の続き	セイ・ハナ	秘密の場所へ続く階段を「グリコ」のゲームで上っていく。無理やりな手を使って勝利するセイ。それを笑って見上げるハナ。セイははっとして、ハナのいる風景をフレームに収める。ハナの教えてくれた風景のなかに、ハナがいた。いつの間にか、セイの気分は軽くなっていた。セイはハナに自分の家族の問題を打ち明ける。	「僕はきみに何にもしてあげられないね。きみの考えているいろんなことを分けてもらうこともできないし、僕がいくらきみは綺麗だって言葉にしたって、伝わるのは結局それだけで、僕が本当に思ってることはどうしたって伝えられない」「でもね、思うよ。いつかきみが笑いたいときに笑って、泣きたいときに泣けたらって。そういう場所に辿り着けたら、そのときには、そばにいるよ」（ハナ） 「……わたしも、ハナのそばにいる」（セイ）
16	142～	公園	15の続き	セイ・ハナ	いろいろな場所を回って、気がつくと星空が浮かんでいた。セイが昔家族で撮った星空の写真。セイはそれを「見せてあげる」とは言えなかった。帰り道、三浦さんに出くわした。三浦さんはなにが納得したような表情を浮かべ、「また報告よろしく」といって帰っていった。ひとりで帰ろうとするセイをハナは何度も送っていくと主張するが、頑なに断るセイにしゅしゅ折れる。その代わりだと言って、ハナはセイを抱きしめた。セイは息が切れて足がもつれそうになるまでずっと走って帰った。いくら経っても体は熱いままで、心臓の音は世界中に響き渡りそうだった。	「セイちゃんがきちんと家に帰れるおまじない」（ハナ） 「こ、こんなことされたら、余計にきちんと帰れない!」（セイ）
17	160～	公園への道	土曜日	セイ・ハナのお兄さん	三浦さんから原付をゲットしたというメールが届く。朗らかな三浦さんには緑色の車体が良く似合っていた。セイは今日はどのくらい待つのだろうか、公園に向かいながら考える。「セイちゃん」という、聞き慣れたような聞き慣れないような声に振り返ると、ハナのお兄さんがいた。	なし
18	162～	カフェ	17の続き	セイ・ハナのお兄さん	ハナのお兄さんは、大学に向かう所だったという。そこで偶然見つけたセイに声を掛けたのだった。ハナのお兄さんは、ハナのそばにいてくれてありがとう、と言った。笑顔なのに、今にも泣きそうなその笑顔にセイは違和感を持った。お兄さんは、ハナが事故に遭った原因は自分にあると考えていて、責任を背負い込んでいたのだった。セイは、ハナがお兄さんのことが大好きだと語っていたときのことをお兄さんに話す。	「俺もハナのことがすごく大事なんだよ。大切な弟だ。だからこそだめなんだ。きっと本当はもう、俺はあいつの前にはいられないんだよ」「あのときの事故ね、信号無視した車があいつにぶつかったのが原因なんだけど。そもそも俺が、道路の反対側からあいつを呼んだのがいけなかったんだ。あいつよりも先を歩いてて、早くおいでって。そんなことを言わなきゃ、きっとあの事故は起きなかった」（ハナのお兄さん）
19	173～	公園	18の続き	セイ・ハナ	丘の上から舞ってきた紙が写真であることに気づき、あわてて全部拾い集めてから丘の上で寝ているであろうハナのもとに向かう。この写真のようにハナの記憶も飛んでいってしまうのかと思うと怖くなった。ハナのお兄さんとカフェに行っていたと言うと、ハナは少し嫉妬しているようだった。セイはそれが少し嬉しかった。仕返しにヤキモチ焼かせてやると言ってハナが見せたのは、ハナが飼っているコロという名の猫の写真だった。セイはこんなじゃヤキモチ焼かないと笑った。	「セイちゃんもかわいいよ。コロに負けてない」「だって対抗できないっていうからさ。そんなことないもん。セイちゃんも、誰かに自慢したくらいかわいい」（ハナ）
20	182～	公園	19の続き	セイ・ハナ	写真を整理していると、秘密の場所で撮った写真が出てきた。「これ、どこかな」とぼつりと呟いたハナに一瞬驚いてしまった。そうだ。ハナはもう忘れてしまったんだ。写真を整理していると時間があっという間に過ぎた。友達の家に行っていくと言って、セイはハナと別れた。ハナを誘ってみたが、意外にも断られてしまった。	「ハナも行く？顔見せたら喜ぶと思うけど」（セイ） 「ん、僕はいいや。また今度行く」（ハナ）
21	188～	ケーキ屋	20の続き	セイ・三浦さん・セイの両親	三浦さんが家族で経営しているケーキ屋に向かった。三浦さんは明るく迎えてくれた。両親の分も合わせて三つケーキを買って店を後にした。今日はみんなでケーキを食べよう。そして、思い出の写真の場所を聞こう。いつもより早足で家に帰る。家のドアを開ける、途端に聞こえたガラスの割れる音。怒鳴りあう両親。現実を突きつけられた気がした。いつからこうなってしまったのだろう。持っていたものを、ケーキも一緒に床に落として、セイは走って玄関を飛び出した。	「邪魔ならそう言ってよ。わたしがいないほうが好きに生きられるって。そうなんですよ、そうしたら今みたい怒鳴り合わなくて済むんですよ。いいんだよ、だって、どっちにしろ、お父さんとお母さんが離れちゃったら、わたし……」「わたしには、なんの意味もないよ」（セイ）

○僕は何度でも、きみに初めての恋をする。／沖田円

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
22	204～	公園	21の続き	セイ・ハナ	走って、走って、公園に着くと、どうしてか、ハナがいた。セイは溢れだす気持ちを抑えられず、ハナに辛い気持ちをすべてぶつけて泣いた。私なんか、消えちゃえばいい。そんな言葉もハナは受け止めてくれた。「いていいんだよ、セイちゃん」その言葉が、セイはずっと聞きたかった。	「消えたいとか、いなくなりたいとか、その気持ち嘘じゃないかもしれないけど。捨てたくはない大事なのも、セイちゃんにはきっとたくさんあるでしょう」（ハナ） 「わたし、ここにいたいよ。みんなで、一緒に」（セイ） 「いていいんだよ、セイちゃん」（ハナ）
23	210～	夜道 セイの家	22の続き	セイ・ハナ・セイの両親	ハナにいろんなことを話した。ハナの言葉が勇気をくれる。セイは両親に会いに走り出した。 真っ暗な道を駆けていくと、セイを捜している両親を見つけた。父も、母も、泣いているようだった。三人で手を繋いで家に帰った。家に帰ってから、今までのこと、抱えていた気持ちをすべて話した。少し、晴れたような気がした。ハナのおかげで見える世界が変わっていく。明日も、きみに会えるかな。	「僕はきみを助けてあげられない。でもね、沈んでるきみを引っ張り上げることならできるよ」「引き上げた先の景色が綺麗かどうかは僕にはわからないけれど、きみのいる世界だもん、きっとどんな場所より綺麗に決まってるはずなんだ。ねえ、セイちゃん」（ハナ） 「星が、いなきゃいいなんて、思ったこと一度もない。あたりまえでしょう。いる意味すら考えたことないくらい、どんなときだってお母さんたちには星が必要なの」（セイの母）
24	228～	公園	翌日	セイ・ハナ	とっておきの服を着て、ハナに会いに行く。両親は離婚することになったが、セイには不思議と寂しさはなかった。セイは以前から言っていた、昔撮った星空の写真をハナに見せた。その綺麗な光景に「行ってみたいなあ」と零したハナに、セイはハナを連れてその場所に連れていくと宣言する。『僕の名前は芳野葩』と書いたハナのノートに、セイは『好きな子の名前は倉沢星』と書き込む。 セイとハナは三浦さんのケーキ屋に行くことにする。三浦さんのことは昨日ハナに話したが、もう記憶の外に出て行ってしまっていたようだ。どうしてハナは昨日の夜、まだひとりで公園にいたのだろうか。そんなことを思ったが、楽しそうなハナの横顔を見るとどうでもよくなってしまった。	「散歩じゃなくてデートだよ」（ハナ） 「そうだった、デートだった」（セイ）
25	247～	（非明示）	（夢）	セイ	最近、ときどき夢を見る。鮮やかな夜の中に立つ夢だ。花畑の向こう、目を凝らすとハナがいる。ハナのもとに行きたいのにどんどんハナは遠くへ行ってしまう。――待って、ハナ。ハナは泣きそうな顔で笑っていた。	なし
26	248～	学校	休み時間	セイ・三浦さん	一人で雑誌を眺めていると、三浦さんに声を掛けられた。セイが見ていたのはカメラの扱い方の入門書だった。ハナといわれて幸せそうだという三浦さんに、セイは顔を赤くした。	「そっか、うん。でもうらやましいなあ。ふたりってほんと仲良しだよね」（三浦さん）
27	251～	セイの家	休日	セイ・ハナ・セイの母	一度だけ、セイはハナを自宅に招いた。ハナを母に紹介したいという思いもあり招いたのだが、セイはがちがちに緊張していた。母はセイの小さい頃の話をし、ハナは持っていたアルバムを母に見せたりした。セイはむすっとしながら紅茶をすすっていたが、母とハナが楽しそうに話している光景が素直に嬉しかった	「なんでセイちゃんはそんなにガチガチになってるわけ?」「言ったでしょ。僕だって緊張してるんだよ。当然でしょ、女の子の家に呼ばれてお母さんにも会うかもしれないくて。ドキドキしてんの、僕だって」（ハナ）
28	259～	帰り道	27の続き	セイ・ハナ	帰り道、ハナは突然切り出した。もし僕のことを嫌になったら構わず離れていっていい、と。そう言ったハナの笑顔は、綺麗に笑ういつもの顔とは違っていた。セイはハナの手を強く握り返した。そばにいてね、そばにいるから。そう、繋いだ手に、願うことしかできなかった。	「でもね、もしもきみが僕のことを嫌になったら、そのときは構わずに離れていっていいからね」（ハナ） 「わかったよ。でもその代わり、もしもハナがわたしのことを嫌になっても、わたし絶対、離れていかないから」（セイ）
29	266～	自宅 公園	ハナの検査の日	セイ・ハナ	引っ越しの手伝いをしていた。結局、母が家を出ていき、セイは父と家に残ることになった。寂しかったが、新たな始まりだと思って我慢した。 公園に向かうともうハナがいた。声を掛けるのがためられたのは、ハナがとても悲しそうな顔をしていたからだ。父にもらった古いカメラでハナをフレームに収めた。ハナに今日はどうするか尋ねると、珍しくここでのんびりしたい気分だと答えた。	「びっくりしたよ。でも隠し撮りはよくないな」（ハナ） 「その言葉そっくりそのまんまハナに返すよ。思い知れ、私の常日頃の恥を」（セイ）

○僕は何度でも、きみに初めての恋をする。／沖田円

シーン	ページ	場所	時間	人物	出来事	セリフ
30	272～	公園	29の続き	セイ・ハナ	日が暮れるには少し早い時間、セイは引っ越しの手伝いの続きをするために帰ると言った。そのときハナは同時に何かを言おうとしていたみたいだったが、何を言おうとしたかは言ってくれなかった。セイは言い知れない不安な気持ちになった。帰る間際、ハナ、ともう一度呼ぼうとしたが、「気を付けて」ハナが先にそう言うから、セイは頷くしかなかった。	「何？」（セイ） 「ん、僕はいいよ、すごくどうでもいいことだったから。セイちゃんは？」（ハナ）
31	274～	セイの家	30の続き	セイ・セイの母	自宅に帰り、母の引っ越しの手伝いをする。母と話しているといいセイは泣きそうになってしまう。リビングに戻ろうとするセイだったが、母の声に止められた。セイの表情が晴れないのを見抜かれていた。セイはハナに何ができるのかが分からなかった。母は、セイが今までしてもらっていたことを返せばいいと話す。ハナはいつでも、セイのそばにいてくれた。セイはもう一度、ハナに会いにに飛び出した。	「星はそうやって、すぐに自分の心隠しちゃうのが悪い癖ね。女は後先考えず突っ走るくらいが丁度いいの」（セイの母）
32	281～	公園	31の続き	セイ・ハナのお兄さん	公園に着くと、ハナのお兄さんがいた。ハナがノートもアルバムも家に置いたまま帰ってこないという。お兄さんは取り乱した様子で、ハナの記憶が持つ時間がどんどん短くなっていることを打ち明ける。ハナはその事実を知りながら、いつもセイに笑いかけてくれた。ハナのことを助けることはできない。でも、そばにいと決めた。セイは走り出した。	「平気なわけがないんだ。苦しいに決まってる。何も言わないだけで、人に心配かけたくなくて。あの馬鹿、本当に」（ハナのお兄さん） 「それでもわたし、そばにいる。ハナが泣きたくても泣けないとき、それから、笑いたいときに笑って、泣きたいときに泣けるようになったとき、わたしはハナのそばにいるって。決めてたんです」（セイ）
33	292～	秘密の場所	32の続き	セイ・ハナ	ハナがいる場所が分かっていたわけではない。ただ、なんとなくそこにいるんだろうと思っていた。ハナは秘密の場所にいた。ハナは言った。誰もいないところに行きたい。それは、いつかのセイの言葉と同じだった。ハナは涙を流した。忘れたくないんだ。セイちゃん、きみのことを。セイはハナの手を引いた。ハナに見せたい景色があった。	「わたしはハナがどれだけこの街が好きか知ってるよ。ハナが大好きな人も、ハナのことを大好きな人も知ってる。ハナだって、わかっているはずでしょう」（セイ）
34	300～	公園	33の続き	セイ・ハナ・ハナのお兄さん・三浦さん	公園の広場にはハナのお兄さんがいた。少しだけ、ハナを借ります。そう言って、三浦さんに持ってきてもらったヘルメットをハナに渡し、原付の後ろにハナを乗せる。エンジンの音で聞こえなかったが、ハナがありがとう、と言った気がした。	「えっと、ごめん。僕は、きみのことわかんなくて」（ハナ） 「いいんですそんなの。わたしのことは忘れちゃってください。だってそうしたら、一回しかできない初めての出会いを、何回だってできるじゃないですか。それってすごく素敵ですよね」（三浦さん）
35	304～	道	34の続き	セイ・ハナ	セイはハナに聞いた。わたしのこと、忘れたくない？ハナは忘れないようにと、セイの名前を叫ぶ。	「僕の名前は芳野葩！好きな子の名前は倉沢星!!」（ハナ）
36	308～	丘の頂上	35の続き	セイ・ハナ	アルバムにあった思い出の丘に着いた。初めて来た日から随分背が伸びたのに、それでも掴むことのできない星が鮮やかに広がっていた。今度は、ハナの姿をセイがシャッターに収める。ハナがセイのことを忘れたって、何度だってハナを見つける。いつまでもハナのそばにいる。何度だって、新しい出会いを繰り返して――。	「僕ね、きみと初めて出会った日のこと、憶えてないんだけど。でもこれだけは知ってるんだ」「僕はきみを初めて見つけたときから、きみのことが好きだった」（ハナ）
37	320～	公園	冬服の季節	セイ・ハナ	また今年も、冬服の季節が来た。セイは今日も公園に向かう。カシャ。シャッターを切ったその音に、ハナが振り返る。ハナはセイのことを憶えていない。でも、セイはハナのことを憶えている。何度だってはじめよう。きみとの出会いを、この先もずっと。これからもきみと一緒に。星の光るこの世界を、きみのそばで。	「僕はハナ」「きみは？」（ハナ）